

平成 30 年度
神戸市埋蔵文化財年報



2022

神戸市

平成 30 年度
神戸市埋蔵文化財年報

2022

神戸市

序

神戸市域には古来より多くの人々が住み、その営みの痕跡である遺跡が約 900 カ所も存在しています。

遺跡の範囲内で開発事業が行われる場合、遺跡から知ることができるかけがえのない地域の歴史を後世の人々に伝えるため、発掘調査を行い、人々の営みの痕跡について記録を取り、残しています。また調査から得た成果を市民の皆様に還元し、活用するための事業にも取り組んでいます。

本書では、平成 30 年度に実施した 16 遺跡、23 件の発掘調査の成果を概要として収録いたしました。本書が神戸の歴史と文化を学ぶための資料として、また、埋蔵文化財へのご理解を深めていただける一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和 4 年 3 月

神戸市

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成 30 年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

黒崎　直　　大阪府立弥生文化博物館館長

菱田哲郎 京都府立大学文学部教授
教育委員会事務局
教育長
教育次長
総務部長
教育施策推進担当部長
文化財課長
埋蔵文化財センター担当課長
埋蔵文化財係長
文化財課担当係長
〃 (保存科学担当)
事務担当学芸員
調査担当学芸員

埋蔵文化財センター担当学芸員
〃 (保存科学担当)
震災復興派遣職員 (熊本県益城町)

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行 5万分の 1 神戸市全國を、各遺跡の位置図は、神戸市発行 2,500 分の 1 都市計画図および国土地理院発行 25,000 分の 1 地形図「前開」を使用 した。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 事業の概要 のうち、1～4 については東が執筆し、5 については中村が執筆した。
- IV. 文化財科学的調査の成果は小林謙一・坂本稔・春成秀爾・尾崎大真・松崎浩之・安田滋・中村大介が執筆し た。(なお本報告については平成 19 年度に分析調査結果を頂戴していたが、ようやく此度 掲載するに至った。研究グループ各位に対してお詫びいたします。)

- 本書の編集は中村・佐伯が行った。
4. 調査現場の写真撮影、遺構・遺物図のトレースなどについては、各調査担当者が行った。

5. 表紙写真は、郡家遺跡第95次調査出土の古墳時代の遺物、裏表紙写真は生田遺跡第9次調査出土の提砥である。

目 次

長田 淳
後藤徹也
浜本泰幸
荒牧重孝
千種 浩
安田 滋
前田佳久
斎木 嶽 東 喜代秀 松林宏典
中村大介
池田 穀 阿部敬生 井上麻子
山口英正 佐伯二郎 浅谷誠吾 藤井太郎
石島三和 繁穂文佳 荒田敬介 小野寺洋介
田島靖大
内藤俊哉 井尻 格 阿部 功 中井菜加
山田侑生
中谷 正

例　　言

I.	事業の概要	
1.	事業体制	2
2.	開発指導	2
3.	埋蔵文化財調査事業	2
4.	刊行物一覧	3
5.	埋蔵文化財の公開活用事業	3
II.	平成 30 年度の発掘調査	
1.	本山中野遺跡 第 4 次調査	15
2.	本山遺跡 第 43 次調査	19
3.	西岡本遺跡 第 13 次調査	23
4.	住吉宮町遺跡 第 55 次調査	27
5.	郡家遺跡 第 95 次調査	29
6.	赤坂通遺跡 第 1 次調査	37
7.	日暮遺跡 第 48 次調査	41
8.	熊内遺跡 第 8 次調査	45
9.	雲井遺跡 第 40 次調査	49
10.	生田遺跡 第 9 次調査	53
11.	生田遺跡 第 10 次調査	63
12.	楠・荒田町遺跡 第 60 次調査	71
13.	楠・荒田町遺跡 第 61 次調査	79
14.	兵庫津遺跡 第 74 次調査	85
15.	兵庫津遺跡 第 75 次調査	95
16.	兵庫津遺跡 第 76 次調査	103
17.	兵庫津遺跡 第 77 次調査	119
18.	上小名田遺跡 第 22 次調査	127
19.	岡場遺跡 第 6 次調査～第 8 次調査	131
20.	垂水日向遺跡 第 38 次調査	137
III.	平成 30 年度の大規模試掘調査	
21.	城ヶ谷遺跡	141
IV.	文化財科学的調査の成果	
1.	神戸市内遺跡出土試料の ^{14}C 年代測定	148
2.	神戸市塩田北山東古墳木棺材の ^{14}C 年代測定	160

I. 事業の概要

1. 事業体制

神戸市教育委員会文化財課は、埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係体制で文化財の保護と活用を担っている。埋蔵文化財係に関する業務のうち、文化財保護法に関わる届出などの窓口業務、試掘調査や本調査の受託契約等の事務や補助金事務は市役所文化財課で行い、発掘調査終了後の出土品の復元や保存修復及びその後の管理と活用に関しては、神戸市埋蔵文化財センターで行っている。出土品や発掘調査で得られた写真や図面等は、記録保存のために空調管理した収蔵施設で保管し、さらにこれらを活用した企画展示、様々な体験学習、出張講座等は埋蔵文化財センターを中心として展開している。また、外部からの依頼による収蔵資料に対する資料調査や貸出にも対応している。

平成 24 年度より平成 29 年度まで、東日本大震災の復興調査支援のため、東北地方に学芸員を派遣してきたが、平成 30 年度については熊本地震の復興調査支援のため、新たに学芸員 1 名を熊本県益城町に派遣した。

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第 93 条・第 94 条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成 30 年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は 694 件（前年度 792 件）であり、このうち、民間事業者・個人による第 93 条の届出が 640 件（前年度 721 件）であった。また、開発行為事前審査 104 件（前年度 117 件）、試掘調査依頼は 104 件（前年度 138 件）であった。以上のように届出の件数は、平成 30 年度は 1 割程度の減少が認められた。試掘調査については、近隣データの活用や、建物の解体に伴う届出に関しては基礎解体時の立会を行うことで試掘調査を兼ねるようにしており、平成 30 年度は前年度より 25% 程度の減少となっている。窓口やファックス等による包蔵地の確認、問い合わせは年間で約 5,400 件であった。これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報を GIS データベースに集積し、それを基に可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

3. 埋蔵文化財調査事業

平成 30 年度に実施した埋蔵文化財調査事業は、調査事業 26 件、整理事業 4 件で、それに要した経費の総額は、89,189 千円であった。

国庫補助事業 発掘調査事業のうち、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は国庫補助事業として、規程と基準により公費を充当している。平成 30 年度の緊急発掘調査事業費は 33,000 千円であった。

市内発掘調査 発掘調査件数は、平成 29 年度とほぼ横這いの 26 件である。

発掘調査面積は 5,078 m²（延べ 8,000 m²）で、このうち民間関連事業によるものが 3,657 m²（延べ 6,554 m²）と 72% 近くを占めている。平成 29 年度に比して、公共事業がやや増加の状況にある。

面積別でみると、調査事業 25 件のうち 100 m²以下の調査が 21 件を占め、個人住宅などを中心にした小規模開発事業が多いことを示している。この要因の一つとしては、地震に対応できる建物基礎構造を確保するために、個人住宅においても地盤改良工事などで基礎が深くなり、造構などに抵触することが要因の 1 つであると考えられる。

また、平成 30 年度は埋蔵文化財調査の公開事業として熊内遺跡第 8 次調査の発掘調査現場の一般公開を実施した。

これまで刊行した発掘調査報告書については、準備の整ったものから奈良文化財研究所の「全国遺跡総覧」において公開を進めている。

表 1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法 93・94 条関係）	694 件
i	民間の事業に伴う発掘届（93 条）	
ii	公共の事業に伴う発掘通知（94 条）	
iii	発掘届・発見通知（92・96・97 条）	1 件
2	開発行為事前審査等各種申請	104 件
3	試掘調査（依頼件数）	104 件
4	発掘調査（大規模確認調査も含む）	25 件
i	民間事業に伴う発掘調査	
ii	公共事業に伴う発掘調査	
5	工事立会	71 件
6	整理作業（復興調査整理作業を含む）	4 件

表 2 発掘調査面積（単位：m²）

	民間関連事業	公共関連事業	合 計
調査面積	3,657	1421	5,078
延べ調査面積	6,554	1446	8,000

表 3 発掘調査面積別件数（試掘および確認調査を除く）

調査面積	件 数	%
~ 100 m ²	12 件	46
101 ~ 300 m ²	9 件	35
301 ~ 500 m ²	2 件	8
501 ~ 1,000 m ²	3 件	11
1,001 ~ 2,000 m ²	0 件	0
2,001 ~ 5,000 m ²	0 件	0
5,001 m ² 以上	0 件	0
合 計	26 件	100

4. 刊行物一覧

平成 30 年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『上沢遺跡発掘調査報告書 V』平成 31 年 3 月頒価 1,500 円、『本庄町遺跡 第 10 次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』平成 31 年 3 月頒価 800 円、『平成 28 年度神戸市埋蔵文化財年報』頒価 1,200 円、『神戸市埋蔵文化財分布図（平成 31 年度版）』頒価 500 円、『神戸はかつて焼き物の里だった～トウバンケイスエキの世界～』平成 30 年 10 月頒価 300 円、『山にぐらしのりたかう～神戸の山の考古学～』平成 30 年 4 月頒価無料、『土器のうつろい～時間と空間による変化～』平成 30 年 7 月頒価無料、『昭和のくらし・昔のくらし 13』平成 31 年 1 月頒価無料

5. 埋蔵文化財の公開活用事業

考古資料の調査・整理・保管および特別利用等

埋蔵文化財センターでは発掘調査の一環として出土遺物の復元・修復作業および金属製品・木製品等の保存科学的処置ならびに、発掘調査報告書の編集作業を行っている。修復・調査作業の完了した遺物および写真・図面等の記録類は主として埋蔵文化財センターにおいて保管され、公開活用事業や調査研究等の利用に供している。平成 30 年度における資料の特別利用は表 4 ~ 7 のとおりである。

埋蔵文化財センターにおける公開活用事業

埋蔵文化財センターでは展示や体験講座等、埋蔵文化財の公開活用事業を行っている。平成 30 年度の人館者数は 32,136 人であり、その内、市内小学校団体の入館が 144 校 8,234 名で全

表4 考古資料の館外貸出

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	大阪府立弥生文化博物館	企画展『弥生のマツリを探る』で展示	西求女塚古墳出土 三角縁神厭鏡（5号鏡） 〃 出土 〃 （9号鏡） 〃 出土 面像鏡（7号鏡） 新方遺跡出土 内行花文日光鏡系小型仿製鏡 森北町遺跡出土 重圓文銘帶鏡 松本遺跡出土 畫圓文小型仿製鏡 吉田南遺跡出土 内行花文鏡 玉津田中遺跡出土 鳥形木製品、男根形木製品 写真 同上 9点	9
2	兵庫県立考古博物館	特別展『装飾大刀と日本刀 - 燐めきの刀剣文化 -』で展示	新方遺跡出土 有柄式石劍 兵庫津遺跡出土 刀装具（目貫、小柄、鈸） 写真 同上 10点	10
3	古代歴史文化協議会 九州国立博物館	巡回展『玉 - 古代を彩る至宝』で展示	住吉東古墳出土 滑石製双孔円盤（2点） 〃 出土 滑石製白玉（50点）	52
4	滋賀県立安土城考古博物館	企画展『君にそっくりな古代人がいたよ - 原始・古代の人物表現 -』で展示	長田神社境内遺跡出土 土偶 生田遺跡出土 土偶 寄井遺跡出土 土偶 篠原遺跡出土 土偶	4
5	南あわじ市教育委員会	企画展『作る』で展示	西神 NT 内第 65 地点遺跡出土 銅鐸鋳型未製品(1対)	1
6	神戸市立博物館	常設展示に使用	五色塚古墳出土 肇付円筒埴輪	4
7	兵庫県立考古博物館	特別展『織文土器とその世界 - 兵庫の1万年 -』で展示	写真 都賀遺跡出土織文深鉢ほか 9点	47
8	兵庫県立考古博物館	企画展『発掘された銅鏡』で展示	森北町遺跡出土 重圓文銘帶鏡 写真 同上 1点	1

体の約1／4を占めている。4・5月は6年生の歴史学習が始まる時期であり、「弥生時代」や「古墳時代」等の学習のために、また1・2月には「人びとのくらしのうつりかわり」として“ちょっと”昔のくらしを学習する3年生が、冬季企画展『昭和のくらし・昔のくらし』展を見学するために来館している。この時期には市内のみならず、近隣市町からの小学校団体も来館している。

企画展の開催 埋蔵文化財センターでは平成3年の開館以来、毎年数回の企画展を開催しており、平成17年度より年4回以上の企画展を開催している。平成30年度は表8のとおり4回の企画展を開催した。

春季企画展は先述したとおり、小学校6年生の歴史学習導入に際し、歴史に興味が持てるようなわかりやすい展示を心掛けている。当年度は『山にくらし、いのり、たたかう～神戸の山の考古学～』と題し、生活の舞台としての「山」について「くらす」「いのる」「たたかう」という3つのテーマからなる展覧会を開催した。会期中、展示関連をテーマとし、外部講師を招聘した講演会をはじめ、当課学芸員による展示解説とパックヤード見学会を実施した。

夏季企画展は、遺跡から出土する資料の中で最も普遍的な「土器」に着目した『土器のうつろい～時間と空間による変化～』を開催した。展示では1万6000年前に始まった日本列島の土器の歴史と技術変化を、市内遺跡出土の土器類をはじめ、他市町からの借用資料などの資料によって概観した。

秋季企画展では『神戸はかつて焼き物の里だった～トウパンケイスエキの世界～』を開催した。東播系須恵器は平安時代後期から鎌倉時代にかけて東播磨地域で生産された焼き物で、神戸市西区の神出窯跡群で出土する須恵器・瓦は京都や太宰府にも運ばれた。これら神出土の

表5 考古資料の特別利用

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	大阪府立弥生文化博物館	企画展『弥生のマツリを探る』出品予定資料の事前調査	西求女塚古墳出土 三角縁神獸鏡（3号鏡） 〃 出土 〃 （9号鏡） 新方遺跡出土 内行花文日光鏡系小型仿製鏡 森北町遺跡出土 重圓文銘鉢鏡 松本遺跡出土 重圓文小型仿製鏡 吉田南遺跡出土 内行花文鏡 玉津田中遺跡 鳥形木製品、男根形木製品	9
2	個人	学術研究	瑞谷城跡第1次～第5次調査出土 瓦	一
3	個人	修士論文執筆	紙面遺跡出土 貿易陶磁	45
4	兵庫県立考古博物館	古代歴史文化協議会主催企画展『玉一古代を彩る至宝一』出品資料の事前調査	住吉東古墳出土 滑石製双孔円盤（2点） 〃 出土 滑石製白玉（50点）	52
5	兵庫県立考古博物館	特別展『装飾大刀・埋めきの刀剣文化 -』出品予定資料の事前調査	新方遺跡出土 有柄式石劍（1点） 兵庫津遺跡出土 刀装具（目貫、小柄、鈔）（10点）	11
6	個人	学術研究	楠・荒田町遺跡出土 コナラ属椎実	50
7	個人	学位論文執筆	白水瓢箪古墳出土 石製腕節類	13
8	個人	博士論文執筆	新方遺跡出土 人骨（8号、12号、13号）（3点） 舞子浜遺跡出土 人骨（1点）	4
9	滋賀県立安土城考古博物館	企画展『君にそっくりな古代人がいたよ - 原始・古代の人物表現 -』出品資料の事前調査	長田神社境内遺跡出土 土偶 生田遺跡出土 土偶 雲井遺跡出土 土偶 難波遺跡出土 土偶	4
10	東播西研研究会	学術研究	宅原遺跡出土 墨書き土器（4点） 吉田南遺跡出土 木簡、漆紙文書、墨書き土器（15点）	19
11	個人	卒業論文執筆	大間遺跡出土 石棒	12
12	個人	学術研究	雲井遺跡出土 織文土器	291
13	(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター	学術研究	大歳山遺跡出土 織文土器	一
14	個人	学術研究	兵庫津遺跡出土 クジラ骨	2
15	個人	学術研究	瑞谷城跡第1次～第5次調査出土 瓦	15
16	個人	学術研究	戎町遺跡出土 弥生土器（4点） 北青木遺跡出土 弥生土器（13点）	17
17	個人	学術研究	西求女塚古墳出土 三角縁神獸鏡（2～5、8～10号鏡：実物） 〃 出土 〃 （同上：複製品） 塩田北山東古墳出土 三角縁神獸鏡	15
18	個人	学術研究	大間遺跡出土 弥生土器	20
19	和歌山県立紀伊風土記の丘	特別展『開かれた棺 -紀伊の横穴式石室と黄泉の世界-』出品予定資料の事前調査	新内古墳出土 双脚輪状文形埴輪	1

表6 考古資料の掲載・調査成果の公表

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	個人	『東海京葉史研究論集』に掲載	紙面遺跡出土 潤美焼大甕	1
2	個人	大阪大学考古学研究室刊『考古学研究室開設 30周年記念論集』に掲載	白水瓢箪古墳出土 石製品	一
3	NHK エデュケーションナル	NHK制作『Japanology Plus ~お墓~』に使用	新方遺跡出土 人骨	2
4	広島テレビ放送 株式会社	同社制作『世界を変える清盛脳』に使用（再放送・航空路線機内放映）	紙面遺跡出土 貿易陶磁、齒錢（8点） 二葉町遺跡出土 青磁、白磁（14点） 湯ノ奥遺跡出土 銅錢（11点） 楠・荒田町遺跡出土 銅錢（13点）	46
5	たるみナビ 同好会	同会刊『たるみナビ』に掲載	平成30年度五色塚古墳まつり 開催状況写真	6
6	月刊 神戸っ子	同社刊『月間 神戸っ子』、同HPに掲載	垂水日向遺跡出土資料（弥生土器、飯糰壹、土鍬、流木、葉、地層便記バトル）	一
7	個人	"熊本大学刊『先史学・考古学論究』VIIに掲載 ①兵庫津遺跡出土 下駄実測圖（11点） ②新方遺跡 3号人骨平面図・出土石鏡実測圖（2点） 第15号に掲載"	①兵庫津遺跡出土 下駄実測圖（11点） ②新方遺跡 3号人骨平面図・出土石鏡実測圖（2点）	13
8	個人	『民族考古学から見た世界』に掲載	楠・荒田町遺跡出土 コナラ属椎実	一
9	株式会社 同成社	同社刊『東アジアの銅鏡と社会』に掲載	森北町遺跡出土 重圓文銘鉢鏡 長田神社境内遺跡出土 単線波文小形仿製鏡	4

表7 画像データ等の貸出

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	岡山電気鉄道㈱	同社刊『シティライフ』に掲載	五色塚古墳 写真	2
2	拂スリーシーズン	講談社刊『石垣の名城 完全ガイド』に掲載	兵庫津遺跡第62次調査 兵庫城石垣写真	2
3	戎光祥㈱	同社刊『神戸の歴史ノート』に掲載	兵庫津遺跡第62次調査 兵庫城石垣写真	1
4	神戸市立博物館	『神戸市立博物館だより』No.114号に掲載	深江北町遺跡出土 木簡 赤外線写真	4
5	兵庫県教育委員会文化財課	県政広報 HP『それいけ！センモンイン』に掲載 企画展「黒政150周年記念展 兵庫県誕生」に使用	兵庫津遺跡第62次調査 写真	1
6	柳竹中工務店	『工事概要書』に掲載	本庄村遺跡 写真	5
7	拂ゼネラルアサヒ	宝ヘルスケア発刊『ぶらっと、こんぶん録』に掲載	処女塚古墳 写真	1
8	拂NHKプラネット	NHK制作『ごこナマ』に使用	五色塚古墳 写真	2
9	拂岩波書店	同社刊『唐物の文化史・舶来品から見た日本』に掲載	紙團遺跡出土 犬環袖小碗 写真	1
10	拂文化財サービス	3Dモデル画像、レプリカの製作	神出窓跡群出土 鬼瓦 実測図・3Dデータ	2
11	古代歴史文化協議会	同会刊『玉一古代を彩る至宝』に掲載 巡回展「玉－古代を彩る至宝－」展示パネルに使用	新方遺跡出土 滑石製品 写真 住吉東古墳全景 写真	2
12	北國新聞社	『石川県高校入試2019』に掲載	五色塚古墳 航空写真	1
13	拂雄山閣	同社刊『学刊考古学』別冊26号に掲載	西求女塚古墳 墳丘葺石 写真	1
14	(一社)兵庫県建設業協会	同会刊『トライアングル』No.263に掲載	五色塚古墳 航空写真	5
15	(有)スタジオバラム	メイツ出版株式会社刊『古墳のひみつ(仮)』に掲載	五色塚古墳 航空写真ほか	4
16	神戸市立博物館	垂水区勤労市民センター講演会資料(18点)、 宜佐チラシ(1点)に掲載	垂水日向遺跡 写真	19
17	神戸市西区役所	西区役所発行『来て・見て・楽しいまち西区』に掲載	王塚古墳 航空写真	1
18	明石市	企画展「発掘された明石の歴史展」展示図録に掲載	兵庫津遺跡第62次調査 石横井戸 写真	1
19	拂ジパング	関西テレビ放送制作『報道ランナー』「今昔さんぽ」で使用	五色塚古墳 調査・まつり等写真(7点)・ CG画像(1点)	8
20	拂光文書院	同社刊『社会科資料集6年』に掲載	五色塚古墳 航空写真	1
21	拂日企	日本テレビ制作『ザ！鉄腕！DASH!!』に使用	新方遺跡出土 鮎壺 写真	1
22	拂地人館	桜出版社刊『歴代天皇のご略歴(仮)』に掲載	五色塚古墳 航空写真	1
23	NPO 兵庫県賛友会	同会刊『きぼう』No.143に掲載	アケボノゾウ骨格模型 写真	1
24	個人	兵庫考古談話会講演に使用	本庄村遺跡第10次調査出土 実測図	15
25	個人	F Mわいわいネット放送『長田今昔物語 千夜一夜』に使用	行幸町遺跡第4次・2箇査出土 人骨 写真	1
26	拂洋泉社	同社刊『歴史 REAL 天皇の歴史』に掲載	福原京完成想像 CG画像	1
27	神戸市立博物館	同館常設展示に使用	市内埋蔵文化財調査・出土資料 写真・CG 画像	68
28	朝日新聞大阪本社	朝日新聞夕刊文化面『災害考古学』、同ホームページに使用	旧神戸外国人居留地遺跡第1次調査 写真	3
29	神戸の文化発信実行委員会	文化庁補助事業「茅葺き民家で日本文化を 体験」資料に掲載	住吉東古墳出土 家形埴輪 写真	1
30	拂帝国書院	同社刊『社会科中学生の歴史 一日本の歩 みと世界の動き』に掲載	五色塚古墳 航空写真	1
31	(一社)建設コンサルタント協会	同会刊『Consultant』第283号に掲載	五色塚古墳 航空写真	1
32	明石市	明石市刊『明石の歴史』第2号に掲載	吉田南遺跡出土 墓書き土器 写真(1点) 神出窓跡群 調査・出土瓦 写真(8点)・ 図データ(1点)	10
33	兵庫県立考古博物館	特別展『織文土器とその世界－兵庫の1万 年－』展示パネル・図録に掲載	西岡本遺跡織文時代建物跡 写真	1
34	拂旺文社	同社刊『中学入試で順過去問歴史年表 合格への685問』に掲載	五色塚古墳 航空写真	1

表8 企画展

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
山にくらし、いのり、たたかう～神戸の山の考古学～	4/14(土)～5/27(日)	42	5,487
土器のうつろい～時間と空間による変化～	7/14(土)～9/2(日)	44	2,824
神戸はかつて焼き物の里だった～トウバンケイスエキの世界～	10/13(土)～12/2(日)	44	3,437
昭和のくらし・昔のくらし 13	1/19(土)～3/3(日)	44	8,987

表9 歴史講演会・ワークショップ

開催日	講演名	講師	参加者数
4月22日	考古学からみた山の祭祀・海の祭祀	元兵庫県立考古博物館 大平茂氏	25
10月14日	神出窯 -西日本の中世窯業の草分け-	元兵庫県立考古博物館 森内秀造氏	42
10月27日	ワークショップ 軒瓦の拓本に挑戦	神戸市教育委員会学芸員 内藤俊哉	7
11月23日	都を飾ったトウバンケイの瓦	京都市埋蔵文化財研究所 上村和直氏	52

資料はじめ、各消費地からの出土資料をもちい、その歴史と社会背景について掘り下げた。

また企画展開催に際して記念講演会を以下の通り2回実施した。10月14日には元兵庫県立考古博物館の森内秀造氏を招き「神出窯 -西日本の中世窯業の草分け-」というテーマで、11月23日には公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の上村和直氏を招き「都を飾ったトウバンケイの瓦」と題した講演会を開催した。また会期中、東播系須恵器窯で製作された瓦にちなんだワークショップ「軒瓦の拓本に挑戦」を実施した。

冬季企画展は今回で13回目となる『昭和のくらし・昔のくらし』を開催し、昭和のくらしを身近に体験できる展示を行っている。この企画展は小学校3年生の学習課程に則した展示でもあるため、小学校団体の見学が多い。一方で、昭和の電化製品や玩具などに実体験をもつ幅広い世代の方々からも好評を得ている。特に昭和30～40年代の茶の間と台所を実物大で再現したジオラマ展示の前では、2世代、3世代にわたる世代間での話題が膨らみ、好評を博した。

企画展に関連したイベントとしては、埋蔵文化財センターボランティアスタッフが主力となり「昭和のあそび昔のあそび」を開催した。会場では割りばし鉄砲づくり・こま回し・竹馬・糸巻き車などの昔懐かしい遊びをはじめ、神戸市立西図書館司書の皆さんによる絵本の読み聞かせなど、子供たちの笑顔があふれた一日だった。また旧車運転同好会の協力のもと「昭和の車大集合」とし、昭和時代のレトロな車10台が集まってのパレードや乗車体験を実施した。

体験考古学講座 夏休みの期間を中心に、「体験！考古学講座」を実施した。土器や勾玉、銅鐸など、遺跡の発掘調査からの出土品の製作技法を学び、それに近い方法によって古代の物づくりを体験する講座で、参加は小学校4年生以上を対象としたものである。11種全12回の講座で、のべ571名が受講した。

歴史講演会 各企画展のテーマにあわせ展示をより深く理解できるような内容で、先述のとおり春季および秋季の企画展に際し、外部講師による講演会を3回開催した。のべ119名が聴講した。

表10 こうべ考古学

月 日	講 演 名	講 師	参加者数
6月 16日	地下からわかる東灘・灘区ヒストリー	神戸市教育委員会学芸員 佐伯二郎	71
7月 14日	地下からわかる中央・兵庫区ヒストリー	神戸市教育委員会学芸員 前田佳久	58
9月 22日	地下からわかる長田・須磨区ヒストリー	神戸市教育委員会学芸員 安田滋	57
10月 20日	兵庫区ヒストリーロードを歩く	神戸市教育委員会学芸員 内藤俊哉	27
11月 17日	地下からわかる北区ヒストリー	神戸市教育委員会学芸員 中村大介	67
12月 15日	地下からわかる垂水区ヒストリー	神戸市教育委員会学芸員 繁縄文佳	73
2月 2日	地下からわかる西区ヒストリー	神戸市教育委員会学芸員 阿部功	93
3月 2日	熊内遺跡の整理報告	神戸市教育委員会学芸員 繁縄文佳	71
	郡家遺跡の整理報告	神戸市教育委員会学芸員 田島靖大	
	本庄町遺跡の整理報告	神戸市教育委員会学芸員 中井菜加 山田侑生	

連続講座「こうべ考古学」 全7回の連続講座で、今回は市内9区それぞれに所在する遺跡の特徴に注目した入門編として、全9区を6つのエリアに分けて解説した。また第7回の最終回には、「神戸発掘最新情報」として当該年度に実施した熊内遺跡・郡家遺跡・本庄町遺跡の調査成果報告と、本庄町遺跡より出土した田下駄関連木製品について報告を行った。また番外として「兵庫区ヒストリーロードを歩く」と称するウォーキングイベントを開催した。のべ517名の参加があった。

出張考古学講座・出張授業・出張講義 埋蔵文化財センターで実施する体験考古学講座以外に、市内小学校や公民館からの依頼により学芸員が赴き、勾玉づくりや土器づくりの体験講座や、地域の歴史について授業や講義を行っている。当年度は17団体（うち小学校12校）、3,333名（うち小学校790名）の参加があった。

学校等との連携授業 連携協定を結んでいる神戸学院大学の博物館学芸員課程の実習として、学生が企画した展示テーマについて実習指導を行い、11月10日～12月1日に同大学図書館において「海の幸」「焼き物の表情～神戸市出土品の文字・文様・絵～」の2テーマの展示を開催した。

夏季、各大学より博物館実習生を受け入れている。当年度は8月7日～11日の5日間、関西学院大学、京都外国语大学、神戸学院大学、神戸芸術工科大学、神戸女子大学、立命館大学から計10名の実習生を受け入れ、考古資料の取り扱いや展示保管環境の測定、資料の写真撮影、保存科学、展示企画立案などの実習を行った。

5月28日～6月1日および11月5日～9日の2回、兵庫県内の中学校2年生の職業体験プログラムである「トライやるウィーク」に協力し、市内17校から計29名の生徒を受け入れた。実際に出土した土器の水洗や木製品の保存処置作業など、埋蔵文化財センターでしかできない業務を体験してもらった。

また毎年、神戸市小学校教育研究会社会科部と連携し、神戸市生涯学習支援センター「コミスタこうべ」において9月に開催される小学生の夏休み自由研究作品展である『神戸市小学校社会科作品展』において、考古学的な遺物や遺跡に関する優秀な研究作品を36点選定し、『埋蔵文化財センター賞』を授与した。

地域連携事業

埋蔵文化財センターでは、地域で開催しているイベントや区役所、図書館などと隨時連携し、埋蔵文化財の公開活用事業を実施している。

地域事業への参加協力 西区では西図書館主催の「2018 西図書館自由研究相談室」において、学芸員が「神戸の遺跡相談室」と題した講座を開催した。また夏休みの期間中両館を回るクイズスタンプラリー「お宝だいぼうけん！8」を実施した。

「五色塚古墳まつり」の開催 垂水区に所在する国史跡五色塚古墳の活用促進を目的として、平成 26 年度より垂水区役所と連携し『五色塚古墳まつり』を行っている。当年度は 6 月 9 日に開催した。これに先立つ 6 月 1 日には、地元霞ヶ丘小学校の 6 年生（188 名）に授業の一環として小型の円筒埴輪を作ってもらった。まつり当日には韓国打楽器グループ「コルモッキル」の打ち鳴らす音楽の中、各々が古代衣装をまとい、自分の作った埴輪を携えて古墳の周囲を練り歩き、墳頂にその埴輪を並べて古墳のマツリを疑似体験した。午後には一般の方も参加できる「勾玉作り」「鏡づくり」「土器・埴輪づくり」などの古代体験メニューを実施した。午前・午後合せて 892 名の参加者があった。

「おおとし山まつり」の開催 例年、文化財保護強調週間（11 月 1 ~ 7 日）の期間中、垂水区にある市史跡大歳山遺跡（舞子細道公園）において、垂水区役所との連携事業として「おおとし山まつり」を開催している。当年度は 11 月 4 日に実施し、遺跡公園内に復元している弥生時代の竪穴建物の公開と、「勾玉づくり」「土器づくり」「塩づくり」「赤米試食」などいろいろな古代体験イベントを開催した。当日は 692 名の参加があった。

「西区地域学」の開催 西区役所と連携し、年 1 回、西区とその周辺地域に所在する文化財を巡るバス見学会を開催している。13 回目となる当年度は、「探訪！西神戸の名勝庭園」と題し、11 月 18 日、太山寺安養院（伊川谷）、歓喜院（伊川谷町）、如意寺福聚院（櫛谷町）、本松寺（明石市）をマイクロバスで移動して見学した。34 名の参加があった。

史跡五色塚古墳の公開

垂水区所在の史跡五色塚古墳は、日本で初めて築造当時の姿に復元された、実際に墳丘上に立つことのできる巨大前方後円墳として全国的に有名であり、歴史学習の場として学校教育・社会教育に活用されている。また明石海峡を望む絶好のビューポイントとして多くの見学者がある。平成 30 年度の入場者は 36,620 人であった。見学に訪れた小学校団体および希望のあった団体に対しては、学芸員が現地において解説を行った。



fig.1 体验考古学講座「古代編みでコースターを作ろう」



fig.2 トライやるウィーク



fig.3 西区地域学「探訪！西神戸の名勝庭園」(歓喜院)



fig.4 体验考古学講座「縄文土器を作ろう」



fig.6 冬季企画展関連イベント「昭和の車大集合」



fig.5 五色塚古墳まつり



fig.7 同上 「昭和の遊び 昔の遊び」

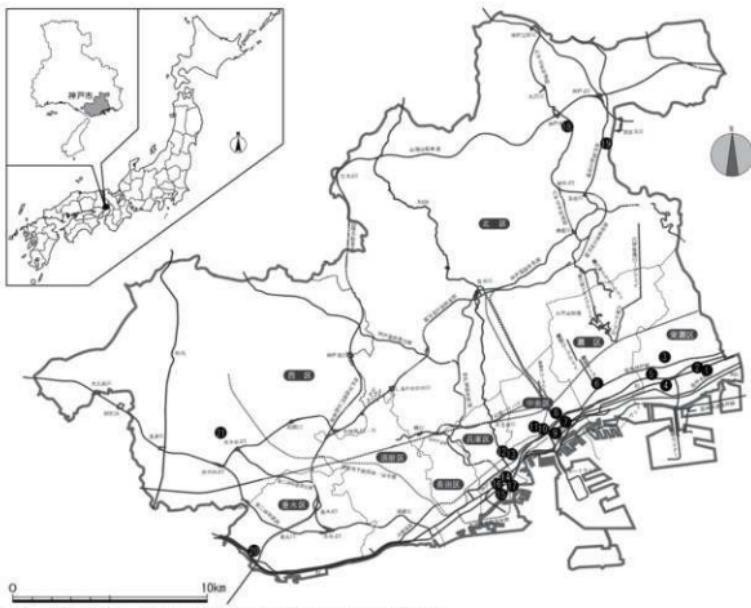
事業の概要

表 11 埋蔵文化財発掘調査一覧

	遺跡名	所在地	調査担当者	調査面積 (m²) 試調面積 (m²)	調査期間	調査内容	調査原因
1	本山町遺跡 第4次調査	東灘区本山町8丁目2番2号・4号、2丁目1番	佐伯二郎 小野寺洋介	85 255	30.9.5～ 30.9.28	自然路と弥生時代後期、古墳時代中期～奈良・平安時代、中世以前と想定される遺物含層を検出。	事務所建設
2	本山町遺跡 第5次調査	東灘区本山町9丁目49番	荒田敬介	50 100	30.11.26～ 30.12.21	弥生時代中期と奈良時代前期～中期の遺構面を検出。 式神社跡を出土。	共同住宅建設
3	西岡山遺跡 第13次調査	東灘区西岡本5丁目12-7	山口英正	14 14	30.5.14～ 30.5.16	弥生時代後期末から古墳時代初期の遺物含層と遺構を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
4	住吉町遺跡 第55次調査	東灘区住吉町3丁目9番	池田毅	27 27	30.7.12～ 30.7.18	古墳時代中期～後期のピット。落ち込みを検出。	共同住宅建設
5	都家原跡 第9次調査	東灘区東灘区御影2丁目31番1	山口英正 田島晴大	400 800	30.11.26～ 31.2.8	弥生時代後期～古墳時代初期。古墳時代中期後半～後期の堅穴建物、瓶状土器物や自然流層を検出。	共同住宅建設
6	赤坂遺跡 第1次B調査	灘区赤坂3丁目5番4～5	磯顧文佳	114 114	30.4.1～ 30.4.6	弥生時代の土器、中世の流路、溝、土坑などを検出。 前年度から継続調査。	共同住宅建設
7	日暮遺跡 第48次調査	中央区重要通1丁目429番、430番の一部	阿部牧生 磯顧文佳	128 277	30.4.2～ 30.5.11	弥生時代後期の堅穴建物、溝、土坑、ピットを検出。中世の溝、ピットを検出。	共同住宅建設
8	堀内遺跡 第8次調査	中央区堀内横通6丁目302-2,303,304,305,311,352番	磯顧文佳 田島晴大	637 665	30.8.7～ 30.10.18	弥生時代後期の堅穴建物、溝、落ち込み、土坑などを検出。	共同住宅建設
9	芦井遺跡 第40次B調査	中央区祇園5丁目325番1、325番2、331番、332番	阿部 功	233 456	30.4.1～ 30.4.9	弥生時代の溝、土坑、ピット、落ち込みや中世のピットを検出。 前年度から継続調査。	ホテル建設
10	生田遺跡 第9次調査	中央区下山手通2丁目11番12	荒田敬介	100 200	30.6.18～ 30.7.4	古墳時代中期後半～後期前半の堅穴建物、溝、古墳時代後期～飛鳥時代の溝などを検出。	ホテル建設
11	生田遺跡 第10次調査	中央区下山手通3丁目13-16ほか	佐伯二郎 小野寺洋介	222 990	30.11.26～ 30.1.31	畿内式後期の土坑、平安時代～鎌倉時代の溝、ピットなどを検出。	共同住宅建設
12	楠・荒田町遺跡 第60-1次調査	兵庫区楠町2丁目19荒田公園内	石島三和	650 650	30.5.21～ 30.7.5	谷の頭端が中世に削平され、改変された地形であることを得知。	阪急消防庁防災建設
13	楠・荒田町遺跡 第60-2次調査	兵庫区楠町2丁目19荒田公園内	山口英正	15 15	30.10.29～ 30.10.30	谷地地形内で弥生時代中期の遺物を検出。	阪急消防庁防災建設
12	楠・荒田町遺跡 第60-3次調査	兵庫区楠町2丁目19荒田公園内	石島三和	56 56	30.2.4～ 30.2.24	旧耕作土面下で弥生土器を含む土石流層を確認。	阪急消防庁防災建設
13	楠・荒田町遺跡 第61次調査	兵庫区楠町1丁目2番22号	佐伯二郎 小野寺洋介	170 170	30.5.30～ 30.7.2	室町時代の溝、土坑を検出。弥生時代～古代の土器が出土。	共同住宅建設
14	兵庫津遺跡 第74次調査	兵庫区兵庫津2丁目1-25-1番26	西岡山川 藤井太郎	183 188	30.4.4～ 30.5.2	室町時代の遺構・遺物を検出。土塁遺構集落遺構を検出。	共同住宅建設
15	兵庫津遺跡 第75次調査	兵庫区切口町6番	藤井太郎	130 520	30.10.15～ 30.12.6	17世紀以降の遺構面を4面検出。繩羽口や涙溝が出土。	共同住宅建設
16	兵庫津遺跡 第76次調査	兵庫区三川口町1丁目10～14	石島三和	90 480	30.10.29～ 30.12.28	13世紀から幕末まで6面の遺構面を確認。街路と建物を検出。	共同住宅建設
17	兵庫津遺跡 第77次調査	兵庫区御厨尾原2丁目2番18、2番21	浅谷誠吾	36 130	30.11.26～ 30.12.20	14世紀から19世紀の9面の遺構面を確認。18世紀後半～19世紀初頭のピット、土坑、礎數を検出。 (次年度へ継続)	事務所建設工事 (国庫補助事業)
18	上小田町遺跡 第22-1次調査	北区八多町上小田町	山口英正 田島晴大	59 59	30.6.4～ 30.6.13	平安時代の木相羅、土坑、柱穴を検出。	交差点整備改良事業
18	上小田町遺跡 第22-2次調査	北区八多町上小田町	山口英正 田島晴大	168 168	30.8.27～ 30.10.2	交差点整備改良事業	
19	岡場遺跡 第6次調査	北区有野町3丁目24番8	中井菜加	23 23	30.4.23～ 30.5.2	中世の柱穴と考えられるピットを検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
19	岡場遺跡 第7次調査	北区有野町3丁目24番11	阿部牧生	15 15	30.6.3～ 30.6.7	中世の土器類、須恵器が出土。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
19	岡場遺跡 第8次調査	北区有野町3丁目24番12	浅谷誠吾	60 60	30.9.10～ 30.9.21	12世紀～13世紀の可能性が高い柱穴2基、土坑3基を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
	松原城跡 第1-a調査	北区延暦町下宇治西山1370-1-10-1	佐伯二郎 磯顧文佳 小野寺洋介	875 875	31.3.18～ 31.3.31	平垣跡、土壙を検出。(次年度へ継続)	宅地造成
20	垂水小学校遺跡 第38次調査	垂水区垂水町2丁目4-6(垂水小学校)	荒田敬介	23 23	30.10.1～ 30.10.5	平安時代～鎌倉時代と考えられる土坑1基、南北溝1条、ピット1基を検出。	エレベーター設置工事
20	五色塚古墳 (試掘調査)	垂水区五色山4丁目	浅谷誠吾	50 75	30.6.25～ 30.7.4	五色塚古墳、小亞古墳と同時期の遺構面を確認。	学童保育コーナー建設
21	城下寺遺跡 (大規模試掘)	西区被谷町菅野	山口英正 藤井太郎 田島晴大	400 400	31.2.5～ 31.3.5	羅致調査。堅穴建物や土坑を検出。	神戸西バイパス建設
			調査面積合計	5,078 m²			
			延調査面積合計	8,000 m²			

表 12 出土遺物整理事業一覧

	遺跡名	担当者	実施期間	事業内容	調査原因
1	本生町遺跡 第10次調査	中井菜加 中村大介 阿部功 山田寅生	30.4.2～ 31.3.29 (3ヶ月行)	出土遺物整理・記録類整理、報告書作成(平成31年3月)	社屋建築工事
2	都留遺跡 第21次調査	藤井太郎	30.4.2～ 30.10.31 (6ヶ月行)	出土遺物整理・金銀製品保存処理、遺物安置	街路整造工事
3	上沢遺跡	山口英正 佐伯二郎 小野寺洋介 中村大介	30.4.1～ 31.3.31 (3ヶ月行)	出土遺物整理・遺物実測、報告書作成(平成31年3月)	国庫補助金
4	五色塚古墳	中村大介 阿部功	30.4.1～ 30.11.30	五色塚古墳出土編成採入作業	復元整備事業



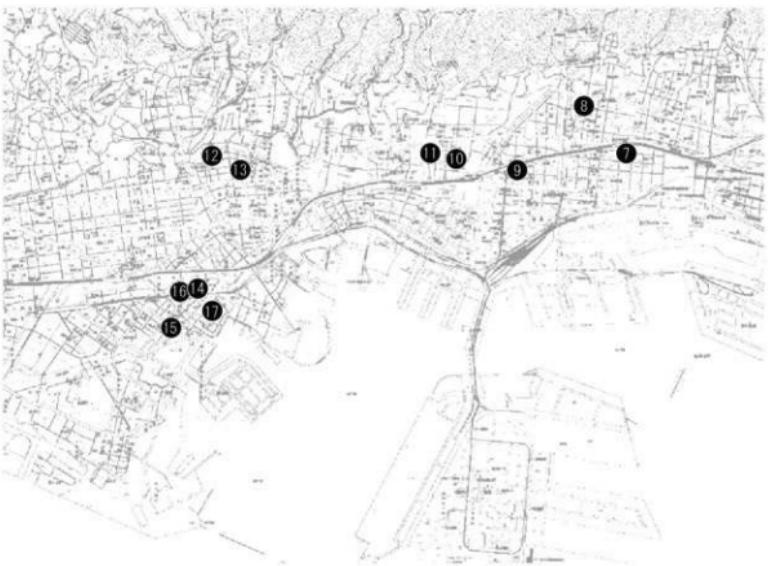


fig.10 調査地点位置図（2）1:50,000

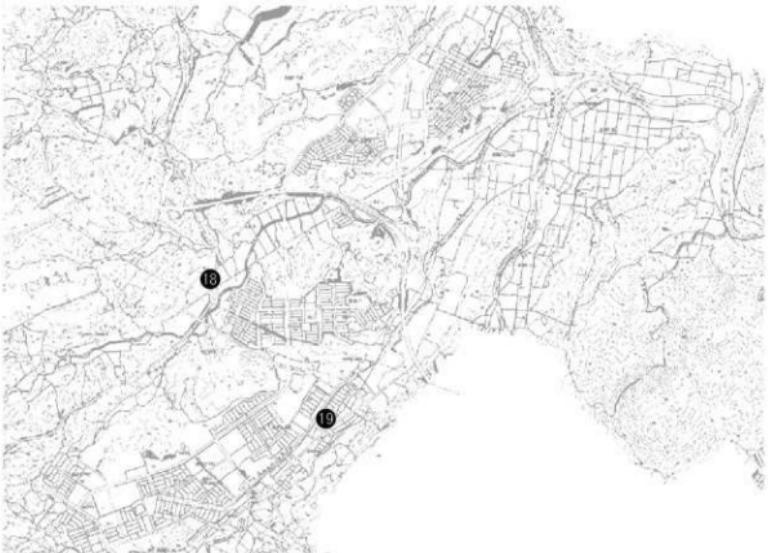


fig.11 調査地点位置図（3）1:50,000



fig.12 調査地点位置図（4）1:50,000

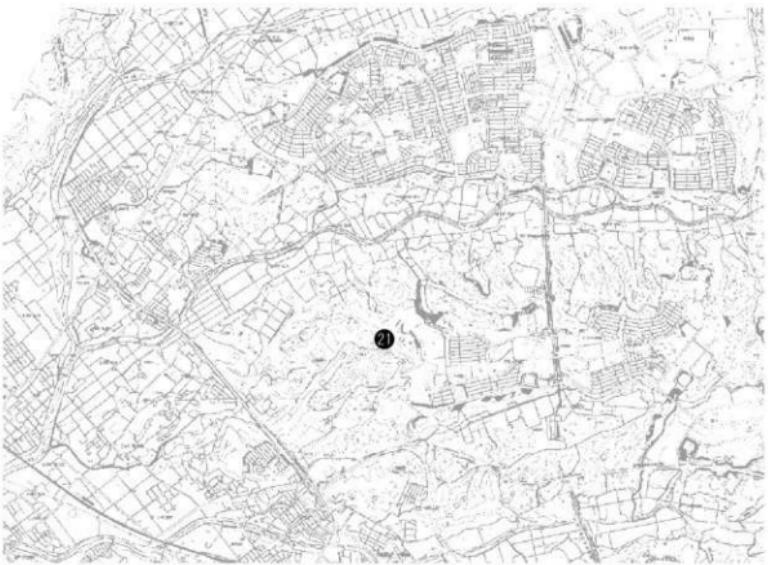


fig.13 調査地点位置図（5）1:50,000

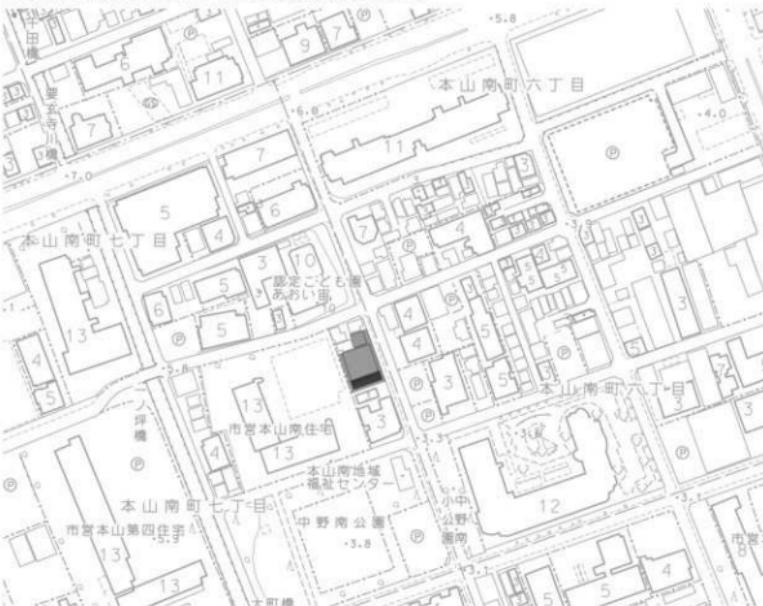
II. 平成30年度の発掘調査

1. 本山中野遺跡 第4次調査

1.はじめに

本山中野遺跡は、六甲山南麓に広がる平野部の東側に流れる住吉川と芦屋川との間に形成された後背湿地上に位置する遺跡である。遺跡の周囲は、海岸線より900mほど内陸に位置するものの、標高は3.5m程度と比較的低位置に立地する。現在の標高4m前後に繩文海進の波食崖などの痕跡が残っており、この時期の本山中野遺跡は海浜であったか、海中に没していたものと推測される。平成6年（1994）の市営住宅建設に伴う調査によって遺跡の存在が周知され、現在までに3次の調査が行われている。第1次調査では、弥生時代、飛鳥時代、奈良時代から平安時代にかけての道路状遺構が1条ずつ検出されたほか、繩文時代晚期から中世までの土器、石器、木質遺物の出土が報告された。第2次調査では洪水砂層中から平安時代から奈良時代にかけての綠釉陶器、瓦、墨書き土器などが出土している。第3次調査では、飛鳥時代から奈良時代の水田を覆う洪水砂、平安時代の焼失大型掘立柱建物が検出されたほか、古墳時代に至るまでの長期にわたり湿地状の状態であったことが確認された。

今回の調査は、事務所建設に伴う工事によって遺跡に影響が及ぶ範囲の発掘調査を行った。本調査地点は、平成6年（1994）に行った第1次調査地点の東側に近接している。このため、この調査と関連する遺構・遺物の発見が想定された。



2. 調査の概要

今回の調査では、事業予定地点にあたる約 270 m²が調査対象となったが、残存状況が良好な地点のうち、約 85 m²を調査対象として発掘調査を実施した。

基本層序

現況地表面の標高は 3.2 m 前後を測る。層序は上層より、盛土・搅乱層、褐色粘性砂質土層、褐灰色粘性砂質土層、灰黄褐色粘性砂質土層、灰黄褐色シルト層、黒褐色シルト層、褐灰色粗砂層、黒褐色粘土層、黒色粘土層の順に堆積する。灰黄褐色シルト層、黒褐色シルト層、褐灰色粗砂層の 3 層が遺物を包含する層であることを確認した。

第 1 遺物包含層（灰黄褐色シルト層）上面の標高は 2.6 m 前後を測る。層中から中世以前の土師器、瓦器が出土した。この層の下面が、第 1 面となる。

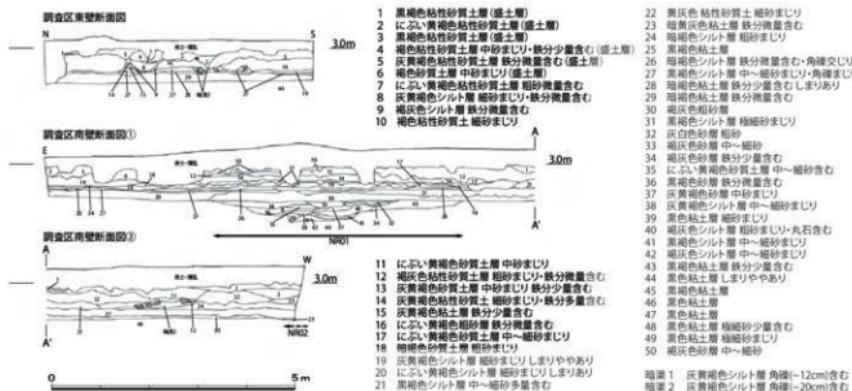


fig.15 土層断面図

第 1 面（黒褐色シルト層上面）

標高は 2.5 m 前後を測る。明確な遺構は確認できなかった。第 2 面（褐灰色粗砂上面）に至るまでの堆積層である黒褐色シルト層中からは、古墳時代中期～奈良・平安時代の須恵器や土師器が出土した。この層の下面が、第 2 面となる。

第 2 面（褐灰色粗砂層上面）

標高は 2.4 m 前後を測る。第 1 面と同様に明確な遺構は確認できなかった。第 3 面（黒褐色粘土層上面）に至る堆積層である褐灰色粗砂層からは、弥生時代後期の土器が出土し、植物遺体が複数確認された。この層の下面が、第 3 面となる。

第 3 面（黒褐色粘土層上面）

標高は 2.3 m 前後を測る。自然流路を 2 条検出した。

自然流路 (NR01)

北西～南東方向に延び、最大幅約 4.5 m、最深部約 50 cm を測る。粗砂から細砂を含む砂質土層からシルト層が堆積する。内部から針葉樹を含む自然林木や核桃などの植物遺体のほか、杭や柄と考えられる木質遺物が出土した。

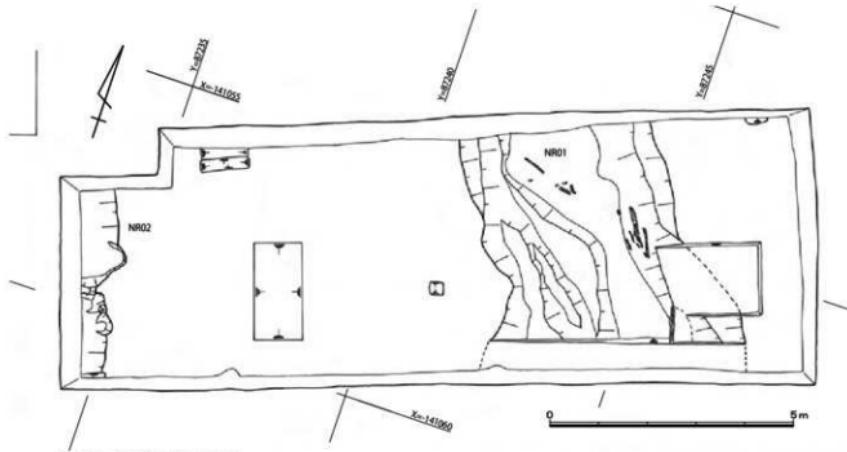


fig.16 第3遺構面平面図

自然流路 (NR02)

北北西－南南東方向に延びる。大半が調査範囲外にかかるため全容は不明であるが、検出された最大幅約80cm、最深部約15cmを測る。細砂から極細砂を含む砂質土からシルト層が堆積する。内部から植物遺体（樹木）が出土した。

今回の調査では、下層確認用に1m×2mのトレンチを設定し、第3面上から1.05m程度掘り下げた。上層から黒色粘土層、黒褐色粘土層、黒色粘土層の順に堆積し、最下層から褐灰色砂層が検出された。掘削中にイネ科ヨシ属の植物遺体（地下茎と推測される）が検出されたが、遺物は発見されなかった。

3.まとめ

今回の調査では、自然流路と3層の遺物包含層を確認した。それぞれの形成時期は、上層から中世以前、古墳時代中期～奈良・平安時代、弥生時代後期と想定されるが、いずれも建物跡などの遺構が検出されていないため、これ以上時期を確定させることは困難と考えられる。

本調査地における成果と関連するものとして、第3次調査で検出された溝があげられる。ここで検出されたSD02からは弥生土器や木質遺物の出土が報告されており、今回検出のNR01と類似する成果を得ている。このほか、SD05ならびにSD06も北北西－南南東方向へ延びており、本山中野遺跡では、大小の河道ないし水路が形成されやすい土地柄であったことも考えられる。

また、今回の調査において現況地表面より約2m下層、標高1.2m付近で砂層が確認されたことから、本遺跡周辺もかつては浜堤の一部であったことが想定される。本調査地点より約500m南に位置する北青木遺跡第7調査地点や、約1～1.2km東側に位置する深江北町遺跡第12・14次調査地点においても標高1.2～1.8mほどの標高で浜堤の上面が確認されており、安定した浜堤が陸側まで広く形成されたことを改めて示したものということができる。今回の調査地周辺が湿地化した時期は不明であるが、少なくとも弥生時代

後期にはイネ科ヨシ属の植物が茂るような湿地層が厚く堆積するような環境であったことが推測される。

以上のように、本調査では本山中野遺跡の履歴を知るうえで重要な成果を得ることができたといえる。本山中野遺跡東部に位置する深江北町遺跡、芦屋市津知遺跡や前田遺跡では、飛鳥時代から奈良時代の遺物・遺構が多数発見されており、古代山陽道ならびに葦屋驛家と関連するものと考えられている。本山中野遺跡においても同時期の遺物・遺構がみつかっており、上述の遺跡と関わる蓋然性が高いといえる。今回の調査によってそれを補強するような成果があがったとはいえないものの、今後の調査成果に期待される。



fig.17 全景（東から）



fig.19 NR01（北から）



fig.20 南側壁面（北西から）



fig.18 第2遺物包含層 須恵器出土状況（南から）

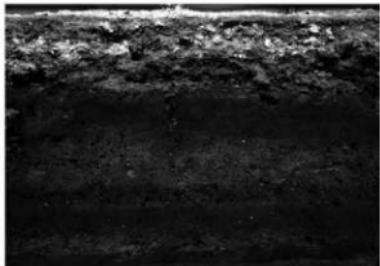


fig.21 土層断面（北から）

2. 本山遺跡 第43次調査

1. はじめに

本山遺跡は金鳥山から流れる河川によって形成された扇状地と段丘上に立地する縄文時代から安土・桃山時代の複合遺跡で、金鳥山から流れる河川によって堆積した標高7~20mの扇状地上に立地している。

既往の調査

当遺跡では、旧石器時代のチャート製ナイフ形石器、縄文時代早期の神宮寺式土器と有舌尖頭器がみつかっていることから（第19次）、神戸市内でも早い段階から人間の活動していた遺跡の一つとして位置づけられる。縄文時代は、前期後半の土器片が出土している他、中期前半の掘立柱建物（第19次）等が検出されている。晩期には流路や溝内などから船橋式・長原式の土器が出土している（第1・2・22次）。弥生時代に入り、前期初頭の斧柄、鋤、鉢、泥除け、白、編み物等の木製品（第16・34次）、中期後半の扁平紐式四区袈裟襟文銅鐸（第11次）などが出土しており、中期後半の土壙墓も確認されている（第8次）。このような状況から、前期～中期を通じて、金鳥山から延びる段丘から扇状地にかけて拠点的な集落を形成していたことがうかがえる。古墳時代は、前期の小型丸底壺が出土している程度で（第19次）、現在までに発掘調査が済んでいる範囲内からは、前期～中期までの活動痕跡が希薄となる。後期に入ると、須恵器を副葬する土壙墓（第8次）や、滑石製白玉・金環など（第13次）も出土しているが、集落の様相は判然としていない。当遺跡の次の画期は、平安時代後期～室町時代中期であり、この頃に水田や畠地、居住域を形成し、小規模な集落が営まれている。

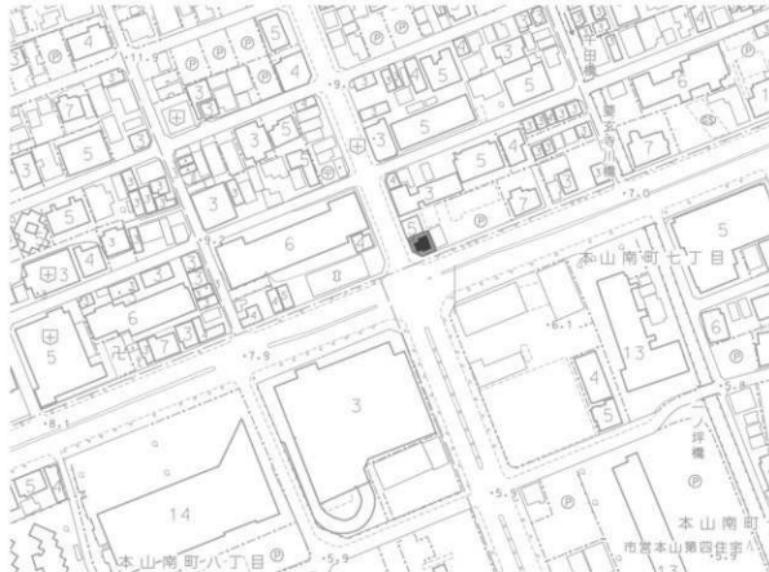


fig.22 調査位置図 1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

国土地理院の土地条件図と既存の発掘調査成果を踏まえると、当遺跡は、扇状地のはば中央に立地している。層序は、現地表面から標高 6.0 ~ 6.4 m までが盛土・造成土・耕作土等を含む土層である。これを取り除くと、古墳時代～平安時代の遺物包含層が点的に残存しており、その中には、韓式系硬質土器も含まれていた。第1遺構面は、黒色中砂を主体とする土層で、標高 6.1 ~ 6.3 m で検出した。第1遺構面包含層は、厚さ 15 ~ 25cm ほどである。第2遺構面は、黄褐色粗砂もしくは疊を含む暗褐色粗砂であり、標高 5.7 ~ 5.9 m で検出した。第2遺構面より下位の土層は、拳大の疊を含む暗灰褐色粗砂であり、遺構・遺物は確認できなかった。

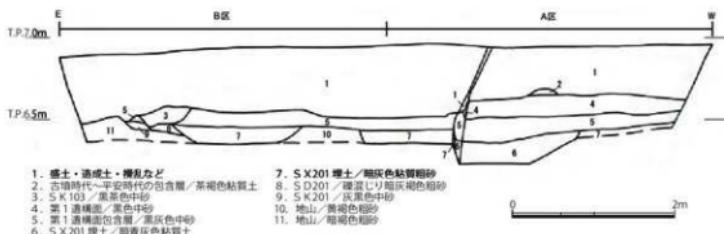


fig.23 調査区南壁土層断面図

第1遺構面

性格不明遺構 (SX) 1基、土坑 (SK) 5基、ピット (SP) 4基を検出した。遺構の時期は古墳時代前期～中期である。

SX101 現存長が東西 4.7 m、南北 3.9 m、深さ 10cm ほどで、円形状になるとみられる。遺構内から柱穴を検出しなかったため、性格不明遺構とした。出土遺物は、須恵器・土師器・弥生土器・サヌカイト製剝片等が出土している。の中でも土師器の出土量が多い。ほぼ完形の小型丸底壺や布留式甌などが出土している。

SK101～105 直径 35 ~ 90cm、深さ 10 ~ 20cm で、円形もしくは梢円形を呈する。SK104 は、東西 85cm 以上、南北 90cm、深さ 10cm で、方形を呈する。SK101・102 から弥生土器と土師器、SK105 から弥生土器・土師器・須恵器が出土している。

SP101～104 直径 10 ~ 30cm、深さ 10cm で、円形を呈する。SP101・103・104 から弥生土器・土師器が出土している。

第2遺構面

性格不明遺構 1基、土坑 5基、溝 (SD) 1条を検出した。遺構の時期は弥生時代中期中葉である。

SX201 東西に延びる溝状の遺構で、第III様式の土器が多量に出土している。口縁端部が丸く、底部の調整がシャープに仕上げられているのが特徴で、胴部に綾杉文を施すものや、広口壺の口縁内面側に扇形文を施すものなどが出土している。この SX201 の北側に SD201 が形成されており、切り合い関係からみて SD201 が SX201 に先行する。

SD201 幅 20 ~ 50cm、深さ 10 ~ 15cm の溝で、A区と B区の境で屈曲している。埋土中から弥生土器が出土している。

SK201～203 直径 50 ~ 100cm、深さ 10 ~ 20cm で、円形もしくは梢円形を呈する。

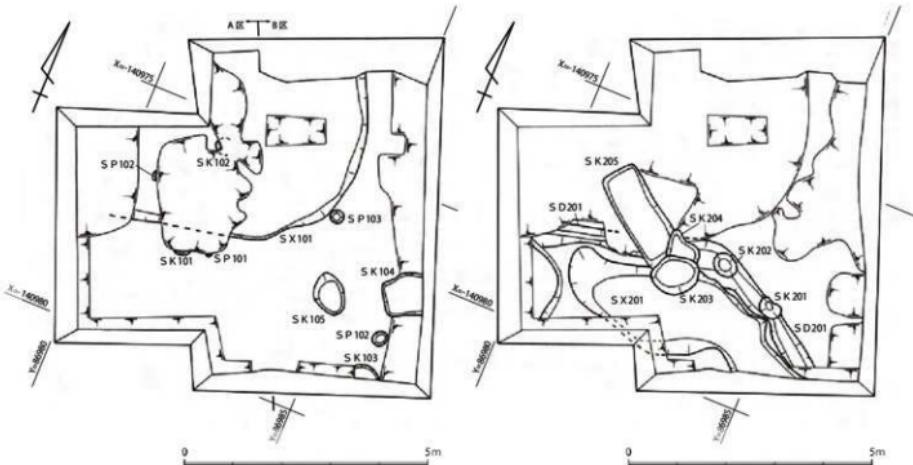


fig.24 第1遺構面平面図

fig.25 第2遺構面平面図

SK201・203から弥生土器が出土している。

SK204 最も幅の広いところが70cm、深さ15cmで、不定形な形態を呈する。弥生土器が出土している。

SK205 短側辺の幅75～80cm、長側辺の幅2.1m、深さ15cmで、長方形を呈する。墓壙の可能性を考慮して掘削したが、出土遺物はなかった。

3.まとめ

今回の調査では、古墳時代前期～中期と弥生時代中期中葉の遺構面を検出した。

第1遺構面で検出した古墳時代前期～中期に関連する遺構・遺物は、第19次調査で古墳時代前期の小型丸底壺、第20・23次調査で古墳時代中期～後期の須恵器が出土している。今回の調査では、胴部器表面に格子目タタキが施された韓式系硬質土器も出土しており、第1遺構面で検出したSX101をはじめとする古墳時代前期～中期の遺構・遺物は、当該期における集落の中心が要玄寺川西岸域に展開している可能性を示唆する。

第2遺構面で検出した弥生時代中期中葉に関連する遺構・遺物は、第21次調査で竪穴建物、時期は絞り込めていないが、第19・36次調査で中期の掘立柱建物や建物の柱穴になるとみられるピットが検出されている。今回検出した遺構が建物に付随する可能性は低いが、SX201から出土した畿内第III様式の土器群は、一括投棄されたような状態で出土しており、この遺構が集落内でどのような位置づけにあるのか、今後探っていく必要がある。弥生時代前期初頭～中期後葉は、本山遺跡における一つの画期となっているが、今回検出した遺構を含め、当遺跡東側に当該期の集落がどのように展開していたのか、その背景を検討していく上で、一つの成果を挙げたこととなる。



fig.26 A区第1遺構面（北から）



fig.27 B区第2遺構面検出状況（北から）



fig.28 A区第2遺構面（北から）



fig.29 B区第2遺構面完掘状況（北から）



fig.30 B区SK105（北から）



fig.31 A区SD201南北断面（西から）



fig.32 B区南壁断面（北から）



fig.33 A区南壁断面（北から）

3. 西岡本遺跡 第13次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は、住吉川により形成された扇状地の左岸、高位段丘上に立地し、北西から南東方向に傾斜する地形に位置している。既往の調査で旧石器時代から近世の遺構、遺物が検出されており、当遺跡を特徴づける成果として、縄文時代早期の堅穴建物、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬主体とする古墳10基、平安時代の掘立柱建物6棟等が挙げられる。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建築に伴うものである。試掘調査の結果、対象地の東半部で弥生時代後期の遺物包含層が検出された。地盤改良等の工事により、埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。調査地は、北西から南東へ傾斜する傾斜地に位置し、東側隣接地との比高差は2m、南側隣接地との比高差は1.5mである。

基本層序

西半部（1トレンチ西半部・3トレンチ）は、耕作や宅地造成に伴い地山面まで削平されおり、遺物包含層および遺構は確認されなかった。東半部は、盛土層および整地層下に現代の耕土・床土層が存在し、その下層に中世の遺物を含む旧耕土層を数層確認した。北東部（1トレンチ東半部・2トレンチ北半）では、旧耕土層の下層から、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物を含む黒茶色粘質土層、直下で橙茶色粘質土層（地山）を検出した。

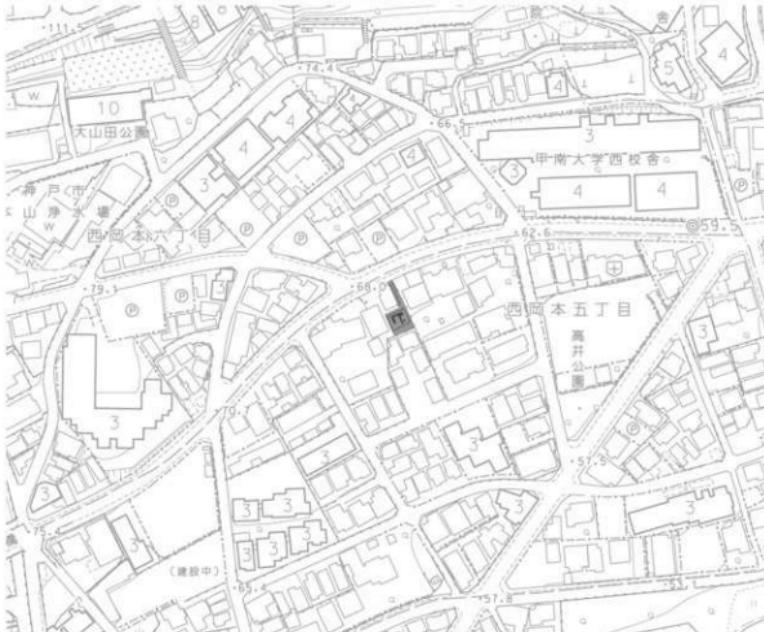


fig.34 調査地位置図 1:2,500

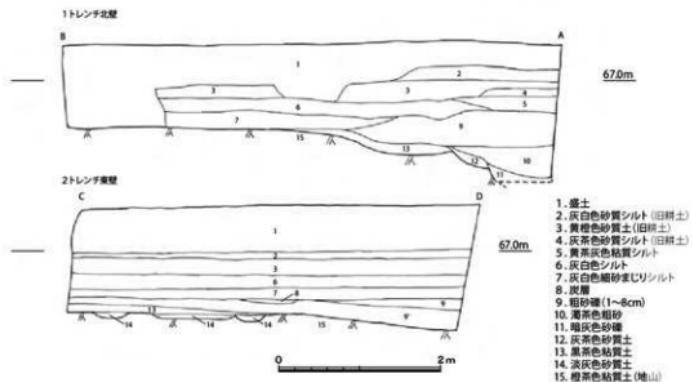


fig.35 土層断面図

1 トレンチ

幅80cm、全長6 mのトレンチである。西半部は平坦に削平され、旧地形は確認できなかった。東半部は遺物包含層および地山面は東側に傾斜し、徐々に斜度を増す。遺物包含層からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺物が出土した。

土器群 1 掌大の破片がまとまって出土した。残存状況が悪いため破片は接合しなかったが、大型の壺の胴部と考えられる。所属時期を確定しがたいが、近接して弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺物が出土しており、当該時期の資料と考えられる。

2 トレンチ

幅80cm、全長3.5 mのトレンチである。遺構検出面は、緩やかに南側に傾斜する。土坑と柱穴を数基検出した。

SK102 直径45cm、深さ6cmの円形の土坑で、埋土の下層は炭である。被熱痕は無く、用途は不明である。遺物の出土はなかった。

SK103 長径1.05 m、短径32cm以上、深さ10cmの不定形の土坑である。遺物の出土はなかった。

SK104 西側は調査区外であるため、形状や規模は不明であるが、長径1.55 m、短径40cm以上、深さ60cmの土坑である。遺物の出土はなかった。

SP101 遺構の西半部は調査区外であるが、直径30cm、深さ10cmのピットと考えられる。遺物の出土はなかった。

3 トレンチ

幅90cm、全長3.0 mのトレンチである。盛土直下で地山を検出した。遺構、遺物は検出されなかった。

4 トレンチ

幅60cm、全長1.6 mのトレンチである。地山直上の黒茶色粘質土より、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺物を検出した。地山面で直径45cmの土坑を1基検出した。

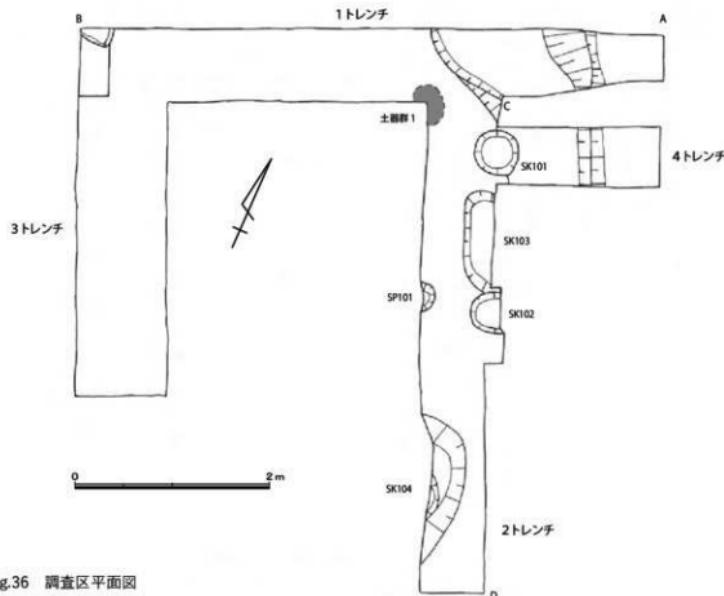


fig.36 調査区平面図

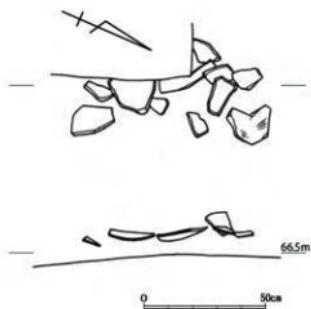


fig.37 土器群1 平・断面図

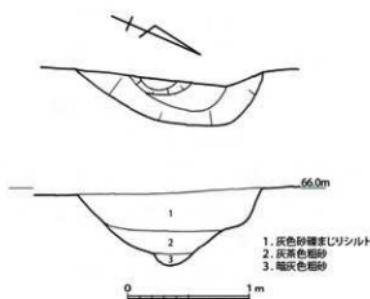


fig.38 SK104 平・断面図

3.まとめ

調査地の西半部は埋蔵文化財が確認できなかったが、東半部で弥生時代後半から古墳時代初頭の遺物包含層と遺構を検出した。現況では当該地は平坦に造成されているが、調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の地形は北西から南東に傾斜する斜面地の東端に位置していたことを確認した。当該地の当時の土地利用については、遺構、遺物の検出数は少なく詳細は不明であるが、当該地の高位である西側に生活域が広がっていたと考えられる。



fig.39 1 トレンチ全景（北東から）



fig.40 2 トレンチ全景（南東から）



fig.41 3 トレンチ全景（北西から）



fig.42 基本土層（1 トレンチ東端・南西から）



fig.43 土器群 1（北西から）



fig.44 SK102 炭出土状況（南西から）

4. 住吉宮町遺跡 第55次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、住吉川西岸の扇状地上に位置する縄文時代～中世の複合遺跡で、特に古墳時代中～後期においては集落と古墳群によって構成され、当遺跡の存続期間のうちで最も盛んとする時期である。

今回の調査は住宅建設に伴うもので、調査地を3区分（1～3区）して進めた。

2. 調査の概要

今回の調査においては、古墳時代中期末頃の遺構、弥生時代後期～中世の遺物が確認された。調査地は第25次調査（平成9年度）の南側隣接地にあたり、遺構面が第25次調査の第3遺構面に該当すると考えられる。

基本層序

上層より盛土、数層の旧耕土層、洪水砂まじりの堆積層（淡褐色粗砂まじり砂質土）と続き、その下層に遺物包含層（灰茶色砂質土・上面が現地表下-102cm）が存在し、その下層（茶灰色砂質土）上面が遺構面となる。遺構面の標高はおおむね19.0～19.2mを測る。

遺構・遺物

確認できた遺構は、ピット（SP01～03ほか）、落ち込み状遺構（SX01～03ほか）等で、SP02は、形状、規模（長径90cm・短径70cm・深さ50cm）等から、比較的規模の大きい建物の一部と想定される。

ピットの時期については、出土遺物が小片であることから詳細は不明であるが、遺物包含層、落ち込み状遺構の出土遺物等から、古墳時代中～後期に属すると考えられる。

調査区の南半部に位置するSX03については、数点の遺物が確認されているが、古墳時代中～後期のほか、弥生時代後期の遺物も確認できた。



fig.45 調査地位置図 1:2,500

3.まとめ

今回の調査においては、古墳時代中～後期に属すると考えられる遺構面を確認し、遺構も比較的多く検出できることから、集落の一部である可能性が高い。当該地周辺の調査においても、同時期の遺構が多く確認されていることから、集落のさらなる広がりが確認できたことは、大きな成果と言えよう。

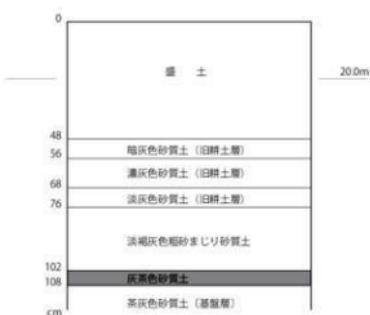


fig.46 土層断面模式図（北側壁面）

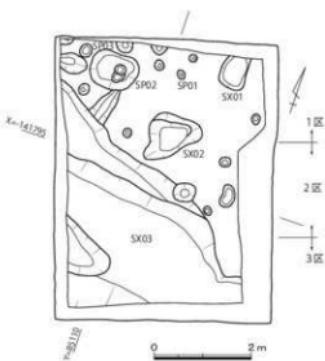


fig.47 遺構平面図（1～3区）



fig.48 1区（南西から）



fig.49 2区（南西から）



fig.50 3区（北西から）

5. 郡家遺跡 第95次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、住吉川により形成された扇状地の右岸、扇央部から扇端部に立地し、北東から南西へと傾斜する地形に位置している。昭和54年度の第1次調査以来、これまでに94回の発掘調査が行われ、縄文時代早期、弥生時代中期から中世、近世の遺構が確認されている。弥生時代後期以降に集落が拡大し、古墳時代中期から後期にかけて拠点集落として発展する。飛鳥時代以降は、御影郡家1丁目付近（旧大蔵地区）で大型の方形掘形を持つ掘立柱建物が確認されており、菟原郡衙の推定地と考えられている。

なお、令和元年度に『郡家遺跡第95次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

調査地は宅地造成時に大きく改変されており、旧地形は不明であった。東および南に隣接する道路の標高は33.0～34.0mで、本来は北東から南西に緩やかに傾斜する地形であると推測できる。旧城ノ前地区に位置し、第17次調査地点の南側、第56次・第62次調査地点の東側に隣接している。

基本層序

現地表面である盛土層および整地層の下に、複数の耕土・床土層が存在し、その直下が第1遺構面である。調査区北半部は、後世の耕作に伴う造成の影響が地山層まで及んでおり、同一面で弥生時代後期から中世の遺構を検出した。南半部は古墳時代後期の遺物包含層（暗灰色粘性砂質土～黒灰色砂質土）が残存しており、上面が第1遺構面、下面が第2遺構面（淡橙灰色粗砂～砂礫層上面）である。

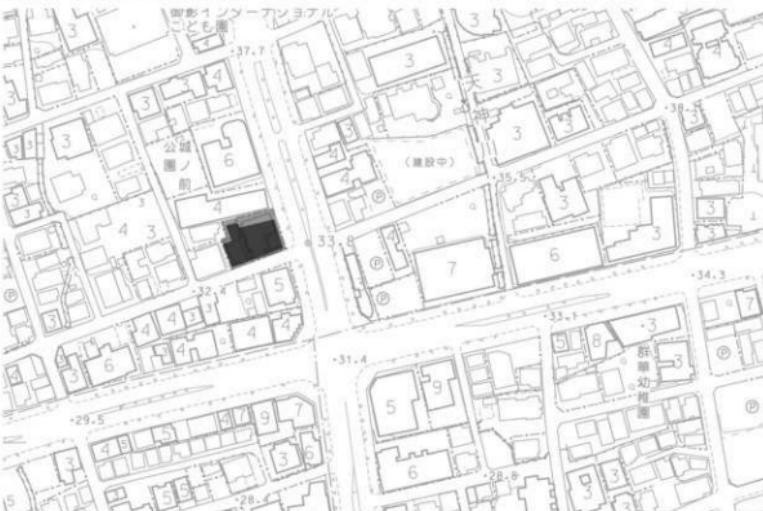


fig.51 調査地位置図 1:2,500

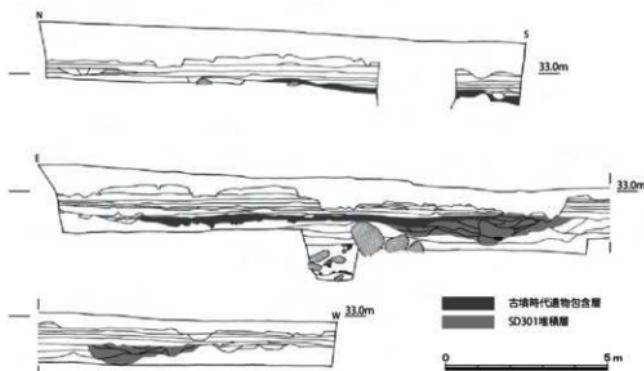


fig.52 土層断面図

第1遺構面

1区および3区は異なる時代の遺構が同一面で検出されたため、遺物が出土しなかった遺構の時期の特定は困難である。古墳時代後期の遺物包含層が残存する2区と4区では、遺構の時期を、古墳時代後期以前と以降に分ける事が可能である。古墳時代後期以降と考えられる遺構を第1遺構面検出遺構として記述する。掘立柱建物1棟と土坑3基、柱穴20基以上、溝2条、耕作に伴う溝8条、段状地形を確認した。

SB101 3区北西部で検出した掘立柱建物である。規模は東西3間以上、南北1間以上である。確認された5基(P1～P5)の柱穴の掘形はいずれも方形で、1辺65～90cm、深さ20～45cmを測る。柱痕が明瞭に観察できたのはP2のみで、他は柱を抜き取る際に搅乱されたと考えられる。P3は柱を抜き取った後、1辺30～40cmの自然石を埋め込んでいる。いずれの柱穴から出土した遺物は少量で、時期の特定は困難である。

SD102・104～110 2区および4区の古墳時代後期の遺物包含層上面で検出した溝であり、溝底で耕起痕が確認された。幅20～40cm、深さ約3cmを測り、溝の方向はN21°WからN33°Wである。畝立てに伴う溝であれば、耕作面の傾斜方向に対して平行または直行して設けられるため、当時の斜面の傾斜方向を示している可能性がある。

段状地形 4区南東部で、北西から南東へ落ちる段状の地形を検出した。調査区外へ続いている詳細は不明であるが、調査区東壁の観察により、30cm以上の比高差がある。北側と南側の耕作面を区画する畦畔の痕跡である可能性が高い。



fig.53 1・2区 空中写真

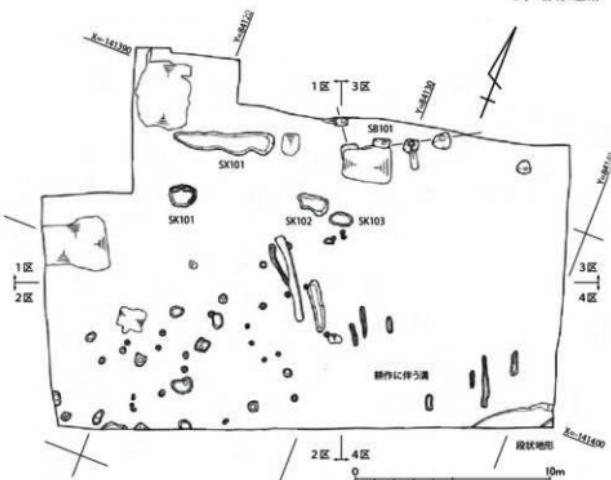


fig.54 第1遺構面平面図



fig.55 1・2区 第1遺構面（北東から）



fig.55 1・2区 第1遺構面（北西から）

SX101 1区中央部で検出した不定形の遺構である。長辺約5.1m、短辺約0.8～1.1m、深さ約10cmを測る。出土遺物は細片で、時期、性格は不明である。

SK101～103 1区で3基の土坑を検出したが、出土遺物は細片であり時期は不明である。

その他 2区および4区で多数の柱穴を検出した。異なる時期の遺構が混在しており、現時点では建物等を構成するものは確認できていない。

第2遺構面（上層）

古墳時代中期後半から後期の遺構面である。堅穴建物3棟、掘立柱建物1棟、土坑3基、洪水の堆積を確認した。

SB203 2区東半部で検出した堅穴建物である。遺構の切り合い関係から、SD301（上層）埋没後に建てられている。後世の耕作に伴う削平の影響を受け、西側周壁溝の一部と柱穴数基以外は残存していないため、全容は不明である。平面形は南北5.5mの方形である。周壁溝の規模は、幅12～22cm、深さ6～9cmである。建物に伴う遺物は確認されなかつたため、詳細は不明である。

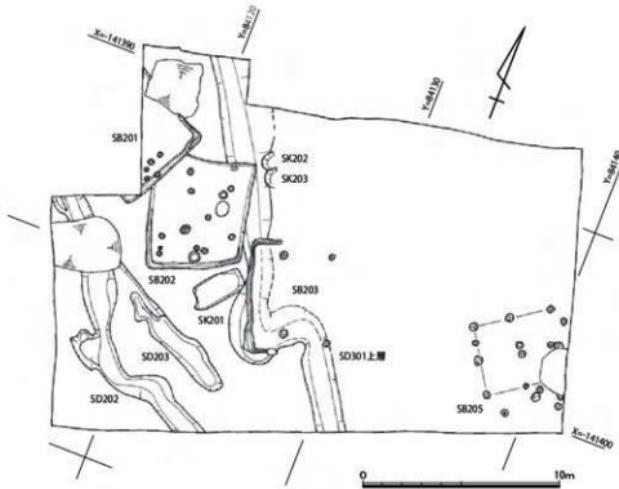


fig.57 第2遺構面平面図

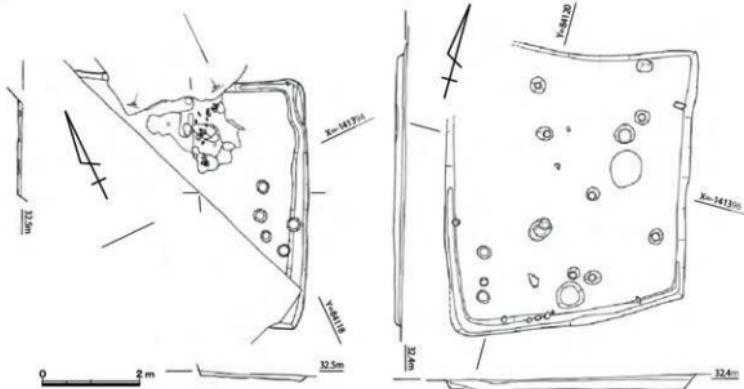


fig.58 SB201 平面図

fig.59 SB202 平面図

SB201 1区西端部で検出した竪穴建物で、遺構の切り合い関係から、SB202より後出する。北側は搅乱、西側は調査区外であり、全容は不明である。平面形は、東西4.8m以上、南北5mの方形である。建物内から、柱穴数基、カマドの痕跡、周壁溝を検出した。柱穴は5基検出したが、検出位置から当建物に伴う遺構と断定しがたい。北側周壁中央部付近で、焼土、灰色の粘土塊、炭がまとまって出土した。床面の一部で被熱痕を確認したが、焼土は床面から遊離した状態で検出した。粘土塊は、一部に被熱痕が確認できることから、カマドの構造材と考えられるが、焼土と同様、床面から遊離した状態で検出した。炭は、粘土塊西側の床面直上に広がっており、カマド内より掻き出された状況である可能性が高いが、詳細は不明である。カマドの痕跡の周辺からは、古墳時代後期前半の遺物が出土している。

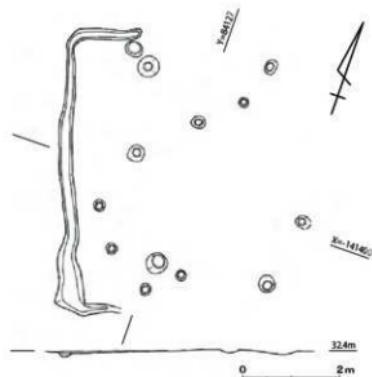


fig.60 SB203 平・断面図

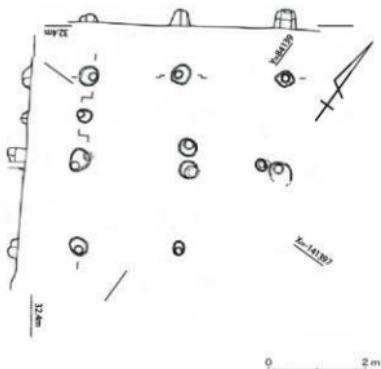


fig.61 SB205 平・断面図

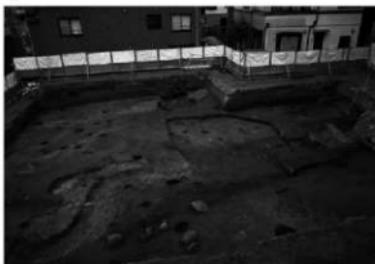


fig.62 1・2区 第2遺構面(北西から)



fig.63 1区 SB201(北東から)



fig.64 1区 SB202(南東から)



fig.65 4区 SB205(南西から)

周壁溝は、北側中央部を除く検出された全ての周壁に廻っている。幅20~30cm、床面からの深さは3~9cmである。

SB202 1区南半部で検出した竪穴建物である。遺構の切り合い関係から、SD301（上層）埋没後に建てられている。平面形は、東西約5m、南北約5.7mの方形である。建物内から、柱穴13基、周壁溝、土坑1基、床面の被熱痕を検出した。主柱穴は4基である。周壁溝は、西壁と南壁部分で検出した。幅20~30cm、床面からの深さは4cmを測る。周壁溝内より、

古墳時代後期初頭の完形の須恵器壺身・壺蓋等が出土している。

床面の被熱痕は、建物中央より東側に寄った位置で検出された。長径 75cm、短径 60cm を測り、炉と考えられる。

SB205 4 区南東部で検出した東西 2 間以上、南北 2 間の掘立柱建物である。南東方向へ傾斜を強める地形に立地しており、棟方向は N 56° E である。柱穴の掘形の規模は、直径 25 ~ 45cm、深さ 15 ~ 40cm、柱痕の直径は 15 ~ 20cm である。柱痕の基部が北東方向に移動している柱穴があり、柱を抜き取る際または建物が倒壊した際に、柱が南西方向に傾いた状況が想定できる。また、近辺からは伏せられた状態で検出された須恵器壺をはじめ、完形の遺物が人為的に置かれた状態で検出されているが、建物との関連は不明である。

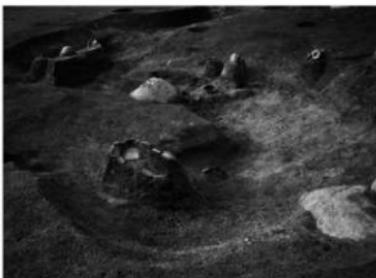


fig.66 SD301 上層遺物出土状況（東から）



fig.67 2区 SK201 (北西から)

SK201 2 区北半で、長辺約 2.6m、短辺約 1.3m、深さ 25 ~ 30cm の長方形の土坑を検出した。古墳時代後期の遺物が出土した。

SK202・203 1 区中央部で検出した土坑で、遺構の切り合い関係から、SK202 より SK203 が後出する。北東部は搅乱されており全体の形状は不明である。SK202 の形状は、長辺 1 m 程度の楕円形と考えられるが、詳細は不明である。埋土内より、長辺 10 ~ 20cm の自然礫が数点まとめて出土した。SK203 は SK202 と 同様の規模、形状と考えられる。埋土より、長辺 70cm、短辺 20 ~ 30cm の板状の自然石が 1 点出土している。

SD301（上層） 古墳時代中期後半～後期の洪水が、弥生時代後期末～古墳時代初頭に埋没した SD301 の埋土を削り込んで堆積した状況を確認した。2 区南半部で東に強く蛇行し、さらに南東方向へ流れている。堆積層は 1 ~ 30cm 大の砂礫を主体とし、幅 2.2 ~ 3.3m、深さ約 50cm を測る。短時間で堆積した状況が窺え、古墳時代中期後半から後期の遺物が大量に出土した。完形の遺物は、蛇行地点から南東側の最上層に集中していることから、洪水により流入した遺物と、埋没後に人為的に置かれた遺物に分類できると考えられる。

第2 遺構面（下層）

弥生時代後期後半の遺構面である。竪穴建物 1 棟と自然流路 1 条を確認した。

SB301 3 区南半部で検出した竪穴建物である。南側の一部が搅乱されているが、平面形は長辺約 5.3m、短辺約 4.2m の長方形である。主柱穴 2 基、土坑 1 基、ピット 1 箇所を検出した。主柱穴は直径 30 ~ 40cm、深さ約 30 ~ 40cm である。土坑は建物の中心から南壁側に寄った位置にあり、南半部分が搅乱されている。平面形は、長辺約 55cm の円形または楕円形と考えられ、深さ約 30cm を測る。被熱痕はなく、炉ではない。南壁の東端と西端付近で、完形の



fig.68 第3遺構面平面図



fig.69 3・4区 第2遺構面全景（北西から）



fig.70 3区 SB301（北西から）



fig.71 1・2区 SD301（北西から）



fig.72 1・2区 SD301断面（南東から）

壺と鉢を検出した。いずれも弥生時代後期後半の遺物である。

SD301下層 1区と2区で検出した自然流路である。幅約4.2～6.3m、深さ約1.1mで、北西方向から南東方向に直線的に流れる。第17次調査で検出された流路2と同一の流路であり、

弥生時代後期～古墳時代前期初頭に埋没した状況を追認した。埋土は粘質が強く、流速が低い状態で堆積している。遺物は溝の東側の肩部と底部付近を中心出土した。

弥生時代後期以前の土石流

同志社大学の増田富士雄教授の指導のもと、弥生時代後期以前の土石流についてトレッソ調査を実施した。調査結果は下記のとおりである。

- ・六甲山南麓における土石流の堆積状況が分かる好例。
- ・ほとんどの岩石が花崗岩で構成されている。
- ・砂礫の堆積状況から、土石流は北から南に向けて流下し、調査区付近は巨石が停止する土石流の末端付近に相当することが分かる。
- ・当調査地では、少なくとも3回の土石流が確認できる。

- ・竪穴建物は、土石流を避けて建てられている。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半、古墳時代中期後半～後期、古墳時代後期以降の3時期の遺構を確認した。

当該地は弥生時代後期以前の土石流堆積の末端に位置し、弥生時代後期に居住域となる。竪穴建物SB301は主柱穴が2本で、炉やカマドの痕跡は確認できなかった。SD301は弥生時代後期後半に埋没する。また、今回の調査地周辺で確認されている遺構の時期は、弥生時代後期が主体であり、古墳時代前期初頭の遺構は少ない。SD301下層からも古墳時代前期初頭の遺物が出土しており、当時期の土地利用を考える上で重要である。

古墳時代中期後半（TK23・47型式期）には埋没した自然流路を削り込む洪水がおこり、最上層や流路の肩部で完形の遺物が一定量出土した。

竪穴建物SB202はTK23～MT15型式期の遺物が出土しており、洪水後まもなく建てられたと考えられる。SB202が廃絶した後、MT15～TK43型式期の遺物が出土する竪穴建物SB201が建てられた。掘立柱建物SB205はTK23・47型式併行期に遡る可能性が高い。掘立柱建物はMT15型式併行期に建てられたものが多いが、竪穴建物の分布が希薄であった旧岸本地区にも広がり、集落の拡大が想定される。

古墳時代後期（TK10型式期）以降の遺構については、層位的に検出できず、出土遺物も僅少で時期の確定はできなかった。SB101は大型の方形掘形を持つ掘立柱建物であり、第1次調査地点付近（旧大蔵地区）と第12次調査地点付近（旧下山田地区）で同様の建物が検出されている。旧城ノ前地区では初めての検出となった。SB101周辺からは飛鳥時代以降の遺物の出土は無く、第12次調査で検出された掘立柱建物同様、古墳時代後期まで遡る可能性があり、菟原郡衙成立前の大型掘立柱建物の出現と立地を考える上で重要である。



fig.73 3・4区 下層土石流（北から）

6. 赤坂通遺跡 第1次調査

1. はじめに

赤坂通遺跡は、六甲山系から大阪湾に流れ込む都賀川の右岸扇状地に立地する遺跡である。灘区赤坂通地内の東西幅約65m、南北幅約60mの範囲、標高61～66mに想定されている。昭和62年度に行われた試掘調査の結果、遺跡の存在が確認された。この試掘調査で縄文時代から弥生時代の遺物包含層が確認されている。また、今回の調査に先立つ試掘調査では弥生土器のほか、須恵器や土師器が出土している。ただし、今回が第1次調査であるため、今まで詳細な知見は得られていない。

今回の調査は、赤坂通遺跡の中央西寄りに位置する地点である。共同住宅建設に伴う発掘調査であり、工事により埋蔵文化財に影響をおよぼす範囲を対象として調査を実施した。調査は平成29年度から継続して行なった。

2. 調査の概要

基本層序

現地表面の標高は調査区北側でおよそ65.6m、南側でおよそ64.7mで、敷地南端でおよそ63.7mである。



fig.74 調査地位置図 1:2,500

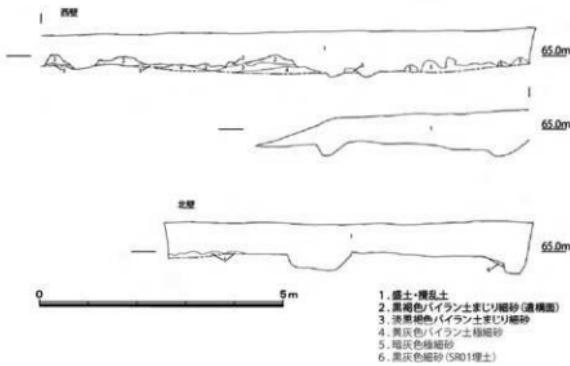


fig.75 土層断面図

現地表面から 0.9~1.8m は、盛土を含む造成土および搅乱土であり、その下層には耕土層が存在する。ただし、従前の建物解体時の搅乱により、調査区壁際のほとんどは削平されており、耕土層・遺物包含層を調査区壁面で確認することはできなかった。南半は標高およそ 65.0m で遺物包含層である黒褐色バイラン土混極細砂上面となり、南に向かって厚く堆積する。標高 64.8~65.0m で遺構面の黒褐色バイラン土混細砂となる。北半は盛土・耕土層直下で遺構面となる。主に弥生時代と考えられる遺構・遺物を検出している。遺構面である黒褐色バイラン土混細砂の下層には、北西部で一部、黄灰色バイラン土混極細砂を挟み、その下層において調査区全面に暗灰色極細砂が広がる。

遺構面

盛土・耕土層・遺物包含層を取り除くと遺構面であるが、北側では盛土・耕土層直下で遺構面となる。主に、中世・弥生時代の遺構を同一面で検出した。

遺構は、流路 1 条、溝 1 条、土坑 2 基、ピット 12 基を確認した。

調査区東西辺は、従前の建物基礎とその解体時に大きく搅乱を受けており、遺構面がほとんど残っていない。それに対し調査区中央では、遺構基盤層となる黒褐色バイラン土混細砂を検出した。

東端で南北に流れる流路 (SR01) を検出した。北側の立ち上がりは調査区外に延び、南・東側は後世の搅乱により削平されているため、規模は不明である。遺物は埋土上層で須恵器が、埋土中から弥生土器が出土しており、中世まで流れていたと考えられる。

また遺物包含層を切って、SR01 と並行する溝 (SD01) を南東部で検出した。溝の南北端は搅乱を受け、全長は不明だが、幅 40cm、深さ 20cm の規模を持つ。遺物は弥生土器、須恵器塊が出土している。北端は東にやや湾曲しており、SR01 から分かれた支流の可能性がある。

北半で土坑 2 基 (SK01・02) を検出した。SK01 は東西 90cm、南北 90cm 以上、深さ 13cm の規模を持つ。北側は搅乱により削平されているが、平面形はほぼ正方形と考えられる。SK02 は東西 1 m、南北 1 m、深さ 14cm の正方形を呈する。SK01 の南側に隣接し検出した。

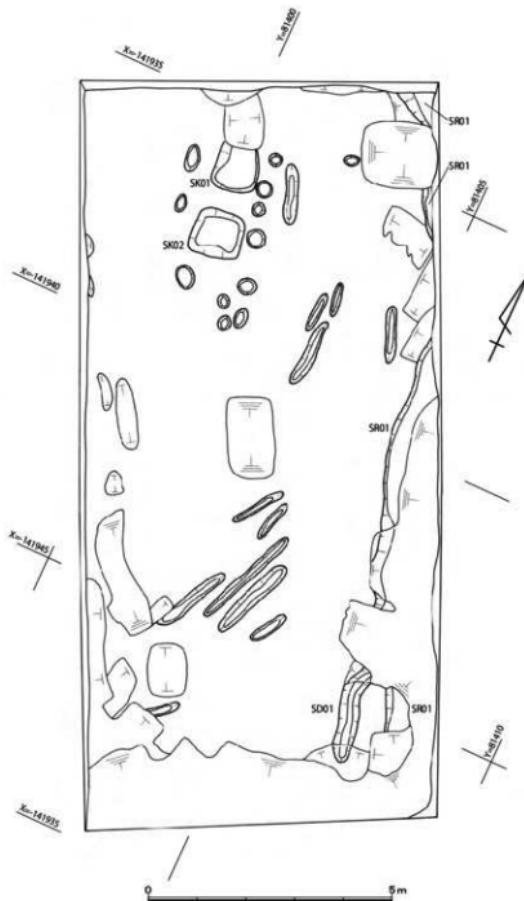


fig.76 遺構平面図

2基ともわずかに弥生土器を含むが、性格は不明である。

同じく北半でピット12基を検出した。直径25~50cm程度である。遺物は弥生土器の可能性がある土器の小片がわずかに出土した。深さは5~18cmと比較的浅い。土坑2基を囲むように検出したが、特に規則性はなく、性格は不明である。

他にも調査区全面で耕作痕を検出した。幅20~30cmで方位に沿ってほぼ南北に走る。土器をわずかに含むが、小片のため時期は不明である。

3.まとめ

今回の調査では中世以前の流路、溝、弥生時代の土坑、ピットが検出された。しかし、後世の造成・耕作により、遺構面は全体的に削平されている。

赤坂通遺跡の周辺には、北に中世の遺構・遺物が出土した五毛遺跡があり、やや離れて東側に縄文時代～中世の遺構・遺物が出土した篠原遺跡、その南に篠原南遺跡があるが、この付近の埋蔵文化財については不明確な状況であった。

しかし、今回の調査で弥生時代と考えられる遺構・遺物を確認し、この時期の集落が調査地周辺に存在することが明らかになった。ただし南半では、主に弥生土器（後期の土器が散見される）を含む遺物包含層を確認したが、遺構は検出されなかった。このことから当遺跡は、南に向かって低くなる地形上に形成され、遺構は今回の調査地より北側に集中する可能性がある。

また、遺物包含層や流路などに平安時代後半～鎌倉時代の須恵器や白磁をわずかに含む事から、周辺にこの時期の遺構が存在する可能性もある。

調査終了後、調査区中央に南北方向の断割りトレーナーを設定し、下層の確認を行なった。その結果、南端において、弥生土器、縄文土器が数点出土した。縄文土器は表面に磨消縄文が見られることから、縄文時代後期のものと考えられる。これらの土器は小片かつ少量で、遺構も確認できなかったため、高位からの流れ込みによるものであり、今回の調査地より北側に縄文時代の遺構が存在する可能性が考えられる。



fig.77 遺構面全景（南東から）

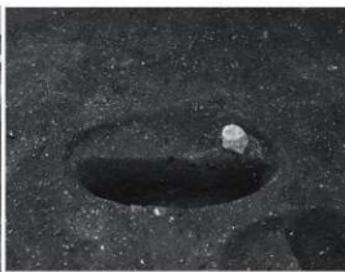


fig.78 ピット断面



fig.79 調査区西壁（南東から）

7. 日暮遺跡 第48次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山南麓の小河川によって形成された扇状地末端に立地する遺跡である。中央区日暮通・吾妻通・八雲通・東雲通・筒井町一帯に広がり、昭和61年度に市営住宅建設に伴う発掘調査によって発見された。これまでに40回を超える調査が行なわれ、弥生時代末から中世にかけての集落遺跡であることが明らかになっている。とりわけ古墳時代前期初頭～前期の竪穴建群、奈良時代・平安時代の掘立柱建物群が見つかっており、これらの時期に集落が盛んであったことが窺える。また、これらの建物群は各時代によって、集落を形成する場所が若干の重なりはあるものの、おおむね南北に分かれており、土地利用の変遷が窺い知れる。出土遺物の中には土錘や蛸壺が多く認められることから、時代を通じて海に関わりの深い人々が居住していたと考えられる。

2. 調査の概要

基本層序

現地表面は標高17.6～17.8mであり、南東に向かって緩やかに傾斜する。現地表面から0.8～1.2mは盛土を含む造成土および搅乱土であり、その下層には耕土層が存在する。標高16.2～16.4mで第1遺構面基盤層の淡～暗灰褐色細砂となる。この層と下層の暗褐灰色細砂～シルトが古墳時代～平安時代の須恵器、土師器、磁器を含む遺物包含層となり、標高16.0～16.1mで第2遺構面基盤層の黒灰色～淡褐灰色シルト（東側）、黒灰色シルト（西側）となる。調査区東側の層は弥生時代末～古墳時代前期初頭の土器を含む遺物包含層であり、その下層は15.8～16.0mで第3遺構面基盤層の（淡）黒灰色細砂混じりシルト～黒黄色中砂、淡褐色～淡灰色細砂混じりシルトとなる。西側の第2遺構面基盤層（黒灰色シルト）には遺物が含まれず、東に向かって傾斜していることから、東側の第3遺構面基盤層と同一層になると考えられる。



fig.80 調査位置図 1:2,500

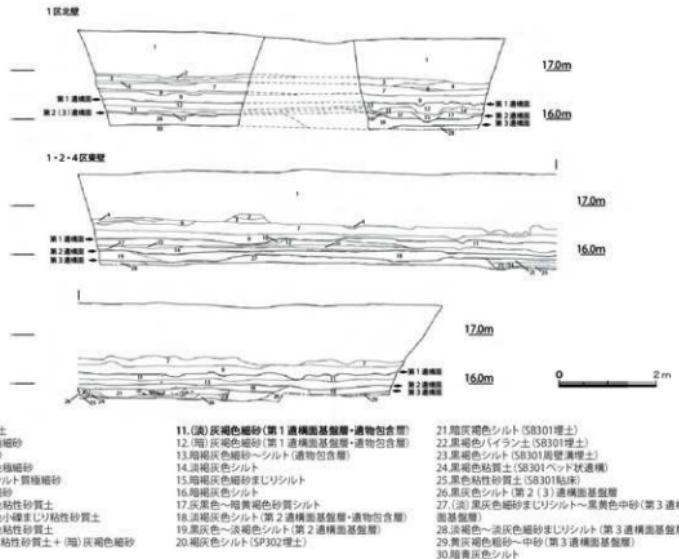


fig.81 土層断面図

遺構面

調査区全体で2面、4区では3面の遺構面を確認した。南部は従前の建物もしくはその解体時に、大きな搅乱を受け、遺構面が残存していない。

第1遺構面

盛土、耕土層の下が第1遺構面である。溝3条、ピット8基を検出した。

SD101 1区で検出した東西方向に延びる溝で、幅約1.2m、深さ5cmの規模を持つ。中世の土師器、須恵器が出土した。

SD102・103 7区で並んで検出した南北方向に延びる溝である。いずれも幅40cm、深さ約5cmである。非常に浅く、北側の1区では確認できることから、全長も短いものと考えられる。遺物はSD103からわずかに土師器が出土した。

ピット 他に、1区でピットを検出した。直径12～40cm、深さ6～20cm程度の規模で、いくつかのピットから土師器の小片が出土している。詳細な時期は不明だが、ピットの多くはSD101に切られており、埋土の状況から見て、いずれもSD101にやや先行すると考えられる。

第2遺構面

第1遺構面基盤層を含む遺物包含層を取り除くと第2遺構面である。溝2条、土坑2基、ピット4基、落ち込み1基を検出した。

土坑・落ち込み 1区西部で土坑2基とそれに切られる落ち込み1基を検出した。遺物は土師器が出土したが、小片のため詳細な時期・性格は不明である。

SD201 7区で検出した幅20cm、深さ7cmの溝である。遺物は土師器の小片がわずかに出土したのみで、性格は不明である。7区ではこの溝辺りを境に東側に淡褐色シルト、西側に

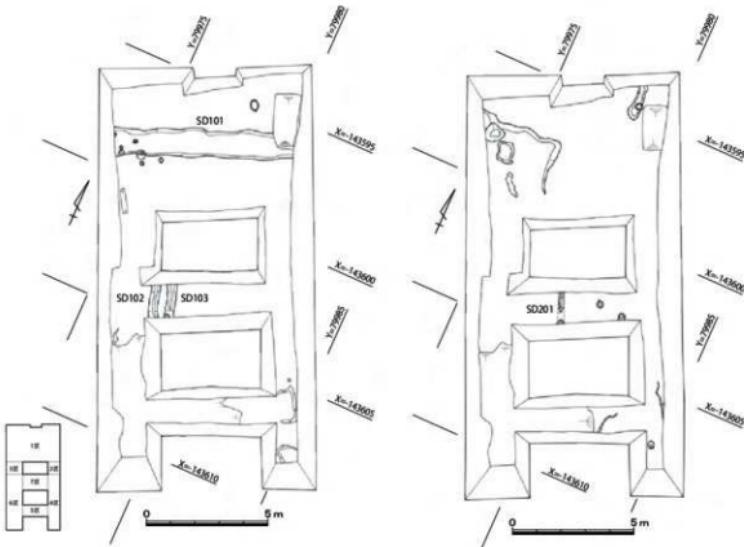


fig.82 第1遺構面平面図

fig.83 第2遺構面平面図

黒灰色シルトが広がる。

ピット 1・4・7区でピットを検出した。直径 20~30cm、深さ 7~14cm 程度である。遺物は土師器がわずかに出土したが、小片のため時期は不明である。

第3遺構面

第2遺構面基盤層である遺物包含層を取り除くと第3遺構面である。7区では SD201 より東側にこの遺物包含層が確認された。また、5・7区では建設工事の影響深度下となるため、第3遺構面は検出しておらず、4区のみで調査を実施した。遺構は、竪穴建物 1 棟、ピット 3 基を検出した。

SB301 4区北半で検出した竪穴建物で、2辺とそれに伴い屈曲するベッド状遺構を確認できたことから、平面形は方形であると推定される。ベッド状遺構の他に、貼床、周壁溝（幅 25cm、深さ約 19cm）、土坑 3 基（SK01~03）を検出した。柱穴は確認していない。北側の周壁溝は西端でピット状に深くなっている。また、土坑はベッド状遺構を掘り込んで作られ、多量の土器が出土した。SK02・03 は浅く床面をやや掘り込む程度で、拳大の石とともに大半の土器はベッド状遺構上面で検出している。SK01 は大きく床面を掘り込んで作られている。調査区外に広がるため規模は不明だが、深さ 20cm 以上となる。出土土器は壺、壺、高環、器台などである。弥生時代末~古墳時代初頭に営まれたと考えられる。

また、ピット（SP301~303）を検出した。直径 24~30cm、深さ 12~16cm で、土師器の小片がわずかに出土した。詳細な時期は不明だが、SP301・302 は SB301 埋土を切っている。また、SP303 も埋土の状況から、同様の時期と考えられる。

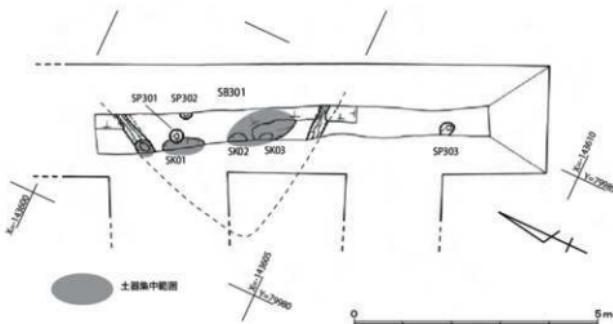


fig.84 第3遺構面平面図

3.まとめ

調査の結果、遺構面を2～3面確認し、第1遺構面では中世の溝、ピットを、第2遺構面では弥生時代末～古墳時代前期と考えられる落ち込み、溝、土坑、ピットを検出した。第3遺構面では弥生時代末～古墳時代前期初頭の竪穴建物、ピットを検出した。

第1遺構面の遺構で注目されるのは、1区で検出した溝SD101である。非常に浅いが、調査区を東西に横断し、第4次調査の平安時代前期の溝SD01に続く可能性がある。ただし、今回の調査・第4次調査とも、周辺に中世の遺構は非常に少なく、溝の性格は不明である。今回の調査では、南接する第43次調査など南側の調査地に比べ、同時期の遺構が全体的に希薄で遺物包含層も確認されず、出土遺物の量も少ない。このことから、今回の調査地は後世の耕作・造成により遺構面が削平されてしまったか、遺跡の縁辺部に当たると考えられる。

第2遺構面で検出した遺構の詳細な時期は不明だが、上層の遺物包含層の状況から、弥生時代末～古墳時代前期にあたると考えられる。

第3遺構面では、方形の竪穴建物SB301を検出した。非常に狭い範囲の検出であったが、貼床、ベッド状遺構、建物内土坑、周壁溝が残存しており、遺構の保存状態は非常に良好である。また、床面上や建物内土坑から完形に近い土器が出土しており、竪穴建物の詳細な時期や器種構成を知ることができる。周辺の調査で見つかっている建物跡と同様の時期であることから、弥生時代末～古墳時代前期初頭の集落の一部を形成していたことがわかる。



fig.85 1・3区 第1遺構面全景（南西から）



fig.86 4区 SB301全景（西から）

8. 熊内遺跡 第8次調査

1. はじめに

熊内遺跡は、六甲山系から流れ出た芦川が形成したとされる扇状地上に立地する。山陽新幹線新神戸駅の南東側に位置し、中央区熊内町・熊内橋通・旗塚通一帯に広がっている。平成元年の試掘調査で初めてその存在が確認された後、これまでに7回の調査が行なわれ、主に縄文時代早期から奈良時代の遺構と遺物が確認されている。とりわけ弥生時代後期には竪穴建物や掘立柱建物、それらを囲む二重の環濠など多くの遺構が確認され、当地に環濠集落が営まれたことが明らかになった。その他にも、神戸市内最古となる縄文時代早期前半の竪穴建物も見つかっている。今回の調査地は、近接する第2次、第3次調査で確認された環濠の内側に位置し、熊内遺跡の中では南西寄りの場所である。

なお、令和2年度に『熊内遺跡第8次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

調査は対象範囲を南東部（1区）、北～中央部（2～4区）、ガス管理設部（5区）、西部（6区）に区分して調査を実施した。

基本層序

調査地は北側から南側に向けて緩やかに傾斜している。現地表面の標高は34.4～35.4mで、調査地東側の中央部には、耕作地として利用されていた名残で約50cmの段差がある。現地表面から約10～45cmまでは盛土を含む造成土・搅乱土で、その下層に旧耕土層がある。旧耕土層の詳細な年代は不明だが、古代以降の須恵器や陶磁器を含む。

標高34.1～35.2mで、弥生時代後期の土器を含む遺物包含層である、黒褐色シルト～黒褐

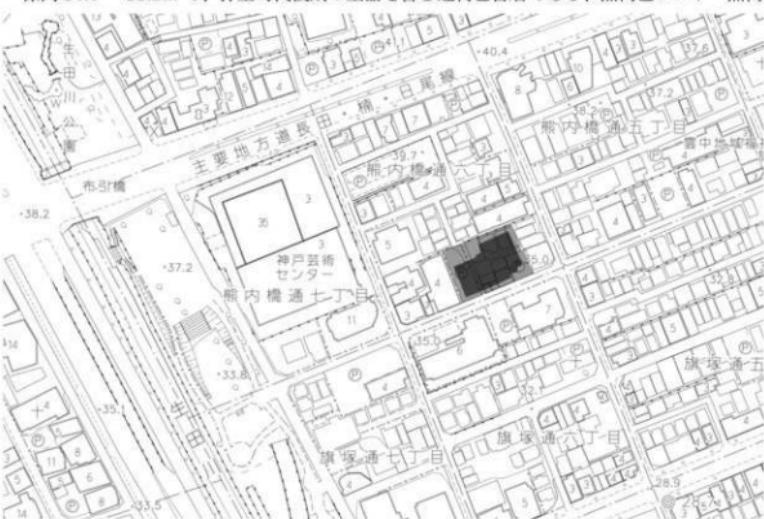


fig.87 調査地位置図 1:2,500

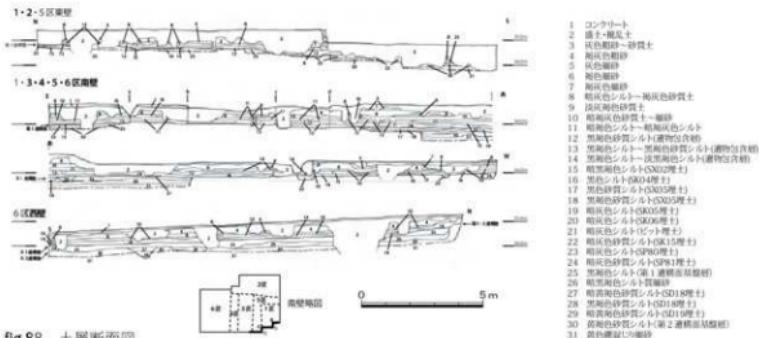


fig.88 土層断面図

色砂質シルト～淡黒褐色シルトとなる。遺物包含層は場所によって2～3層に分かれるが、各層の上面で遺構は確認できなかった。

標高33.80～34.95mで第1遺構面基盤層の黒褐色シルトとなる。

調査区南西部では、標高33.75～34.35mで第2遺構面基盤層の黄褐色砂質シルトとなる。なお第2遺構面基盤層は調査区北西端では第1遺構面基盤層と面と同じくし、そこから標高およそ34.35mまで急激にくぼみ、そのまま緩やかに南側へと傾斜している。

遺構面

調査区全体で1面、調査区南西部では2面の遺構面を確認した。

第1遺構面

遺構は竪穴建物2棟、溝16条、落ち込み4基、土坑15基、ピット多数を検出した。

2・5区で竪穴建物(SB01)を検出した。平面形は一辺が約4mの隅丸方形で、検出面からの深さは25cmである。建物内からは、周壁溝、土坑1基、ピット5基を検出した。

埋土中からは少量の弥生土器が出土しているが床面からは出土せず、建物の詳細な年代は不明である。

周壁溝は幅約20cm、深さ約10～30cmで、竪穴建物の北半を巡るように検出した。南半では確認できず、その有無は不明である。土坑は東西約50cm、南北約80cm、深さ約20cmで西壁の周壁溝を切るように掘り込まれている。

ピットは直径約30～35cm、深さ約10



fig.89 第1遺構面平面図

～20cmである。これらのビットは位置が不定のため、柱穴となるかは不明である。

6区でも竪穴建物(SB02)を検出した。平面形は東西7.2m×南北7.4mの隅丸方形で、検出面からの深さは25～80cmである。床面には厚さ1～3cmの貼床が一部施されていた。建物内からは、ベッド状遺構、中央土坑、柱穴7基を含むビット10基を検出した。ベッド状遺構上の出土遺物から、弥生時代後期に営まれたと考えられる。

ベッド状遺構は幅80～110cm、高さ10～20cmで地山を削り出し、その上に一部貼床を施す。西辺以外の3辺で検出したが、本来は全周すると考えられる。中央土坑は直径約85cm、深さ約50cmの漏斗状を呈する。

遺物は、埋土中から弥生土器や火を受けたと思われる砥石の小片、モモの核が出土している。7基の柱穴のうち、SB02-P1～P4の4基が主柱穴で、直径30～40cm、深さ15～45cmを測る。SB02-P1の柱痕埋土上層で、肩部より下を欠いた壺が出土した。

主柱穴のうちSB02-P2を除く3基は、SB02-P5～P7を伴う。これらの柱穴は直径15～25cm、深さ5～20cmと、主柱穴に比べ規模が小さく、主柱穴を補強するための柱を立てた痕跡と考えられる。このほか、床面でビット3基を検出した。これらは直径20～40cm、深さ5～20cmを測る。建物南西隅のベッド状遺構上では、ほぼ完形の弥生時代後期の甕と、土器の原料と考えられる粘土塊を検出した。粘土塊はベッド状遺構に沿って、南北1.2m、東西10～40cmの範囲に置かれていた。甕は粘土塊の南に隣接し、口縁部を粘土塊へ向けて立てかけるように置かれていた。

また、SB02の埋土のうち、暗灰色粘性砂質土より昆虫遺体を多量に検出したため、周辺の土壤ごと取り上げ持ち帰った。この土壤中から、アシナガバチ類の一種と見られる頭部、胸部、腹部の外骨格と翅を確認した。昆虫遺体は粘性の強い土壤で密閉され、大気から遮断されていたため、バクテリアによる分解等、劣化作用を受けずに残存したと思われる。これらの種は樹下等に営巣するため、人為的もしくはその他の二次的な要因で土中に埋蔵されたと考えられる。頭部を数えた結果、最少個体数は73個体である。

2・5区で南北方向に延びる溝(SD04・17)を検出した。SD04は幅0.5～1.7m、深さ10～25cmで、埋土から弥生土器が出土している。SD17は幅1.0～2.3m、深さ10～20cmで、埋土から広口壺など弥生時代後期の土器が出土している。南端は攪乱を受けており不明である。

4・6区でC字状の溝(SD14)を検出した。幅0.4～1.15m、深さ10～40cm、全体の直径は4～5mである。遺物は出土せず、時期や性格は不明である。

調査区内において落ち込みを5基検出した。南北0.7～4.0m、東西1.0～4.5m、深さ10～25cmを測る。埋土から弥生土器が出土している。

そのほかビットを多数検出したが、現時点で掘立柱建物を構成するものは確認できていない。
第2遺構面

第1遺構面調査後、3・4区南壁と6区西壁の壁面沿いに断割りトレンチを設定し、下層の確認を行なった。3・4区の第1遺構面下層では、遺物や遺構を確認できなかった。一方、6区西壁の断割りトレンチでは第1遺構面の下層で溝2条(SD18・19)を検出した。これにより、調査区南西部では2面の遺構面が存在することが明らかとなった。

SD18・19は東西方向に並行して延びる溝である。SD18は幅1.0～1.5m、深さ10～20cm、SD19は幅1.2～1.5m、深さ10～65cmで、共に遺物が出土しなかつたため、時期は不明である。

3.まとめ

今回の調査では、従前の建物やその解体に伴う搅乱があるものの、遺構面を大きく損なうものでは無く、おむね良好に遺跡が保存されていた。

第1遺構面からは弥生時代後期後半の遺構や遺物を確認した。

竪穴建物SB01は隅丸方形プランを検出したが、後世に大きく削平されており、残存状況はあまり良好ではない。建物内のピットは位置が不定であり、柱穴となるかは不明である。周壁溝は建物の北半のみで検出し、南半は削平を受けた可能性がある。もしくは南向き斜面に建てられているため、外部からの水の浸入を考えると、標高の低い南側には周壁溝を設置しなかつたとも考えられる。建物内からは年代を特定できる遺物は出土しなかったが、周囲の遺構の状況と比較すると、同じく弥生時代後期の建物と考えられる。

一方竪穴建物SB02の残存状況は良好で、ベッド状遺構、中央土坑、柱穴などを検出した。埋土からは多量の遺物が出土しており、SB02廃絶後に土器などを廃棄した捨て場として利用されたと考えられる。また往穴SB02-P1から出土した壺は、柱抜き取り後の祭祀が行われたと考えられる。その他、今回の調査で多数のピットを検出したが、掘立柱建物を構成するものは確認されなかった。

第2遺構面では2条の溝を検出したが、時期や性格は不明である。

今回の調査では、第1遺構面において、弥生時代後期の環濠集落内の居住域の一端を明らかにした。



fig.90 1～4区 全景（西から）



fig.91 5区 南西部全景（北西から）



fig.92 6区 全景（北から）



fig.93 6区 SB02 中央土坑（北東から）

9. 雲井遺跡 第40次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、六甲山系より大阪湾へと流れる旧生田川により形成された扇状地の、標高21~10mの扇端部付近に立地する、縄文時代から古墳時代の遺跡である。昭和62年度の第1次調査以来、これまでに40回近くの発掘調査が実施されている。

昭和62年度にJR三ノ宮駅東側の雲井通6丁目において、市街地再開発事業に伴い実施された第1次調査では、縄文時代前期の炉跡、縄文時代晩期~弥生時代前期の土坑や落ち込み、弥生時代中期後半の方形周溝墓群や木棺墓などが検出され、縄文時代早期~弥生時代中期の土器・石器などの多量の遺物が出土した。また平成20・22年度に旭通4丁目で市街地再開発に伴い実施された第28・33次調査では、弥生時代中期後半の竪穴建物群などが検出され、特筆される遺物として、弥生時代中期後半の玉造関連遺物や砥石に転用された武器形青銅器鋸型が出土した。

2. 調査の概要

今回の調査はホテル建築に伴うものである。調査地は平成4年度第5次調査地および、平成16年度第19次調査地の西側に隣接する。工事計画により埋蔵文化財へ建物基礎の掘削が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。調査は前年度からの継続である。

基本層序

調査地は、現況では北西から南東へと下がる緩斜面地である。盛土層および整地層下に複数の耕土・床土層が存在する。盛土層および整地層からは近代の煉瓦が出土しており、近世までの耕作地が近代以降に開発されたことに伴うものと考えられる。これらの下層に弥生時代の遺物を含む遺物包含層である黒灰色砂質シルト質細砂を検出した。この上面で中世の遺構面を検出した(第1遺構面)。また、黒灰色砂質シルト質細砂下層の暗茶褐色シルトの上面で、第



fig.94 調査位置図 1:2,500

2遺構面（弥生時代）を検出した。なお、調査地の南半と西側は從前建物基礎による搅乱により、遺物包含層と遺構面は失われていた。無遺物層の第10層は、北に向かって下るゆるやかな傾斜面を持っている。

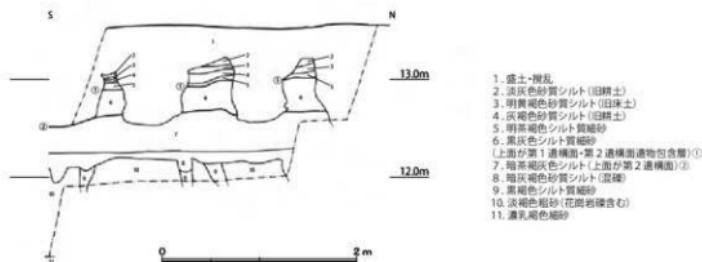


fig.95 調査区北東部西壁断面図

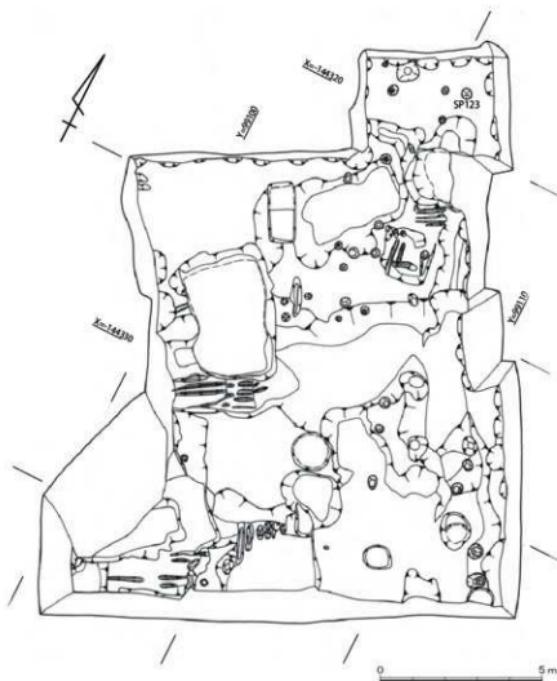


fig.96 第1遺構面平面図

第1遺構面

搅乱の影響を大きく受けているが、ピット20基以上を検出した。

ピット 規模は直径15～65cm、検出面からの深さは10～35cmである。いずれも建物としてのまとまりを確認することはできなかった。出土遺物は微細なものが大半であるが、SP123から平安時代末～鎌倉時代初頭頃と考えられる須恵器壺の底部が出土しており、検出した遺構はおおむね中世の時期が考えられる。

第2遺構面

搅乱の影響を大きく受けているが、調査区の北半部から溝1条、土坑3基、ピット6基、落ち込み2ヶ所を検出した。

溝 調査区北端から南へ下がり、東へ向かう溝1条（SD201）を検出した。

SD201は幅0.75～1.5m、検出面からの深さ35cm前後の溝である。埋土は黒灰色細砂である。弥生土器片がわずかに出土した。

土坑 SK201は長径80cm、短径55cm、検出面からの深さ10cmである。SK202は長さ1.6m、幅1.15m、検出面からの深さ10cm前後の長方形の土坑である。SK203は長径75cm、短径



fig.97 第2遺構面平面図

65cm、検出面からの深さ33cmの土坑である。これらの土坑では、SK202から弥生土器片が出土している。

ピット 規模は25～55cm、検出面からの深さは15～20cm程度である。いずれも建物としてのまとまりを確認することはできなかった。出土遺物はSP203から弥生土器片が出土した。落ち込み 長さ1.4m、幅55cm、検出面からの深さ10cm前後の落ち込み(SX201)と長さ1.0m、幅50cm、検出面からの深さ35cmの落ち込み(SX202)を検出した。出土遺物は無かった。

3.まとめ

今回の調査では中世と弥生時代の遺構面を検出した。

第1遺構面からは20基以上のピットを検出した。第1遺構面上層の旧耕土からは瓦器の破片が出土しており、SP123出土の須恵器塊からおむね平安時代後半の時期が考えられる。中世段階では調査地近隣では顕著な遺構は確認されておらず、集落の縁辺部と考えられる。

第2遺構面からは弥生時代の遺構・遺物が検出された。弥生土器片が出土しているが、微細な破片であり、詳細な時期は不明である。また、遺物包含層からあるが石鐵が出土している。

弥生時代には、南東側の第28・33次調査で弥生時代中期後半の集落が確認されており、東側隣接地における第5・19次調査においても、弥生時代中期後半の遺構・遺物が確認されている。

第19次調査では検出された溝から、供献土器と推定される穿孔された弥生土器長頸壺などが出土しており、方形周溝墓である可能性が考えられている。第1次調査でも中期後半の方形周溝墓群が確認されていることから、調査地の東側から南北西側にかけては墓域の広がり推定される。今回の調査地は、これらの集落と墓域の間に位置しているものと考えられる。



fig.98 第1遺構面全景（北東から）



fig.99 第2遺構面全景（北西から）

10. 生田遺跡 第9次調査

1. はじめに

生田遺跡は、旧生田川西岸の微高地上に立地する縄文時代から安土・桃山時代までの複合遺跡である。標高は11.0～19.3mで、北西が高く、南東が低い勾配となっている。地形は、諏訪山から南へ向かってなだらかに続く段丘があり、その段丘の東側に微高地が形成されている。当遺跡は、この微高地上に位置する。遺跡の範囲は、東が生田神社から西がトア公園までの約390m、南が北長狭通から北が生田の森までの約330mである。

当遺跡では、縄文時代の北白川上層式～宮滝式段階に集落の形成がはじまる。この時期の遺構・遺物は、翡翠製小玉、珪質頁岩製石鏃など遠隔地との交流がうかがえる資料や、石刀、東海系土偶といった祭祀具なども出土しており（第4・7・8次調査）、当遺跡が縄文時代の拠点的な集落として機能していたとみられる。弥生時代中期中葉～後葉には、雲井遺跡から分村したとみられる集団が生田遺跡に集落を形成しているが、その営為は継続しなかったようである。古墳時代中期後半～平安時代には、長期にわたり集落が継続する。古墳時代の集落は、滑石製模造品や製塙土器などが出土しており、方形の堅穴建物を主体とする段階と、掘立柱建物を主体とする段階の2時期が画期として認められ、建物様式の変遷過程がうかがえる（第1・4・5・8次調査）。飛鳥時代～平安時代の集落は、掘立柱建物群と井戸、苑池状遺構、転用観などがみつかっており、当遺跡が当該期における一つの拠点集落として機能していたとみられる。室町時代末期には、花隈城に関連する可能性のある南北溝が検出されている（第6・8次調査）。



fig.100 調査位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、ホテル建設に伴う発掘調査である。調査地点は、生田神社の西隣にある。今回の調査地点に隣接する第1・5次調査では、古墳時代中期後半～後期前半の竪穴建物と掘立柱建物が検出されており、古墳時代の集落が今回の調査地まで及んでいることが想定できる。

基本層序

当該地は、西側に駐車場、東側にビルがあったため、西側はほぼ平坦な地形を呈し、東側は規則整然とした。調査地の標高は、東 12.3 m、西 13.5 m、南 12.3 m、北 12.8 mで、西高東低の勾配である。国土地理院の土地条件図と既存の発掘調査成果を踏まえると、段丘は、現在の元町駅から西側のエリアと、トア公園から生田神社の間に形成されており、この二つの段丘の間を諫訪山南麓から流れる旧河道が開拓している。当遺跡は、東側の段丘上に立地している。

層序は、現地表面から標高 12.8 m までが盛土・造成土・耕作土等を含む土層で、主に明治時代～昭和時代にあたる。これを取り除くと第1遺構面があり、第2遺構面は標高 12.6 m で検出した。遺物包含層の厚さは 20cm ほどである。第2遺構面より下位の土層は、褐色粗砂と黒色粘質土が主体であり、これらの土層から遺構・遺物は確認できなかった。

検出遺構 竪穴建物 (SB) 2 棟、掘立柱建物の可能性がある柱穴 1 基、柱穴もしくはピット (SP) 15 基 (SB201 の柱穴を除く)、土坑 (SK) 2 基、南北溝 (SD) 5 条、性格不明遺構 (SX) 2 基を検出した。洪水砂の下で検出した南北溝 3 条、性格不明遺構 1 基があり、これを第1遺構面とした。それ以外の遺構は、第2遺構面のものである。なお、第2遺構面も遺構間の切り合い関係から時期差がある。第1遺構面は古墳時代後期後半～飛鳥時代、第2遺構面は古墳時代中期後半～後期前半の所産とみられる。

第1遺構面

第4層（パイランを含む黒茶色細砂）上に

薄く灰色粗砂が調査区

全面に堆積していた。

この灰色粗砂は洪水砂

とみられ、古墳時代～

飛鳥時代とみられる遺

物を含んでいる。この

洪水砂を除去すると、fig.101 調査区断面図



fig.102 調査区西壁断面（東から）



fig.103 調査区北壁断面（南東から）

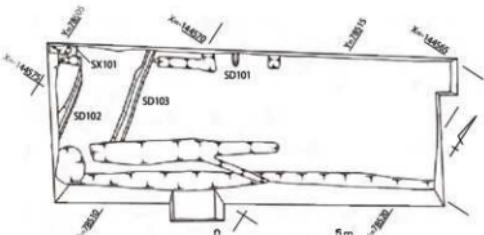


fig.104 第1遺構面平面図



fig.106 第1遺構面全景（西から）

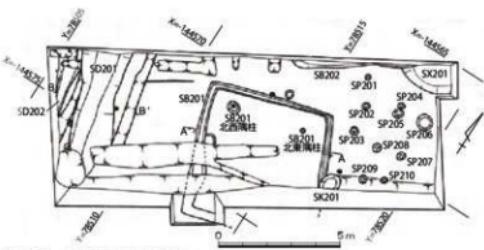


fig.105 第2遺構面平面図

南北溝3条（SD101～103）と性格不明遺構1基（SX101）を検出した。

SD101 調査区中央の北壁側で検出した南北溝である。幅30cm、深さ10cmである。土師器と須恵器が出土しているが、細片のため、図化できなかった。

SD102 調査区西壁際で検出した南北溝である。幅50cm、深さ10cmである。土師器と須恵器が出土しているが、細片のため、図化できなかった。

SD103 SD201を削平する南北溝である。幅40cm、深さ10cmである。

SX101 調査区北西隅で検出した遺構で、攪乱による削平が著しいため、規模は不明である。深さ20cmである。

第2遺構面

堅穴建物や南北溝などの主要遺構を検出した遺構面である。第22層（バイラン含む黒褐色細砂）が主体で、非常に硬い土層である。

SB201 一辺5.6mの壁際溝を有する方形の堅穴建物である。建物の北側に柱穴が2基あり、北西隅の柱穴からは、一辺9cmの芯持ち角材が出土している。壁際溝は、幅30cm前後、深さ25～30cmほどで、建物全体に廻るとみられる。建物内には、厚さ20cm前後の貼床が施されており、その貼床を除去すると、各所に焼土と炭が堆積していた。貼床内からは、滑石製剣形模造品2点（fig.114-96・97）と白玉3点（fig.114-98～100）が出土している。土師器と須恵器の出土量が多く（fig.111-9～22、fig.112-58～68）、製塩土器（fig.114-92～95）や土錘、甑（fig.113-71）なども出土している。

SB202 一辺5.1m前後とみられる方形の堅穴建物である。遺構の大半が調査区外にあるため全容は不明だが、遺構の大きさと形態からみて、堅穴建物と判断した。現状の深さは10～20cmほどである。土師器と須恵器が出土しているが、細片のため、図化できなかった。

SP201～205・207～210 直径20～40cm、深さ20～30cmの円形もしくは梢円形を呈



fig.107 遺構断面図

する。SP202・203・208・209から土師器、SP210から須恵器が出土しているが、細片のため、図化できなかった。

SP206 直径70cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。第5次調査で検出している掘立柱建物の南西隅柱にあたる可能性がある。埋土中から刻目突帯文土器の口縁部片が出土している (fig.114-107・108)。

SK201 幅70cm×90cm、深さ25cmの梢円形を呈する。SB201東側壁際溝を切る。土師器と砥石が出土している。砥石 (fig.114-101) は、現存長9.7cm、最大幅5.5cm、最大厚4.3cmで、半分以上が欠損している。

SD201 幅1.4～2.1m、深さ25～30cmの南北溝で、南北側が近代の井戸と暗渠によって削平されている。層位は、上層（4・6～8層）と下層（10～16層）に分けることができ、さらに下層は、10層・11～15層・16層の3期に分けることができる。上・下層とも土師器と須恵器の出土量が多く、この中には、上流から流れてきたとみられる転用砾の可能性がある須恵器 (fig.114-104) や、輪羽口 (fig.114-105)、櫃を据える台石 (fig.114-106)、偶蹄類の歯なども含まれていた。

下層からは、モモの核と二次調整のあるサヌカイト剥片 (fig.114-112)、L字形を呈する石製品とみられる遺物 (fig.114-113) などが出土している。**SD202** 幅70～75cm、深さ15～20cmの南北溝である。北側がSD201上層に切られ、南側が調査区外へ延びる。SX101と近代の搅乱によって遺構の北側が削平されている。土師器と須恵器が出土しているが、細片のため、図化できなかった。

SX201 調査区北東隅で検出した遺構で、西側はSB202に切られ、東側は搅乱によって削平されていた。竪穴建物の可能性もあるが、大部分が調査区外に入るため、性格不明遺構とした。深さ20cmほどである。土師器と須恵器、提砥が出土している。提砥 (fig.114-102) は、平面・断面とともに長方形を呈する粘板岩製の砥石である。全長13.4cm、穿孔されている側の短辺幅1.8cm、穿孔のない短辺幅2.7cm、最大厚1.2cm、中央部分の研ぎベリしている部分の厚さ1.0cm



fig.108 第2遺構面全景（西から）



fig.109 SD201断面（南から）

である。孔は片面穿孔（直径3mm）で、穿孔のない短辺の角は隅丸に仕上げられている。提砥は、第4次調査や長田区松野遺跡、東灘区郡家遺跡などの集落からも出土しているが、今回出土した提砥は、後述する古墳への副葬品にみられるものと形態的に類似しており、これまでの研究成果から朝鮮半島との関わりが指摘されている資料である。

第2遺構面上から単独で出土した有舌尖頭器（fig.114-111）は、鋒が折れによる剥離痕で折損しているが、身部は三角形状でゆるやかに外湾する側縁形態を呈し、舌部の抉りが内湾する。舌部近くには、斜状平行剥離が施されている。本例は、いわゆる柳又型尖頭器にあたるものであり、近隣では、熊内遺跡からも同系統の有舌尖頭器が出土している。この有舌尖頭器の所属時期は、縄文時代草創期前半の所産と考えられる。サスカイト製で、暗灰色を呈する。現存長4.35cm、舌部長1.4cm、最大幅2.1cm、最大厚8mmである。

3.まとめ

第1遺構面で検出した遺構は、南北溝3条と性格不明遺構1基で、その直上に洪水砂が薄く堆積していた。当調査地の北側では、鎌倉時代～室町時代の自然流路（第2次調査）と古墳時代後期～飛鳥時代の沼状遺構（第3次調査）が検出されているが、今回検出した当該期の洪水砂は、第1・5次調査で報告されていない。後述する第2遺構面の建物群は、遅くとも古墳時代後期中葉までに廃絶しているが、その後、当調査地周辺の開発は進まず、飛鳥時代～平安時代の集落は、現在の山手幹線沿いを中心に戻展開していくとみられる。

第2遺構面で検出した古墳時代の遺構は、堅穴建物2棟、掘立柱建物の可能性がある柱穴1基、柱穴もしくはビット15基、土坑2基、南北溝2条、性格不明遺構1基である。堅穴建物は中期後半、掘立柱建物の可能性がある柱穴は後期前半、SD201は中期中葉～後期後葉に比定できる。

SB201の時期は、古墳時代中期末頃にあたると考えられる。土師器の特徴を概観すると、高环の出土量が多く、环部と脚部の接合方法も円盤充填型や环部挿入型など様々な接合技法が用いられている。また、环部の口縁端部と脚部の端部は、丸く收められているものが多い。甕は、口縁をヨコナデして口縁端部を内傾させるのが特徴で、郡家遺跡第83次調査で検出した土坑や堅穴建物出土の甕と形態が類似する。この他にも、器表面に格子目タキが施された韓式系軟質土器（fig.112-68）や、長胴化していない段階の瓶（fig.113-71）も出土している。製塩土器は、主に手づくねで整形されたもので、ユビナデもしくはユビオサエで調整されている。口縁が内傾するものと、ほぼ垂直に延びるもの2種類があり、いずれも白水遺跡第3次調査第1・2トレンチ流路2から出土しているものと形態が類似している。

土器以外では、滑石製品や魚類の骨とみられる動物遺存体が出土している。滑石製剣形模造品は、鎬がなく、刃部の研ぎ出しもされていない写実性の低いものであり、西区新方遺跡や兵庫区・長田区・上沢遺跡などで出土している剣形模造品と形態が類似する。このような事例は、古墳時代中期後半以降に多いタイプであることが指摘されている。製塩土器と滑石製模造品が伴う事例は、塩の消費地だけでなく生産地でも知られているが、製塩に関わる祭祀が消費地で行われた可能性は低いといふ。SB201の貼床内には、焼土と炭が含まれておらず、その層中から滑石製模造品が出土していることを考慮すると、本例の場合は、建物の改修に伴う祭祀で使用されたものと考えられる。

掘立柱建物は、第1・5次発掘調査で検出されている建物群と同時期の所産と考えられる。SP206は、第5次調査で検出されている掘立柱建物の南西隅柱にあたる可能性があり、調査区外にもう一つ柱穴があるとすれば、桁行4間×梁行2間以上の建物になるとみられる。それぞれの一間幅は、桁行が約

2.1～2.4 m、梁行が約 1.8 m である。第 1 次調査で検出している総柱建物とは規模が異なるため、性格が異なる建物とみられる。

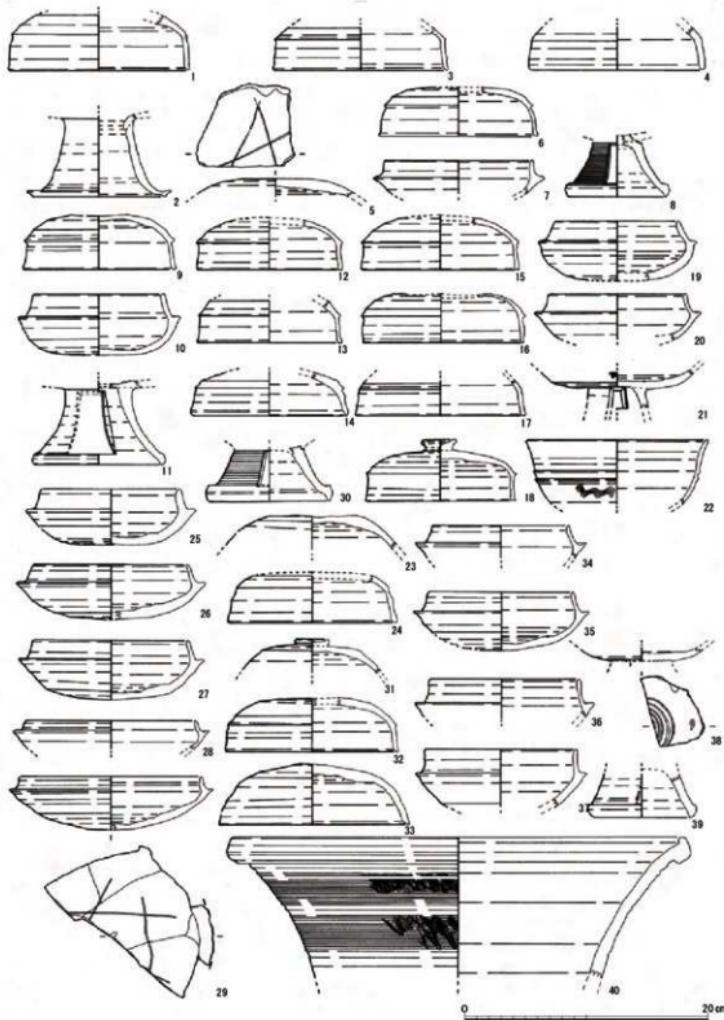
SX201 からは、実に様々な遺物が出土した。軒を据えるための台石 (fig.114-106) は、大阪府藤屋北遺跡や同龜川遺跡などでも出土しており、羽釜 (fig.112-41) と合わせて、河内平野の集団との交流をうかがうことのできる資料である。また、輪羽口 (fig.114-105) や第 2 遺構面上から出土した鉄滓は、今回の調査地周辺で鉄器製作を行っていた可能性を示唆するものといえるだろう。この他にも、転用硯の可能性がある須恵器 (fig.114-104) は、溝の上層から出土したものであり、共伴遺物に fig.114-28・29 の資料を含む。生田遺跡第 8 次調査でも飛鳥～奈良時代の円面硯や転用硯が出土し、同じ中央区内の花隈城向城跡や二宮遺跡からは、飛鳥時代～奈良時代の遺物が多量に出土している。これらの点も踏まえると、今回出土した転用硯の可能性がある須恵器は、近隣に当該時期の集落が存在するものと考えられる。

SX201 から出土した提砥 (fig.114-102) は、孔に紐を通して、ベルトなどに提げて使用する携帯用砥石である。日本列島では古墳時代中期中葉頃から見られるようになるといい、帶金式甲冑とセット関係にあることや、朝鮮半島南部から伝わった資料として位置づけられている。今回出土した提砥は三国時代の百濟に多いもので、実用品として主に男性が身に着けていたものに近いとみられる。提砥の形態は、広島県三次市三玉大塚古墳（5世紀後半）、福井県若狭町西塚古墳（5世紀後葉）、大韓民国ソウル市石村洞 3 号墳（4世紀中葉）などから出土しているものと類似している。今回出土した提砥は、中央部分に若干の使用痕が認められることから、実用品として用いられてきたとみて差し支えない。提砥が装飾品から実用品として用いられるようになるのは、鉄器の使用状況とも連動しているといい、輪羽口や鉄滓が出土している当遺跡の様相とも相關関係にある。古墳の副葬品として用いられる提砥と形態的な差が少ない資料が集落から出土した意義は、今後の検討課題とするが、このような資料が得られた点は、今回の調査成果を特徴づけるものといえるだろう。

最後に、これまでの発掘調査成果から生田遺跡の遺構変遷を概観する。生田遺跡東南部には、縄文時代晩期～弥生時代の土器が出土していることから、当該期の集落が存在した可能性は高い。その後、弥生時代の集落が途絶し、古墳時代中期後半に新たな集団がこの地に居住域を形成する。それが第 1・5・9 次調査で検出した遺構群である。この地域の集落は、古墳時代後期前半まで集落が営まれるが、洪水砂などの影響を受け、飛鳥時代以降に現在の山手幹線沿いへ集落が移動したと考えられる。今回出土した提砥や韓式系土器をはじめとする様々な外来系遺物は、古墳時代中期後半に、この地へきた新たな集団の存在を物語る資料として位置づけられるのである。



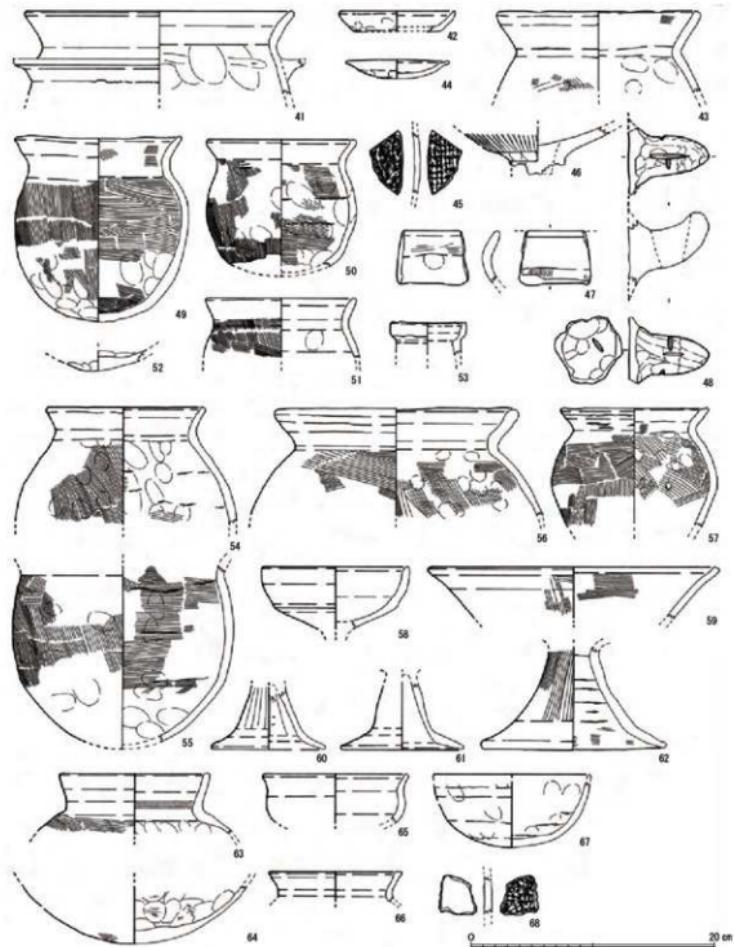
fig.110 古墳時代中期後半～後期前半の建物配置



【出土地点】1・2：重ね縦割跡、3・4：第1遺構面包含層、5～8：第2遺構面上、9～11：SB201貼床土層、12～22：SB201貼床下層、23～30：SD201上層、31～40：SD201下層

【器種】1：蓋、2：高环（脚部）、3・4：蓋、5・6：蓋、7：环、8：高环（脚部）、9：蓋、10：环、11：高环（脚部）、12～18：蓋、19・20：环、21：高环、22：高环（脚部）、23・24：蓋、25～29：环、30：高环（脚部）、31～33：蓋、34～37：环、38：高环（脚部）、39：高环（脚部）、40：器台（口縁部）

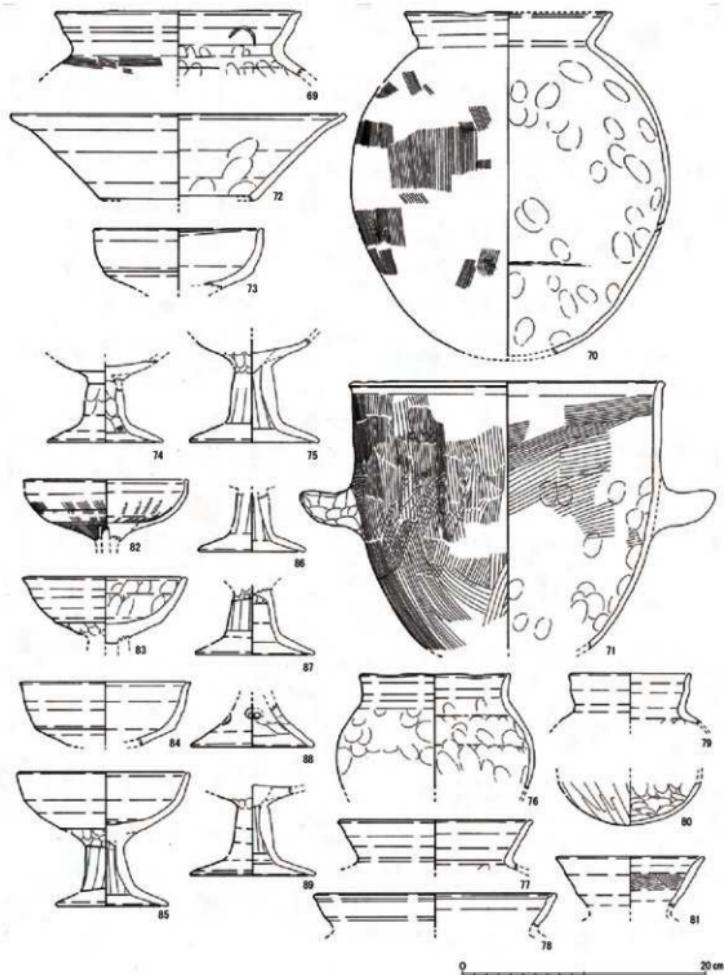
fig.111 出土遺物1（須恵器）



【出土地点】41～43：第1遺構面包含層、44～48：第2遺構面上、49～53：SD201上層、54～56：SD201上層～下層、57：SD201下層、58～68：SB201貼付上層

【器種】41：羽釜、42：皿、43：甌、44：皿、45：韓式系統質貯、46：高坏（环部）、47：甌、48：甌（把手）、49～51：甌、52：甌（底部）、53：三二子丑ア土器、54～56：甌、57：甌、58・59：高坏（环部）、60～62：高坏（脚部）、63：甌、64：甌（底部）、65・67：甌、66：甌（口緣部）、68：韓式系統質土器

fig.112 出土遺物2（土師器等）



【出土地点】69～75：S1 201上層～下層、76～89：S1 201下層

【器種】69・70：壺、71：壺、72・73：高杯（縁部）、74・75：高杯（脚部）、76：壺、77～79：壺（口縁部）、80：壺（底部）、81：壺（口縁部）、82～84：高杯（縁部）、85：高杯、86～89：高杯（脚部）

fig.113 出土遺物3（土師器等）

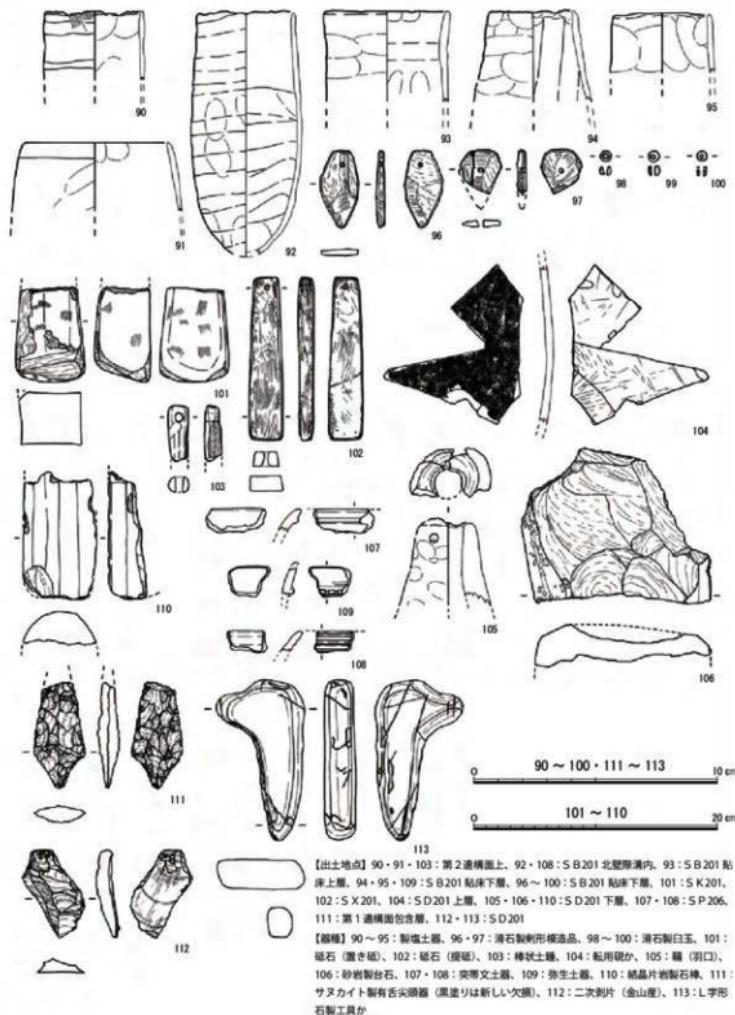


fig.114 出土遺物4（その他）

11. 生田遺跡 第10次調査

1.はじめに

生田遺跡は、JR三ノ宮駅・阪急神戸三宮駅の北西側に広がる遺跡で、生田川や鯉川などの小河川によって形成された標高11～24mの複合扇状地上に立地する。今回の調査地は遺跡の西南部、第4次調査地の南側に位置し、現地表面の標高は約17mを測る。南側は急傾斜となつて生田新道に下る。

遺跡は、昭和62年にホテル建設に先立つ試掘調査によって発見され、現在までに9次の調査が実施されている。第4次調査では縄文時代中期の船元式土器が出土している。同調査では、縄文時代後期の土器や竪穴建物状遺構のほか、他地域との交流関係を示す土偶やヒスイ小玉などが出土し、当該期の中心的な集落と考えられている。また、遺跡名は異なるものの同じ立地条件である西側の花隈城跡第5次調査では、縄文時代の梢円状に配列されたビットと灰と炭を含む土坑、竪穴建物状の落ち込みが確認されている。

弥生時代では、前期の遺構・遺物は確認されていないが、中期には第7次調査で柱穴・溝、第4次調査で中期中葉の竪穴建物、中期後葉の方形周溝墓・土坑などが、第8次調査で中期後半の方形周溝墓と考えられる溝が確認されている。

古墳時代は、第1次調査・第4次調査などで中期～後期の竪穴建物・掘立柱建物が検出され、特に掘立柱建物群は配列が規則的であることから、倉庫群や豪族居館の一部とも考えられている。その他、竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑が第3・5・8・9次調査で確認されている。飛鳥時代～平安時代にかけての古代では、第8次調査で遺構・遺物が確認され、古代山陽道を含めた周辺の遺跡を考える上で重要な成果が得られている。また、奈良時代と平安時代の井戸が第4次調査で確認されている。

中世以降では、鰐溝や大溝が確認されるなど、主として耕作地として利用されていたことがわかる。

以上のように、生田遺跡は縄文時代から中世までの遺構・遺物が確認され、重要な遺跡であることが認識される。



fig.115 調査地位置図 1:2,500

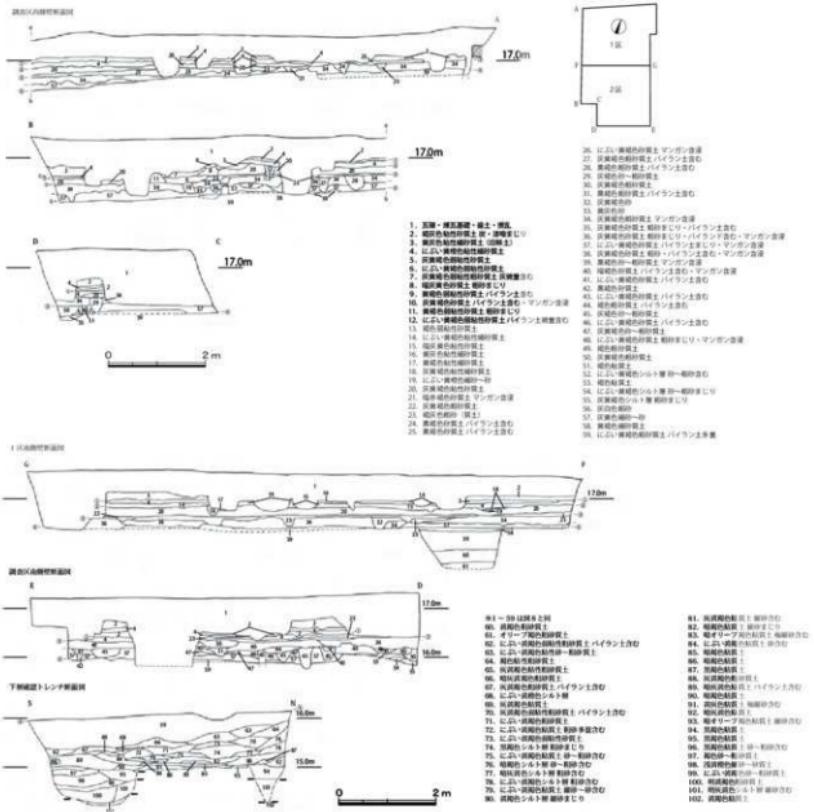


fig.116 調査区土層断面図

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、試掘調査の結果、第4次調査と同様の繩文土器を含む遺物包含層と遺構面が確認されたため、工事影響範囲について発掘調査を実施した。

2. 調査の概要

基本層序

現況地表面の標高は、北側で 17.7 m 前後、南側で 17.1 m 前後を測る。層序は上層より、瓦礫・煉瓦基礎・盛土・搅乱・旧耕土、にぶい黄褐色粘性細砂質土（上面が第1遺構面）、灰黃褐色粘性砂質土（上面が第2遺構面）、褐灰色粗砂（質土）、灰黃褐色粗砂質土（上面が第3遺構面）、にぶい黄褐色粗砂質土（上面が第4遺構面）の順に堆積する。南半では傾斜地の堆積のため、第3遺構面と第4遺構面の間にさらに灰黄色細砂・砂質土が存在し、この層の上面でも遺構を検出した。

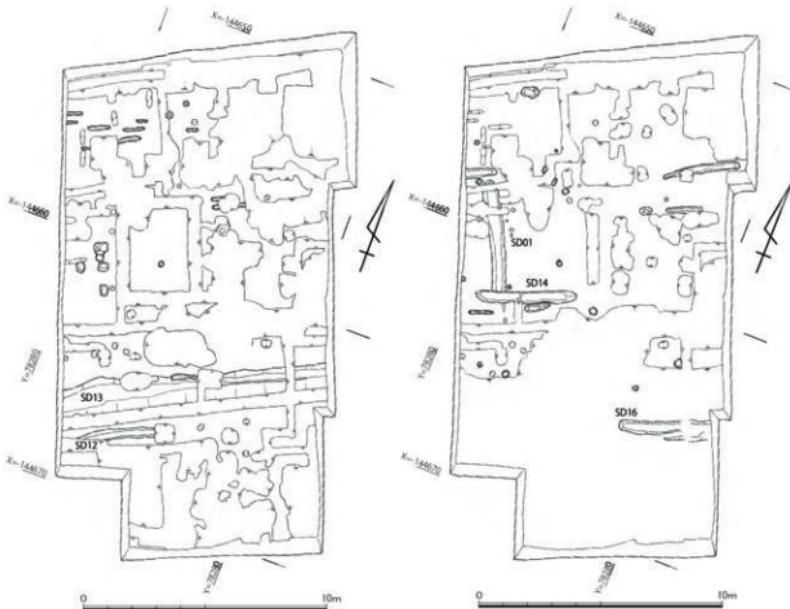


fig.117 第1遺構面平面図

fig.118 第2遺構面平面図

第1遺構面

旧耕土と考えられる黄灰色粘性細砂質土を掘削後、にぶい黄橙色粘性細砂質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は北側で約17.0m、南側で約16.6mを測る。ピット・溝・鋤溝などを検出した。

遺構面の時期は、上層および遺構内の遺物から13世紀以降と考えられる。

SD12 調査区西南部で検出した、長さ約3m、幅約40cm、深さ約10cmを測り、黒褐色砂質土を埋土とする。土師器・須恵器が出土した。

SD13 SD12の北側で検出した溝である。調査区を東西方向に横断して両端は調査区外になる。また南肩は暗渠により損壊を受けているため当初の幅は不明であるが、現状での最大幅は約1.5m、深さ約50cmを測る。東端から西へ3.8mまでは石組が残存しており、暗渠としての機能が与えられていたことがわかる。にぶい黄褐色～灰褐色砂質土の埋土からは、土師器・須恵器・瓦・土錘などが出土している。

鋤溝 北側等の小規模な溝は耕作に伴う鋤溝と考えられる。溝の方向はSD13に平行する。

礎石 中央西側で礎石を4基検出した。30cm×20cm前後で上面が平らな花崗岩を用いてT字形に配列され、芯々間は約80cmから1mを測る。

据え付け時の掘形からは土師器・須恵器が出土しているが、磨滅を受けた小片であり明確な時期は判定できない。

第2遺構面

平安～鎌倉時代の遺物を含むにぶい黄橙色粘性細砂質土を掘削後、灰黃褐色粘性砂質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は北側で約16.9m、中央部で約16.5mを測る。南半について、耕作に伴う造成により遺構面は削平を受けていた。遺構は、ピット・溝を検出した。遺構面の時期は平安～鎌倉時代と考えられる。

SD01 調査区西端で検出した北西～南東方向の溝である。長さ約4.5m、幅約60cm、深さ6cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、土師器・須恵器の小片が出土している。

SD14 調査区中央西側で検出した溝でSD01を切る。長さ約4.2m、幅約50cm、深さ約12cmで、埋土は暗褐色砂質土である。土師器・須恵器が出土している。

SD16 調査区東南部で検出した溝である。長さ約3.8m、幅50～90cm、深さ10cm弱、埋土は褐灰色細砂質土である。土師器・須恵器が出土している。

第3遺構面

土師器・須恵器などを含む褐灰色粗砂（質土）を掘削後に、灰黃褐色粗砂質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は北側で約16.9m、南側で約16.4mを測る。土坑・ピット・溝を検出した。北端部は遺物包含層がなく、すでに第2遺構面で確認できた遺構も存在するが、埋土等の状況から第3遺構面として調査を行った。遺構面の時期は縄文時代後期～平安時代と考えられる。

SK02 調査区西北部で検出した土坑である。約1.9×1.7mの不整円形で、深さ約20cmを測る。埋土は灰黃褐色砂質土で、土師器・須恵器・弥生土器・サヌカイト片が出土した。

SK04 調査区西北部で検出した土坑である。長径1.9m、短径1.35mの隅円長方形で、深さ約10cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で、土師器・弥生土器・縄文土器・サヌカイト片が出土した。

SK07 調査区東北部で検出した土坑である。長径約2.1m、短径約1.5mの梢円形で、深さ約20cmを測る。埋土はオリーブ褐色砂質土で、土師器・縄文土器（？）・サヌカイト片が出土している。

SK08 調査区東北部で検出した土坑である。東半は攪乱のため不明であるが、南北方向約1.75m、深さ19cmを測る。埋土は上層が黒褐色砂質土、下層が極暗赤褐色砂質土で、弥生土器・縄文土器・サヌカイト片が出土している。

SK09 調査区東北部で検出した土坑である。SK07とSK08に切られる。深さ18cmを測り、埋土は黒褐色砂質土であ

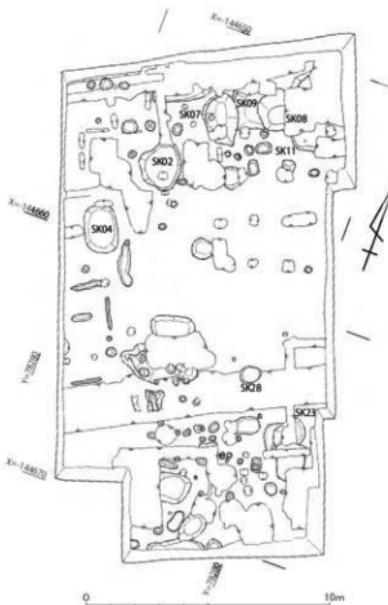


fig.119 第3遺構面平面図

る。弥生土器・縄文土器・サスカイト片と石錘が出土した。

SK11 調査区東北部で検出した土坑である。東側と北側が搅乱を受けており、全体の形状等は不明である。深さ14cmを測る。埋土は極暗赤褐色砂質土で、弥生土器・縄文土器・サスカイト片が出土している。

SK23 調査区東南部で検出した土坑である。上部は削平を受けているものの、長径約1.3m、短径約1.1m、深さ約50cmを測る。黒褐色砂質土の埋土からは、縄文土器・サスカイト片などが出土した。また、縄文土器が底部から若干浮いた状態でまとまって出土した。

SK28 調査区南半で検出した土坑である。平面は長径85cm、短径75cmの楕円形で、深さ43cmを測る。埋土は灰黄褐色～黒褐色砂質土で、縄文土器を包含する土がブロック状に堆積した様相を呈す。下層からまとまって縄文土器が出土したほか、サスカイト片も出土した。

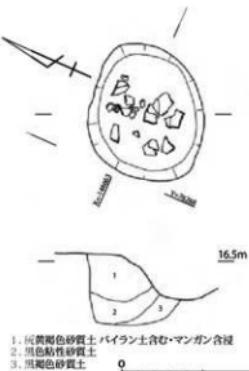


fig.120 SK28 平・断面図

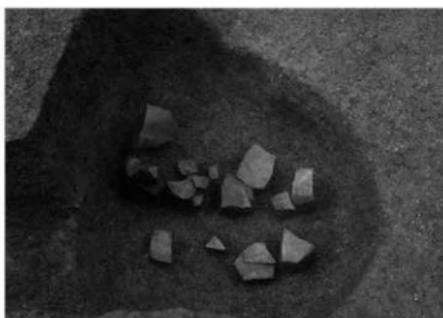


fig.121 SK28 (西から)

灰黄色細砂～砂質土

遺物包含層である灰黄褐色粗砂質土を掘り下げて灰黄色細砂～砂質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は最北部で約16.6m、南側で約16.2mを測る。南半の2区でのみ検出した。上層の遺物包含層中からは縄文時代後期～弥生時代後期の土器が出土した。

この遺構面では、土坑・溝状遺構・ピットを検出した。遺構内より出土した遺物は少なく、とくに土坑は底面が凹凸であることから、斜面地に流れ込んで堆積した層で、自然面である可能性が高い。

SK37 SX03内で検出された。大部分が調査範囲外にかかるため、全容は不明であるが、深さは約45cmを測る。土坑内からは一辺が打ち割られたと考えられる石材が出土したが、出土した標高から本遺構に伴うものではなく、上層のSX03に伴う可能性が高いと考えられる。

第4 遺構面

灰黄色細砂～砂層を掘り下げて、にぶい黄褐色粗砂質土上面で検出した面である。遺構面の標高は北側で約16.8m、南側で約16.1mを測る。土坑・溝状遺構・ピット・不明落ち込みを検出したが、土坑ならびにピットのいくつかは旧地表面上の凹凸である可能性がある。各遺構より出土した遺物から、縄文時代後期に形成された遺構面と考えられる。

SK38 長辺約1.4m、短辺1.05mを測る長方形の土坑である。内部は黒褐色粘性砂質土がに

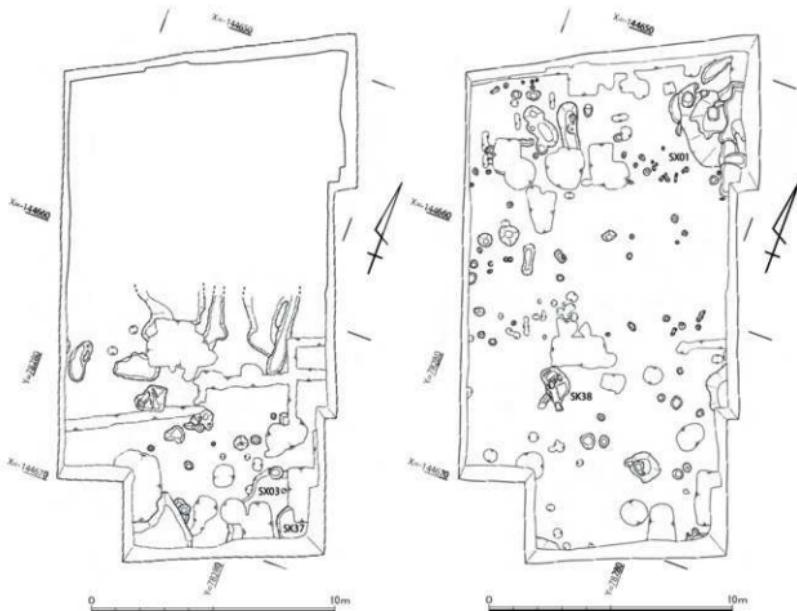


fig.122 同灰黄色粗砂～砂質土上面平面図

fig.123 第4遺構面平面図

ぶい黄褐色砂質土～粗砂質土中にもぐり込んでいるように堆積する。このため、何らかの動物による活動の痕跡と考えられる。

SX01 調査区東北部で検出した落ち込みである。東半部分が調査区外にかかるため、全容は不明であるが、復元される直径は約3.8mで、最深部は80cmを測る。断面はすり鉢状に落ち込む。土層堆積は上層～中層の暗褐色～黒褐色砂質土中より縄文土器やサスカイト片・磨石が出土した。本遺構は、形状や規模、土層の堆積状況から何らかの人為的造作以外の痕跡の可能性もあり、性格は不明である。

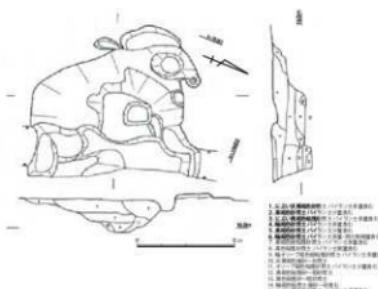


fig.124 第4遺構面 SX01 平・断面図



fig.125 1区第4遺構面 SX01 (北西から)

下層確認トレンチ

SK38 の断ち割り調査中、第4 遺構面より約 80cm 下層から土器が出土したため、下層に遺構および人為的活動痕跡の有無を確認する目的で、調査区南半の南北方向にトレンチを設定し、下層確認を行った。

その結果、砂質土、シルト、粘質土が北側から南側に流れ込むように堆積している状況を確認した。トレンチ最下層（標高約 14.3 m）では堅緻な黄褐色粘質土を検出しており、この層が本来の地山層と推測される。

褐色粘性粗砂質土とぶい黄橙色シルト層からごくわずかに土器が出土した。しかし下層確認トレンチ内では遺構は検出されないことや土層の堆積状況から、出土した土器は本調査地点より高所の地点からの流れ込みと考えられ、層序も上方からの流れ込み堆積であることが判明した。

3.まとめ

今回の調査では、縄文時代から中世にかけての土器や石器など多くの遺物と、土坑・ピット・溝などの遺構が確認された。

縄文時代の資料としては、土器の量は第4次調査ほど多くないものの、時期としては後期の元住吉山式を中心とするものと考えられる。遺物包含層などからは平行沈線に連弧文が伴う資料や、注口土器などが出土しているほか、SK28 からは後期の粗製深鉢と考えられる資料が出土した。

石器では、磨石、石錘などの礫石器が確認されたほか、サスカイト製石鉋が 20 点以上出土している。サスカイト片は破片、剥片のほかに石核状の破片も存在し、近隣での石器製作がうかがえる資料である。

弥生時代は、既存の調査でも遺構が希薄な部分に近接しており、遺物は少量出土したもの明確な遺構を捉えることはできなかった。

古墳時代は、第4次調査で掘立柱建物が数棟検出された地区に近接するが、今回の調査では建物および柱穴等は確認されなかった。

奈良～平安時代の資料は、遺物がわずかであり、建物等は確認されていない。

鎌倉時代以降は、耕作地として利用されていたと考えられるが、染付等の近世の遺物はなく、耕作とそれに伴う造成の時期については詳らかではない。

遺物の詳細な観察・検討を加えていないため、時期をはじめとした内容に不明な部分が多いが、今回の調査では第4次調査や第8次調査、あるいは花隈城跡第5次調査などの調査成果を補強する形で、遺物の時期や建物の分布状況などを捉えることができた。

遺物は傾斜地であるがゆえに上方からの流れ込みが多く、特に上層は縄文時代から中世までの遺物が混在している状況であった。また、調査地のすぐ南側が比高差 3 m ほどの崖面になっており、住居や建物群が展開する場所ではなかったものと考えられる。



fig.126 1区第1遺構面（北東から）



fig.127 2区第1遺構面（北東から）



fig.128 1区第2遺構面（北東から）



fig.129 2区第2遺構面（北東から）



fig.130 1区第3遺構面（北東から）



fig.131 2区第3遺構面（北東から）



fig.132 1区第4遺構面（北東から）



fig.133 2区第4遺構面（北東から）

12. 楠・荒田町遺跡 第60次調査

1.はじめに

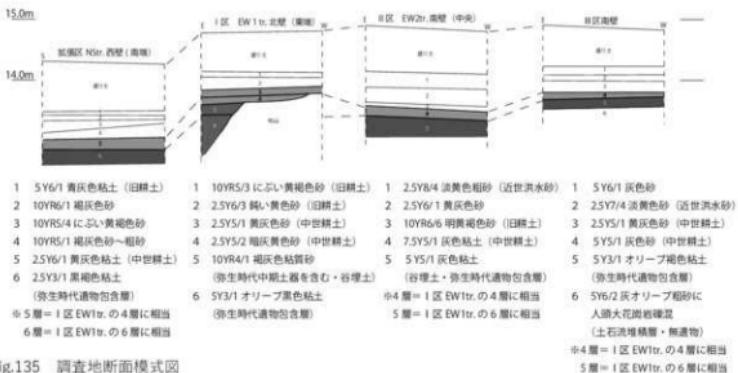
楠・荒田町遺跡は六甲山南麓の中位段丘裾に立地する複合遺跡で、その存続期間は縄文時代中期から室町時代までと長期にわたる。平成30年時点で59次に及ぶ発掘調査が実施され、今回の調査が第60次となる。遺跡の最盛期は弥生時代と平安時代末期の二時期と考えられているが、殊に後者については、平清盛が福原山荘（奥平野付近）を営み、これを前史として後年京の都に代わる新都造営を構想した地である事で広く知られる。福原京を含めた摂津国八部郡一帯は、応保2年（1162）の検注と押領以来、畿内で最も深く平氏勢力が浸透した地のひとつで、新都造営の地と推定される段丘上およびその周辺は、以前より福原荘の荘域であった。

一方弥生時代に関しては、前期段階に段丘南辺部に集中していた遺構が次第に北進し、中期前半には段丘北東部、中期後半には段丘北西部へと展開して集落が大規模化することが既済発掘調査によって判明している。中でも今回調査地の西隣で行われた第16次調査では、段丘から一段下がる裾部を幅7mと2mの溝で区画し、その内部に掘立柱建物群が建ち並ぶ空間の存在したことが明らかとなっている。

第16次調査の区画溝SD02および掘立柱建物群は、北から西へ45度程度振れる軸方向を共有し、かつ建物同士は独立棟持柱を有する梁行2間×桁行8間の大型掘立柱建物SB09を主体として一列に並ぶなど、楠・荒田町遺跡における弥生時代中期後半の中心施設と評価すべきものである。



fig.134 調査地位置図 1:2,500



(第 60 次 - 1)

2. 調査の概要

今回の調査は仮設消防庁舎建設に伴うものである。工事影響深度以下の堆積層については、遺跡の存在が予測された場合でも調査は行わず現状保存した。

工程の便宜上、調査区全体を複数のトレチに分割し、I区～III区として順次着手している。各調査区の呼称は (fig.136) に示す通りで、調査の結果、当該地はおおむね以下の 3種の堆積状況に分かれる判明した。

- ① 工事影響深度より約 40cm 前後高いレベルで、室町時代を主体とし一部鎌倉時代の土器を包含する耕作層、および、その直下にバイラン土壤の地山層が堆積する範囲 (弥生時代遺物包含層は存在しない) I区 NS3tr. II区 NS3tr. III区
- ② ①の耕作層の下位において、工事影響深度とほぼ同じ高さで弥生時代中期の遺物包含層の堆積が認められる範囲 (地山のレベルは不明) I区 EW1tr. EW3tr. 拡張区 NS.EW.tr. II区 NS1tr. EW2tr. EW3tr.
- ③ ①の耕作層が工事影響深度より深くまで堆積し、下層の確認に至らなかった範囲 II区 NS1tr.

なお上記分類のいずれにも該当しないトレチでは、工事影響深度まで近現代搅乱層が続いて今回の建物基礎が遺跡に達しないことを確認し、調査を終了している。

基本層序

当該調査地は東から西へ、また北から南へ下がる緩斜面地である。この地形に起因し、現況地盤以下の土層堆積状況は調査区の東西南北各箇所で互いに若干の差異を示すが、基本層序は以下の通りである。

東端断面： 1 =公園グランド盛り土および近現代搅乱層 2 =江戸時代耕作土層 3 =中世耕作土層 (2層程度) 4 =バイラン土層 (地山)

西端断面： 1～3 =東端に同じ 4 =無し 5 =弥生時代遺物包含層 5以下層は不明

中世耕作土の検出標高は、調査地北端で 13.95 m 前後、調査区南端では 13.65 m 前後を測り、東端では 13.85 m、西端では 13.2 m 前後である。最大比高差は東西方向の 65cm 程度で、南北方向は 30cm 程度の緩傾斜となる。ここから導き出される旧地形は、現在の荒田公園の地形

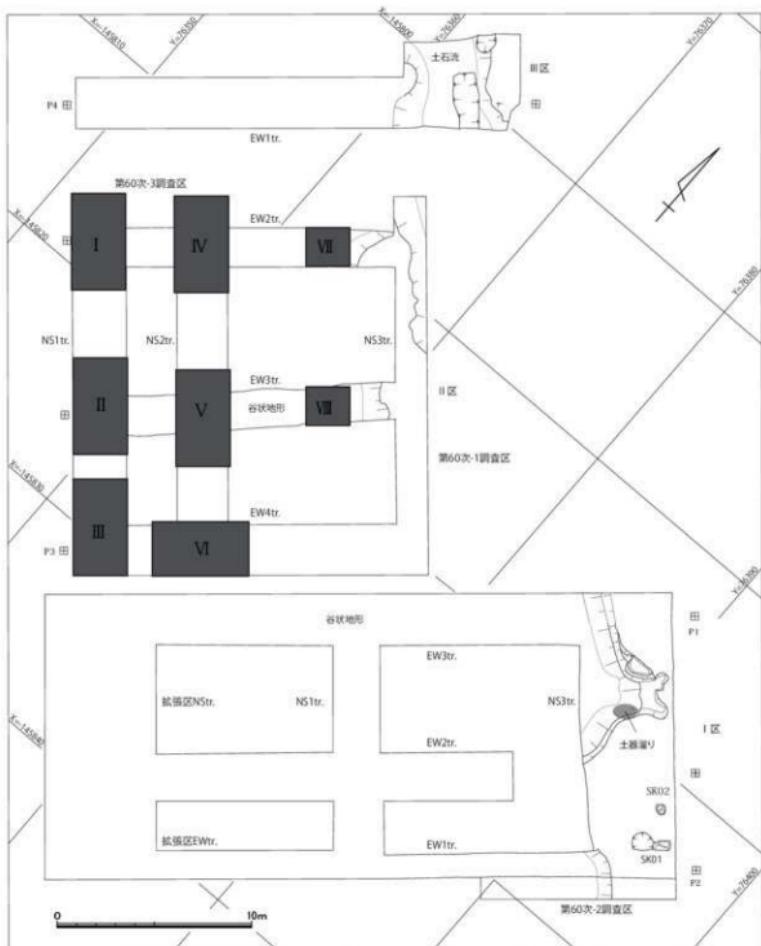


fig.136 調査区全景図

に近い。一方、その下位に堆積する弥生時代遺物包含層は、検出範囲東端の標高が13.65mであるのに対し、調査区西端では12.85m、南北方向では、調査区北端で13.75m、調査区南端で12.85mと、比高差は90~80cmと中世耕作土よりも比高差が大きい。このことから現在の荒田公園周辺の地形は中世耕作土の示す室町時代（15世紀頃）まで遡及できるが、弥生時代中期までさかのぼると、現況とは異なる急斜面であったと考えられる。この地形はI区の中央部付近を要として西へ下がる扇形平面を呈する谷状地形と推定される。扇形の要部分を境に以東では中世耕作土直下で地山層となり弥生時代遺物包含層は認められず、逆に以西では、中世耕作土直下に谷埋土最上層として濃密な弥生時代遺物包含層の堆積が唐突に始まり、工事影響深度以下まで続く。この事実は、中世段階で耕作地を整えるため本来の自然地形である谷の頂部が削平され、当時の整地レベルより深い範囲にのみ削平を免れた弥生時代の遺物包含層が残存したことを表すもので、弥生時代の地形は、中世の耕地開墾によって大きく改変されたことがわかる。

その他調査地北東端で、弥生時代中期の遺物包含層より下位に、地山層を切り込む土石流堆積物を一部確認している。土石流堆積層はおむね北方向から南へと向かい、流れの中心は今回の調査対象範囲より東側と考えられる。

検出遺構

I区NS3tr.で地山上に土坑状の落ち込みを二か所検出しているが不定形で遺物も含まず、自然地形の可能性がある。

3.まとめ

弥生時代 今回検出した扇形の谷は、弥生時代の状態を留めるものではなく、谷の頂部が中世に削平され改変された地形である。埋土最上層上面で調査が終了したこともあり、谷内部の弥生時代当時の状況は不明だが、前述の第16次調査の調査結果と比較することで、ある程度類推可能である。

第16次調査では、弥生時代の建物群の敷地を区画する溝SD02が、北から流入した厚い包含層によって埋没していると指摘されている。遺物包含層から出土する土器は第III様式末を一部含む第IV様式初頭で、今回調査地で確認した谷状地形上層出土の遺物と同時期と考えられる。以上の点から、今回調査地周辺は、第16次調査で確認された掘立柱建物群の並ぶ区画より一段高い土地で、遺物包含層の由来となる遺構群が存在した可能性がある。ただし集落居住域が主に営まれた段丘上よりは低く、両者の中間的な土地と考えられる。段丘上と第16次調査地点を結ぶこの範囲が斜面地であるのか、段状をなしていたかは不明である。

ここで問題となるのは、第16次調査における掘立柱建物群が、西に旧湊川の本流を配する、集落内でも最も低地に属する範囲に設けられている点である。通説では、弥生時代における棟持柱構造の建築物は、拠点的集落の中心施設に用いられるとされ、居館や宗教施設といった性格が想定されることが多い。しかしこの説を当遺跡の例に敷衍した場合、そのような集団階層内における上位施設の立地として、段丘裾の低地を選ぶ事への疑問が当然持たれる。同様の現象は楠・荒田町遺跡における方形周溝墓群が、段丘南裾に沿うように東西に延びるという事象にも表れており、慣用句的に「段丘上の集落」と讀われながら、その実楠・荒田町遺跡においては、弥生時代の土地利用は微高地上のみではなく、標高10m前後で推移する段丘裾部も含めた高低差を内包する領域内に、墓域や居住域、第16次調査のごとき特殊な施設がそれぞれ配置されているのである。



fig.137 1区 EW3tr. 完掘状況 (東から)



fig.139 1区 谷状地形検出状況 (NS3tr.) (北から)



fig.138 調査区北西端 (2区 NS1tr.) 包含層検出状況 (南から)

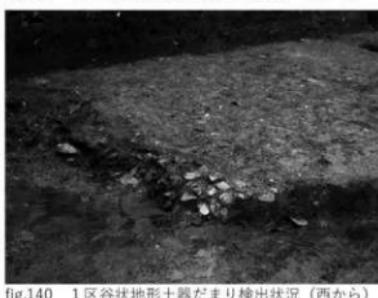


fig.140 1区 谷状地形土器だまり検出状況 (西から)



fig.141 調査区北西壁土層堆積状況

中世 中世段階での当該地の様相は、調査地全域におよぶ広範な耕作地であったと判断される。冒頭で述べたように、鎌倉時代から室町時代には、調査地を含む一帯は福原荘の荘域であった。今回の耕地も福原莊関連の農地と判断するのが妥当であろう。周辺既済調査区で確認されている同時代の建物、墓地などと合わせて、中世莊園の景観復元作業に不可欠な情報である。

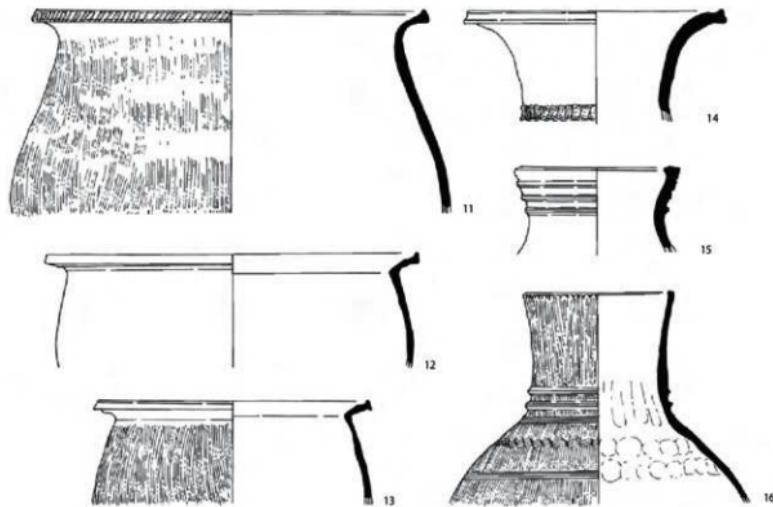
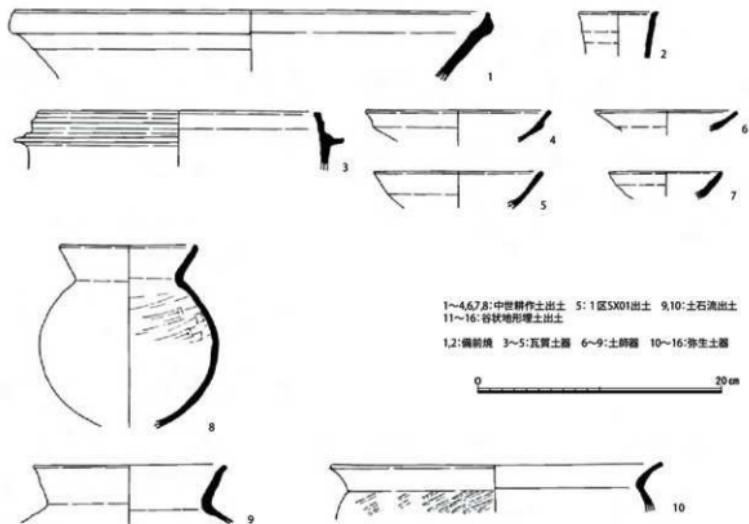


fig.142 出土土器実測図 (1: 4)

(第60次-2調査)

第60次-1調査完了後、建物の設計変更により新たに遺跡が影響を受ける範囲について調査を実施する事になった。今回の調査対象地は、第60次-1調査I区南東部分の南側に隣接する約15mである。

2. 調査の概要

幅約1.5m、全長10mの調査区を設定し、重機と人力により調査を実施した。調査の結果、I区NS3tr.およびEW1tr.と同様の堆積であり、谷状地形が南東方向に続いている状況を確認した。弥生時代中期の遺物は、谷状地形内でのみ出土し、東側の中世耕作面下層では出土しなかった。谷状地形以外の掘削は、中世耕作土直下の地山面まで実施し、谷状地形内の掘削は、工事影響深度(13.05m)までに留め、調査を完了した。

3. まとめ

谷状地形以外には弥生時代中期の遺物包含層が存在しないことから、前回の第60次-1調査成果の通り、弥生時代中期の地形は、中世の耕地開墾によって改変されている事を追認した。



fig.143 調査区全景（北東から）



fig.144 同左（北から）

(第60次-3調査)

今回の調査は第60次-2調査完了後、再度設計変更が生じたために消防庁舎北棟に対して実施したもので、I～VIトレンチまでは8m程度、VIIおよびVIIIは4m程度で調査区を設定した。各調査区位置は、fig.136に示す通りである。

2. 調査の概要

IおよびIVトレンチに関しては、前回調査で、梁底の標高13.05m地点まで旧耕作土の堆積を確認していた。今回の調査では、新たに13.05m以下12.5mまでの範囲に旧耕作土直下で弥生土器を含む土石流層を確認した。

それ以外のトレンチに関しては、13.05mから12.5mまでの範囲に、1黑色系粘質土・2青灰色系シルト・3土石流層の順に堆積している。いずれの層からも弥生土器が出土する。標高12.5mまでの調査で、遺構面に達したトレンチはない。

3. まとめ

今回の調査によって、第60次-1調査で得た知見に変更はない。今後建設予定の仮設消防庁舎北棟のうち、最東端の南北梁が施工される部分以外は、すべて谷状地形の中である。

谷の北翼にあたる I、VIトレンチの部分では、谷の最終堆積層とみられる黒褐色系粘土およびその直下層の青灰色系シルト（古墳時代初頭から弥生時代中期までの土器を包含する）は、中世段階に削平され耕作土に置換されている。それ以外のトレンチでは、上記最終堆積層群の直下に、弥生土器を含む土石流層が存在する。調査区全体を俯瞰した場合、地形は荒田駐車場の方向に傾斜しており、谷内部の堆積層も、駐車場方向ほど濃密に土器を包含するようである。



fig.145 トレンチ II



fig.146 トレンチ VII

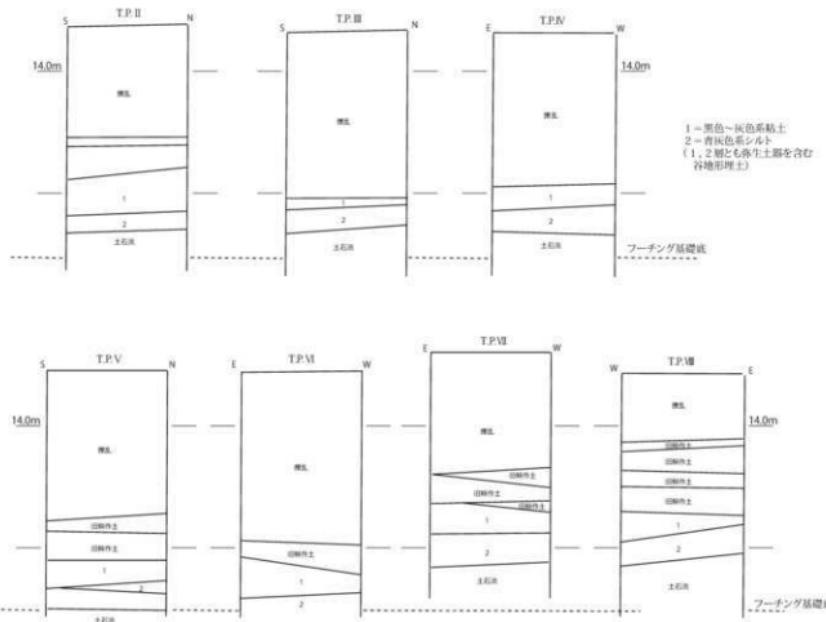


fig.147 調査地断面模式図

13. 楠・荒田町遺跡 第61次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、六甲山南麓に広がる平野部の西半部、旧湊川によって形成された扇状地と、中位段丘上に立地する遺跡である。遺跡の周囲は、六甲山系から派生した尾根と谷地形による起伏の多い地形であり、南東側に向かって緩やかに傾斜している。昭和52年度（1977）に地下鉄建設工事に伴う調査によって発見され、発見当初は中央区楠町と兵庫区荒田町にまたがることから両町名をとって命名されたが、現在は中央区橋通・多聞通、兵庫区下祇園町・馬場町・西上橋通・西多聞通まで広がることが確認されている。

昭和53年度（1978）に最初の調査が行われ、現在までに60次を数える。調査開始当初は弥生時代前期の集落として認識されたが、これまでの成果から縄文時代中期から中世にいたる複合遺跡であることが判明している。とくに、弥生時代前期～中期に比定される竪穴建物、掘立柱建物、方形周溝墓、木棺墓、貯蔵穴などが多数検出されており、この時期の西摂地域における大規模集落の1つとして認識されている。また、平安時代末期に造営された福原京の京城の一部と推定されており、神戸大学医学部附属病院構内で平成22年度（2010）に行われた第46次調査で検出された二重壕がこれに関連する遺構と考えられている。

今回の調査は、共同住宅建設に伴う工事によって遺跡に影響が及ぶ範囲の発掘調査を行った。本調査地点は、平成24年度（2012）に行った第54次調査地点の南隣に位置している。第54次調査では、弥生時代中期の溝とそれに伴う弥生土器が出土しており、当該期における土器様式を把握するうえで、良好な資料を提供している。この他、12世紀後半～末頃の遺物が出土した。このため、今回はこれらと関連する遺構・遺物の発見が想定された。



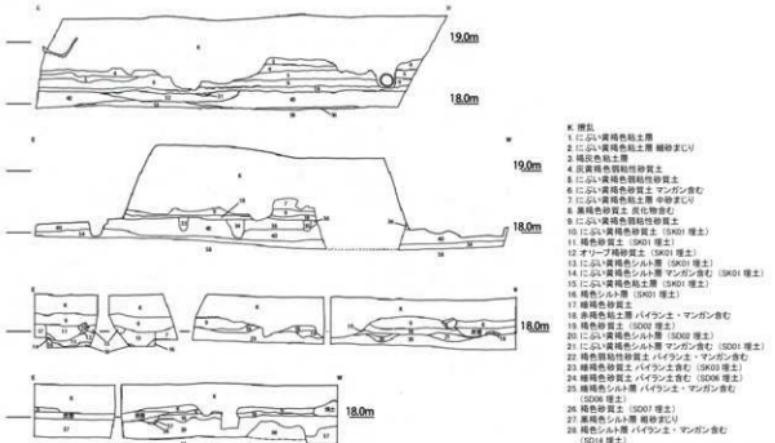
fig.148 調査位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査では、共同住宅建設予定地点のうち、柱基礎部分と地中梁部分にあたる約 170 m²を調査対象として発掘調査を実施した。調査区は3分割し、南側を1区、中央部を2区、北側を3区として調査を行った。

基本層序 現況地表面の標高は1区ならびに2区では標高 19.4 m 前後、一段下がった3区では標高 18.5 m 前後をそれぞれ測る。明治時代に建築された煉瓦造り建物の基礎部分や第二次世界大戦時の空襲に伴うと推測される焼土溜まり、その後の開発行為による搅乱ならびに盛土の影響が大きく、構造面にいたるまでの残存状況は良好とは言い難い。

調査区南壁土層断面図



調査区東壁土層断面図

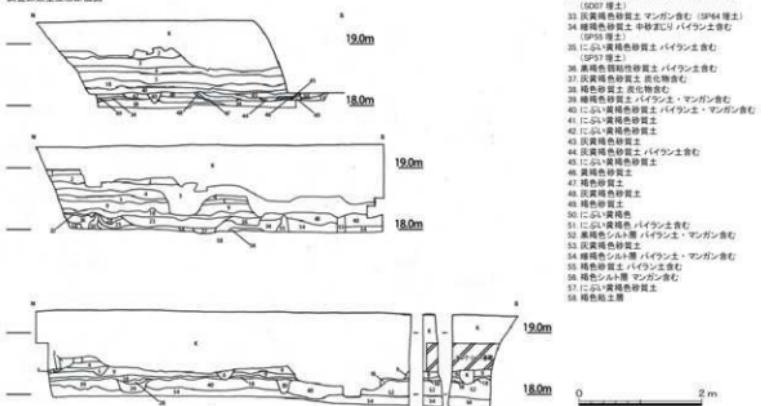


fig.149 調査区土層断面図

13. 楠・荒田町遺跡 第61次調査

各層は、北から南に緩やかに傾斜しており、層序は上層より搅乱・盛土、黄橙色粘土、褐灰色粘土、灰黃褐色弱粘性砂質土（旧耕土）、にぶい黄橙色弱粘性砂質土（旧耕土）、にぶい黄褐色弱粘性砂質土（旧耕土）、赤褐色粘土、にぶい黄褐色砂質土、暗褐色シルト、褐色粘土の順に堆積している。遺構面はにぶい黄褐色砂質土上面であり、褐色粘土層は地山と判断された。地山標高は3区で18.0m前後、1区で17.6m前後をそれぞれ測り、現況地表面から地山までの高さは約1.5mである。

遺構面 遺物包含層である赤褐色粘土層の下層であるにぶい黄褐色砂質土上面より、溝状遺構13条、土坑6基、ピット64基を検出した。それぞれの標高は、3区で18.2m前後、1区で17.9m前後を測る。なお赤褐色粘土層内からは、土師器や須恵器などの土器片や鉄製品などが出土したものの、

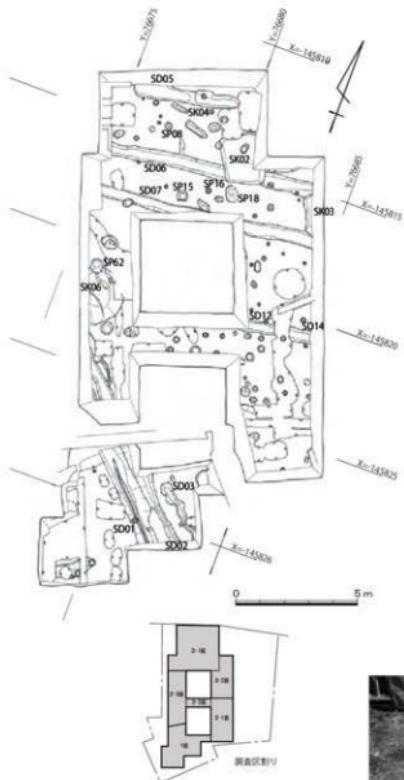


fig.150 調査区平面図



fig.151 1区全景（北から）



fig.152 2-1区全景（北から）

いずれも小破片である。そのため、年代を絞り込むことは困難であるが、室町時代以降に堆積したものと推測される。

溝状遺構 幅 50 ~ 60cm、深さ 20 ~ 30cm の溝とその他の小溝が検出された。このうち前者には、北西 - 南東方向に延びる SD01 ~ SD03、東 - 西に延びる SD05 ~ SD07・SD12 がある。これらは現況の道路区画とは平行にならず、旧地形に沿っているものと推測される。SD01 の 2 区側の底付近では須恵器甕口縁部と瓦が出土しているが、詳細な年代については不明である。全体として中世の瓦器や土師器が出土しているため、この時期が上限と考えられる。ただし、SD01 ならびに SD02 では古墳時代後期の須恵器坏身が出土するなど、前代の遺物も混在した。

土坑 形状や深さ、配置などに規則性はみられず、各々は関連しないものと考えられる。
SK01 全体の 4 分の 1 ほどの調査となつたが、直径は 1.0 m 前後に復元でき、深さは 43cm を測る。遺物の出土はみられなかった。埋土として比較的しまりの弱いシルト層や粘土層が堆積する。



fig.153 2-2区全景 (東から)



fig.154 2-3区全景 (北から)



fig.155 3-1区全景 (東から)



fig.156 3-2区全景 (北から)

SK02 長辺約1.9m、短辺1.6m、深さ10~15cm前後の土坑である。内部にSP22を含むものの、本土坑の中心には位置しておらず、両者の具体的な関係性は不明である。周囲にもSP12・18・24の各ピットが位置するが、これらとの関係性も不明である。

SK03 大部分が調査範囲外にあたるため、平面の規模は明らかではないが、最深部で45cmを測る。SD06とSD07を掘り込んで掘削されているものの年代は特定できない。

SK04 長さ69cm、幅24cm、深さ12cmをそれぞれ測る。土坑内より完形の土師器皿が7枚出土している。これらは3箇所にわかれ、うち2箇所で3枚が重なった状態で発見された。両者とも下1枚を正位、上2枚を逆位の状態で重ねていたものの、内部からは土砂のほかの物質は検出されなかった。なお、土師器皿は中世の所産と考えられる。

SK05 半分近くが調査範囲外に及ぶが、長径約1.6m、短径約90cmに復元され、最深部は9cmを測る。内部より瓦器などが出土している。

SK06 半分近くが調査範囲外にかかっているものの、推測される直径は2.96mで、深さは82cm測る大型の土坑である。本土坑に伴う出土品などではなく、年代については特定できない。

各土坑の内、SK04は地鎮などの祭祀に伴うものと推測されるもの、そのほかについては出土遺物が判然としないことも含め、いざれもその性格を特定することが困難である。

ピット それぞれ直径10~60cm、深さ10~40cm程度であるが、形状についてはさまざまである。最も大規模なものはSP62であり、直径は60cm、深さは55cmを測る。埋土は黄褐色~褐色のものと、暗褐色~黒褐色のものとがある。SP08・SP15・SP16・SP18からは礎石あるいは根石が検出された。このうち、SP08・SP15・SP18は、SP07・SP11・SP19と掘立柱建物をなしていた可能性が考えられる。その他のピットについては、関連性がみえにくく、掘立柱建物や柵列などの存在は確認できなかった。全体的にピットは東側に集中しており、とくに1区からは検出されなかった。

3.まとめ

今回の調査では、遺構面を1面確認できた。この遺構面に伴う溝状遺構内から出土した瓦器や、SK04から出土した土師器などから室町時代のものと考えられる。ただし、建物などの遺構は明確には確認できず、遺物の残存状況は良好ではないものが多数を占める。この他に弥生時代の土器片や古墳時代後期・古代の須恵器片、中世の瓦片、時期不明ではあるが陶器片や青磁片、骨片、サスカイト片などが得られた。

今回の調査地点の周辺をみてみると、北側に隣接する第54次調査地点やその北西側に位置する第29次調査地点、本調査地点から約150m南側に位置する第1次調査地点、約100m北東に位置する第14次調査地点、約200m南西に位置する第20調査地点や第44次調査地点では、弥生時代の遺構・遺物が発見されている。これに対し、本調査地点や約30m西側に位置する第33次調査地点、同約100mに位置する第39次調査地点では、弥生時代に関わる遺構や遺物は発見されておらず、空白地となっている。現状では、今回の調査地周辺が弥生時代に関する遺構・遺物の全くの空白地なのか、単に未発見であるのかについては判断しがたい。

古墳時代後期に関連する遺構としては、本調査地点から100mほど西に位置する第39次調査地点から検出された竪穴建物がある。また、第54次調査では溝内から古墳時代後期後葉～終末期前葉の須恵器环身の出土が報告されているが、今回の調査で出土した須恵器はそれよりも古い型式に属するものである。このため、この時期に数世代にまたがって存続した集落の存在を推測することができよう。

中世に関しては、第29次調査地点で溝が検出されており、第54次調査地点では軒丸瓦ならびに軒平瓦が出土していることから瓦葺建物の存在が推測されている。今回の調査でも室町時代の遺構から瓦が出土し、礎石あるいは根石と推測される石材も検出されていることから同様の状況を想定することもできる。

以上のように、本調査では楠・荒田町遺跡における各時期の集落の広がりを考えるうえで重要な成果が得られた。しかし、それらを確定するためには、今後の調査の進展を待ち、改めて検討を行う必要があろう。

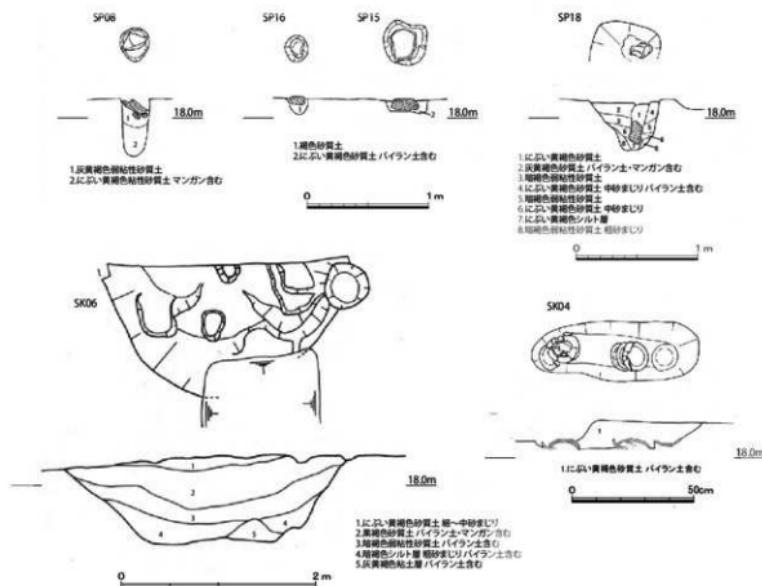


fig.157 遺構平・断面図

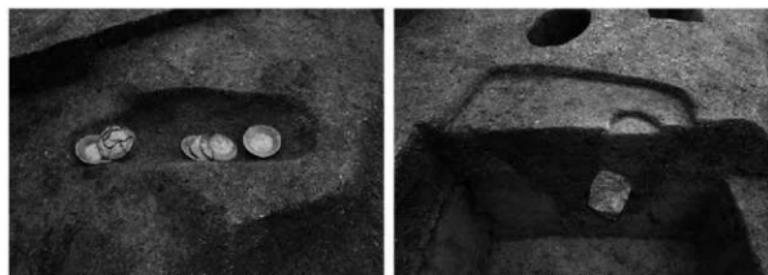


fig.158 3-1区土師器皿出土状況(南西から)

fig.159 3-1区 SP18 断面(東から)